

CA Identity Manager™

インストール ガイド (WebLogic)

12.6.4



このドキュメント（組み込みヘルプシステムおよび電子的に配布される資料を含む、以下「本ドキュメント」）は、お客様への情報提供のみを目的としたもので、日本 CA 株式会社（以下「CA」）により随時、変更または撤回されることがあります。本ドキュメントは、CA が知的財産権を有する機密情報であり、CA の事前の書面による承諾を受けずに本書の全部または一部を複写、譲渡、変更、開示、修正、複製することはできません。

本ドキュメントで言及されている CA ソフトウェア製品のライセンスを受けたユーザは、社内でユーザおよび従業員が使用する場合に限り、当該ソフトウェアに関連する本ドキュメントのコピーを妥当な部数だけ作成できます。ただし、CA のすべての著作権表示およびその説明を当該複製に添付することを条件とします。

本ドキュメントを印刷するまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、上記のライセンスが終了した場合には、お客様は本ドキュメントの全部または一部と、それらを複製したコピーのすべてを破棄したことを、CA に文書で証明する責任を負いません。

準拠法により認められる限り、CA は本ドキュメントを現状有姿のまま提供し、商品性、特定の使用目的に対する適合性、他者の権利に対して侵害のないことについて、黙示の保証も含めいかなる保証もしません。また、本ドキュメントの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の喪失等、いかなる損害（直接損害か間接損害かを問いません）が発生しても、CA はお客様または第三者に対し責任を負いません。CA がかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本ドキュメントで参照されているすべてのソフトウェア製品の使用には、該当するライセンス契約が適用され、当該ライセンス契約はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本書の制作者は CA および CA Inc. です。

「制限された権利」のもとでの提供：アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212、52.227-14 及び 52.227-19(c)(1)及び(2)、ならびに DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

Copyright © 2014 CA. All rights reserved. 本書に記載されたすべての商標、商号、サービス・マークおよびロゴは、それぞれの各社に帰属します。

CA Technologies 製品リファレンス

このマニュアルが参照している CA Technologies の製品は以下のとおりです。

- CA CloudMinder™ Identity Management
- CA ディレクトリ
- CA Identity Manager™
- CA Identity Governance（旧 CA GovernanceMinder）
- CA SiteMinder®
- CA User Activity Reporting
- CA AuthMinder™

CA への連絡先

テクニカルサポートの詳細については、弊社テクニカルサポートの Web サイト (<http://www.ca.com/jp/support/>) をご覧ください。

目次

第 1 章: インストールの概要	11
CA Identity Manager のサンプル インストール	11
例: 単一ノードインストール	12
例: 複数のエンドポイントを用いたインストール	14
例: SiteMinder および CA Identity Manager のインストール	16
高可用性インストール	17
例: 高可用性インストール	19
CA Identity Manager サーバアーキテクチャ	20
プロビジョニング コンポーネントのアーキテクチャ	20
インストールプロセスの全体	21
第 2 章: インストールの前提条件	23
インストール ステータス	23
前提条件として必要な知識	24
必須コンポーネントをインストールする方法	24
ハードウェア要件のチェック	25
CA Directory のインストール	27
FIPS 140-2 暗号化キーの作成	29
暗号化パラメータ ファイルの作成	29
(オプション) SiteMinder との統合	30
Portal データベースの作成	32
WebLogic アプリケーションサーバ	33
Solaris の要件	35
Linux の要件	36
IPv6 のサポート	37
インストール ワークシートの完了	39
UNIX およびコンソール モードのインストール	43
Non-Provisioning インストール	43
第 3 章: 単一ノードインストール	45
インストール ステータス	45
CA Identity Manager コンポーネント	46
単一ノードインストールを実行する方法	47

CA Identity Manager コンポーネントのインストール.....	47
WebLogic での CA Identity Manager サーバの起動の確認.....	49
リモートプロビジョニング マネージャの設定.....	50
オプションプロビジョニング コンポーネントのインストール.....	51

第 4 章: WebLogic クラスタでのインストール 53

インストール ステータス.....	53
WebLogic クラスタ.....	54
CA Identity Manager を WebLogic クラスタにインストールする方法.....	55
WebLogic クラスタの作成.....	55
WebLogic 用分散 JMS サーバの作成.....	61
ワークフロー用分散 JMS サーバの作成.....	62
プロキシプラグインの設定.....	63
WebLogic クラスタの起動.....	64
クラスタ化されたインストールの確認.....	65
リモートプロビジョニング マネージャの設定.....	66
オプションプロビジョニング コンポーネントのインストール.....	67

第 5 章: 個別データベース設定 69

インストール ステータス.....	69
個別データベースの作成.....	70
個別データベースを作成する方法.....	71
MS SQL Server データベース インスタンスの作成.....	71
Oracle データベース インスタンスの作成.....	72
データ ソースの編集.....	72
SQL スクリプトの実行.....	73
ワークフローのスクリプトの実行.....	75

第 6 章: レポート サーバのインストール 77

インストール ステータス.....	77
レポートिंगのアーキテクチャ.....	78
レポートの考慮事項.....	79
ハードウェア要件.....	79
レポート サーバをインストールする方法.....	80
レポートインストール前のチェックリスト.....	80
レポート情報.....	82
レポート サーバ用ポートを開く.....	83
CA レポート サーバのインストール.....	84

レジストリ スクリプトの実行.....	88
JDBC JAR ファイルのコピー	89
プロキシ サーバのバイパス	90
デフォルト レポートの展開	91
BusinessObjects XI 3.x のインストール後の手順	92
JBoss/WebLogic の CA Identity Manager およびレポート サーバ接続を保護する方法	93
レポート インストールの確認	94
サイレント インストール	94
レポートをアンインストールする方法	95
残存アイテムの削除	95

第 7 章: コネクタ サーバのインストール 97

コネクタ サーバの前提条件	97
システム要件	97
タイムゾーンの考慮事項	97
ファイルの場所	98
32 ビットおよび 64 ビット アプリケーション	98
Linux の要件	99
CA IAM CS のインストール	100
プロビジョニング サーバの登録	103
C++ Connector Server のインストール	103
CA IAM CS のサイレント インストール	104
CA IAM CS 用 SDK のインストール	105
コネクタ サンプルのインストール	105
JDBC サポートのセットアップ	106
DB2 for z/OS コネクタ用ライセンス ファイルのセットアップ	107
Sybase コネクタ用ライセンス ファイルのセットアップ	109
SQL Server コネクタの Windows 認証をセットアップ	110
コネクタのセットアップに関する詳細情報	111

第 8 章: 高可用性プロビジョニングのインストール 113

インストール ステータス	113
高可用性プロビジョニング コンポーネントをインストールする方法	114
冗長プロビジョニング ディレクトリ	114
代替プロビジョニング ディレクトリのインストール	115
プロビジョニング ディレクトリを持つシステムの再設定	117
冗長プロビジョニング サーバ	118
プロビジョニング サーバのルータ DSA	119

プロビジョニング サーバのインストール	120
プロビジョニング サーバのフェイルオーバーの設定	122
冗長コネクタ サーバ.....	123
複数のコネクタ サーバのインストール	123
コネクタ サーバフレームワーク	123
負荷分散およびフェイルオーバー.....	125
信頼性および拡張性.....	125
Multi-Platform のインストール	126
コネクタ サーバの設定.....	127
Solaris 上の C++ Connector Server	133
プロビジョニング クライアントのフェイルオーバー	133
ユーザ コンソール フェイルオーバーの有効化	134
プロビジョニング マネージャ フェイルオーバーの有効化	134
プロビジョニング マネージャ フェイルオーバーのテスト	135

付録 A: アンインストールと再インストール 137

CA Identity Manager をアンインストールする方法.....	137
管理コンソールを使用した CA Identity Manager オブジェクトの削除	138
ポリシー ストアからの CA Identity Manager スキーマの削除	138
SQL Policy Store からの CA Identity Manager スキーマの削除.....	138
LDAP ポリシー ストアからの CA Identity Manager スキーマの削除.....	139
CA Identity Manager ソフトウェア コンポーネントのアンインストール	140
WebLogic からの CA Identity Manager の削除.....	142
CA Identity Manager の再インストール.....	143

付録 B: 無人インストール 145

Administrative UI の無人インストールを実行する方法	145
設定ファイルの変更.....	145
初期選択.....	146
プロビジョニング コンポーネント	147
CA Identity Manager サーバ	147
SiteMinder の拡張機能.....	149
設定ファイルの形式.....	150

付録 C: インストール ログ ファイル 155

Windows のログオンファイル.....	155
UNIX のログ ファイル.....	156

第 1 章: インストールの概要

このガイドは、CA Identity Manager をインストールするための手順を提供し、プロビジョニングと CA SiteMinder などの、インストールのオプション コンポーネントについても説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[CA Identity Manager のサンプルインストール \(P. 11\)](#)

[例: 単一ノードインストール \(P. 12\)](#)

[例: 複数のエンドポイントを用いたインストール \(P. 14\)](#)

[例: SiteMinder および CA Identity Manager のインストール \(P. 16\)](#)

[高可用性インストール \(P. 17\)](#)

[インストールプロセスの全体 \(P. 21\)](#)

CA Identity Manager のサンプル インストール

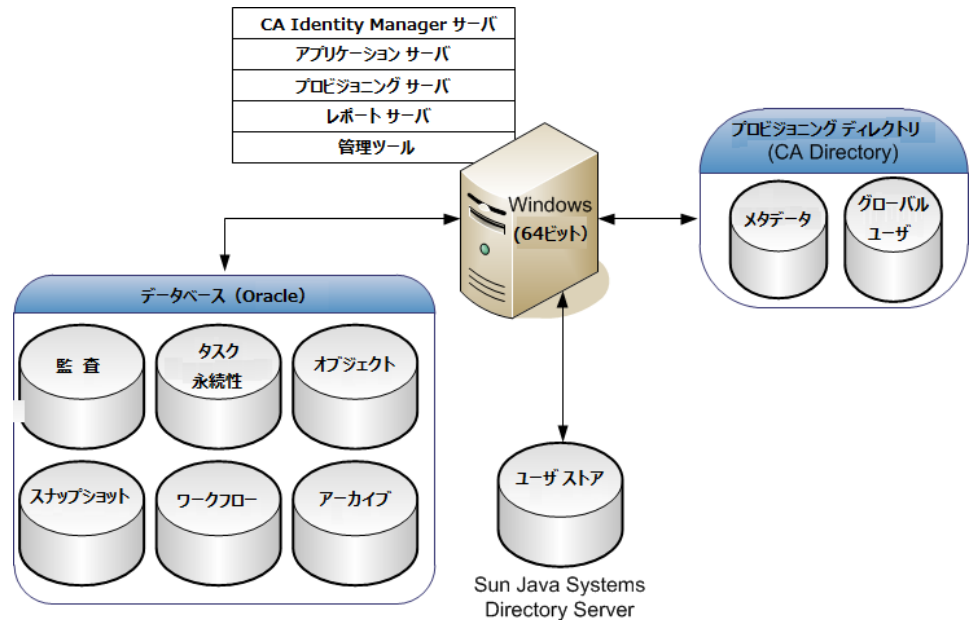
CA Identity Manager では、ユーザの ID と、エンドポイント システムのアプリケーションおよびアカウントに対するユーザ アクセスを制御できます。必要とする機能に基づいて、インストールする CA Identity Manager コンポーネントを選択します。

すべての CA Identity Manager インストールで、CA Identity Manager サーバはアプリケーションサーバにインストールされます。その他の必要なコンポーネントは CA Identity Manager インストーラを使用してインストールします。

以降のセクションでは、高レベルでの CA Identity Manager の実装例を示します。

例：単一ノード インストール

単一ノードインストールでは、1つのアプリケーションサーバノード上に CA Identity Manager サーバがインストールされます。また、各プロビジョニングコンポーネントの1つのコピーがインストールされますが、コンポーネントは異なるシステム上にインストールできます。以下の図は、単一ノードへの CA Identity Manager インストールの例で、同じシステム上にプロビジョニングサーバ、別のシステム上にプロビジョニングディレクトリがあります。



この例は、プラットフォームの選択肢も示します。この場合は、以下が行われます。

- CA Identity Manager サーバは Windows 上にインストールされます。
- ユーザストアは Sun Java Systems Directory サーバ上にあります。
- データベースは Oracle 上にあります。

これらのプラットフォームは単なる例です。他のプラットフォームを代わりに選択できます。

CA Identity Manager サーバ

CA Identity Manager 内のタスクを実行します。J2EE CA Identity Manager アプリケーションには、管理コンソール（環境設定用）およびユーザコンソール（環境管理用）が含まれます。

CA Identity Manager 管理ツール

CA Identity Manager を設定および使用するためのツールおよびサンプルを提供します。ツールには、Connector Xpress、Java コネクタ サーバ SDK、設定ファイル、スクリプト、ユーティリティ、および CA Identity Manager API と API サンプルと共にカスタム オブジェクトのコンパイルに使用する JAR ファイルが含まれます。プロビジョニング マネージャおよび WorkPoint Designer も管理ツールに含まれています。

ほとんどの管理ツールのデフォルトの場所は、以下のとおりです。

- **Windows** : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools
- **UNIX** : /opt/CA/IdentityManager/IAM_Suite/Identity_Manager/tools

ただし、プロビジョニング マネージャのデフォルトの場所（Windows にインストールされる場合のみ）は、以下のとおりです。

C:\Program Files\CA\Identity Manager\Provisioning Manager

注: Tools*db ディレクトリには、データベース スキーマについて説明するドキュメントも含まれます。

レポート サーバ

CA Business Intelligence を使用します。このサーバを使用してスナップショット データベースからデータを組み込みます。これには、CA Identity Manager オブジェクト ストアおよび CA Identity Manager ユーザストアからの情報が含まれます。スナップショット レポートの例は、ユーザ プロファイル レポートです。また、無効なスナップショットを応用して、レポートを作成できます。これには、監査データベースなど他のデータ ソースからのデータが含まれます。

CA Identity Manager データベース

CA Identity Manager のデータを格納します。データベースは、監査、タスク永続性、スナップショット（レポート）、ワークフロー、および CA Identity Manager オブジェクトの情報を格納します。各データベースは、リレーショナルデータベースである必要があります。

注: サポートされているリレーショナルデータベースの一覧については、[CA サポート サイト](#)で CA Identity Manager サポート マトリックスを参照してください。

CA Identity Manager ユーザ ストア

ユーザとその情報を含みます。このストアは、会社によってすでに使用中の既存ユーザストアである場合があります。このユーザストアは、LDAP データベースまたはリレーショナルデータベースの場合があります。

注: CA Identity Manager のユーザストアのセットアップの詳細については、「[設定ガイド](#)」を参照してください。

CA Identity Manager プロビジョニング サーバ

エンドポイントシステムのアカウントを管理します。同じシステムまたは別のシステムに、コネクタサーバもインストールできます。これはエンドポイントに対する Java または C++ ベースのコネクタを管理します。

CA Identity Manager プロビジョニング ディレクトリ

CA Directory に対するプロビジョニング ディレクトリ スキーマを指定します。このスキーマにより CA Directory 内に Directory System Agent (DSA) をセットアップします。CA Identity Manager ユーザストアが、プロビジョニング ディレクトリである場合もあります。

CA Identity Manager プロビジョニング マネージャ

グラフィカル インターフェイスを通じてプロビジョニングサーバを管理します。このツールは、アカウント テンプレートを使用してアカウントを同期するような管理タスクに使用されます。プロビジョニング マネージャは CA Identity Manager 管理ツールの一部としてインストールされるか、またはそれらのツールとは別個にインストールできます。

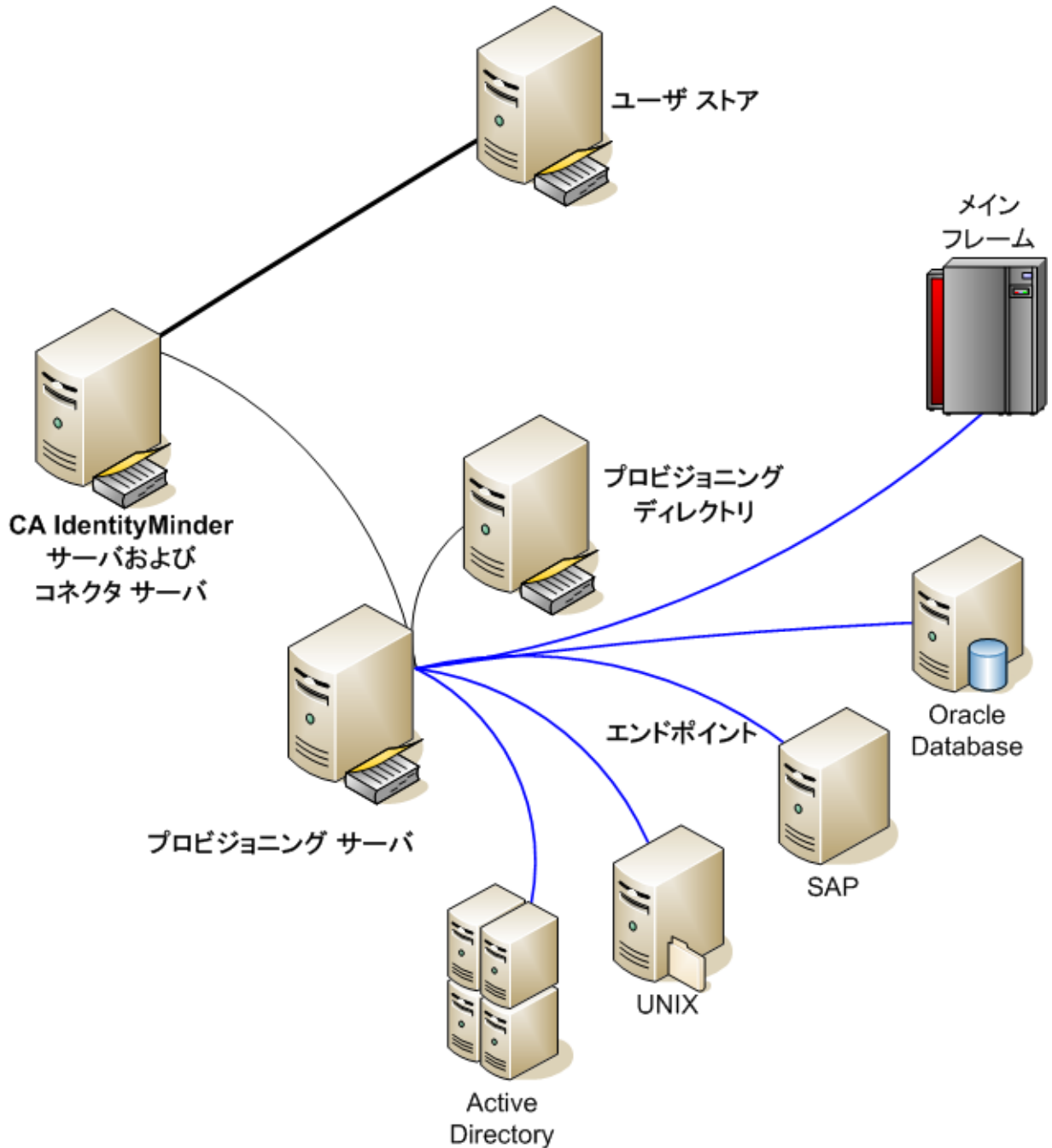
注: このアプリケーションは Windows 上でのみ実行されます。

例: 複数のエンドポイントを用いたインストール

プロビジョニングサーバのインストールによって、管理者は電子メールサーバ、データベース、他のアプリケーションなどのエンドポイントのアカウントをエンドユーザに提供できるようになります。エンドポイントシステムと通信するには、SAP コネクタなど、エンドポイント固有のコネクタ用のコネクタサーバをインストールします。

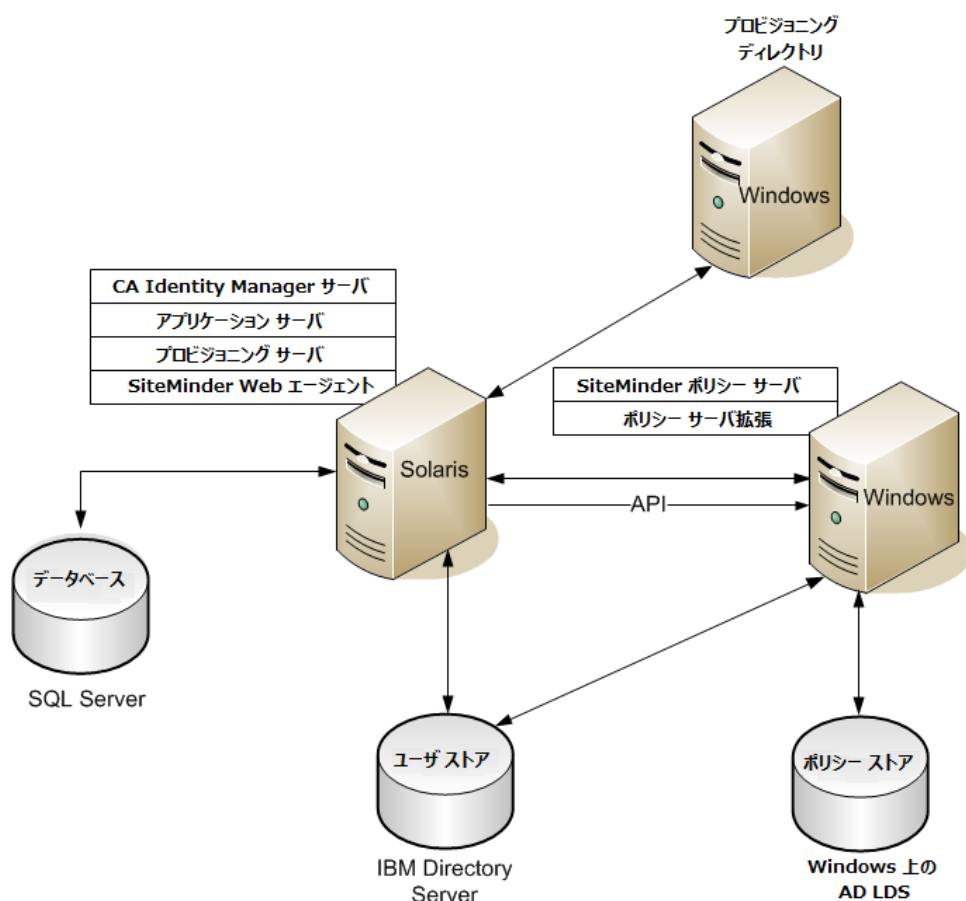
標準インストールシナリオでは、ユーザストアおよびプロビジョニングディレクトリ用の個別のシステムを含み、引き続き同期化されます。

この例では、CA Identity Manager を使用して、Active Directory、UNIX、SAP、Oracle、およびメインフレーム システムのアカウントへのアクセスを提供する方法を示します。



例：SiteMinder および CA Identity Manager のインストール

CA Identity Manager は SiteMinder ポリシー サーバと統合でき、これによりユーザー環境に高度な認証および保護を提供します。以下の図は、認証と認可用の CA SiteMinder ポリシー サーバを使用した CA Identity Manager インストールの例です。



SiteMinder 要素は以下のように定義されます。

SiteMinder Web エージェント

SiteMinder ポリシー サーバと連携して、ユーザ コンソールを保護します。CA Identity Manager サーバを有するシステムにインストールされます。

SiteMinder ポリシー サーバ

CA Identity Manager 用の高度な認証と認可、およびパスワード サービスやシングルサインオンなどの機能を提供します。

SiteMinder ポリシー サーバの拡張

SiteMinder ポリシー サーバが CA Identity Manager をサポートできるようにします。CA Identity Manager 実装において、各 SiteMinder ポリシー サーバシステムに拡張機能をインストールします。

CA Identity Manager コンポーネントは、前の例の単一ノードインストールで定義されています。ただし、この例では、異なるプラットフォームにコンポーネントがインストールされます。CA Identity Manager データベースは、Microsoft SQL Server 上にあり、ユーザストアは IBM Directory Server 上にあります。SiteMinder ポリシー ストアは Windows 上の AD LDS にあります。Windows はポリシー ストアにサポートされている複数のプラットフォームのうちの 1 つです。

高可用性インストール

CA Identity Manager をインストールする前に、実装の目標を考慮してください。たとえば、1 つの目標は、一貫して優れたパフォーマンスを提供する回復力の実装です。別の目標としては、拡張性です。

高可用性実装は以下の機能を提供します。

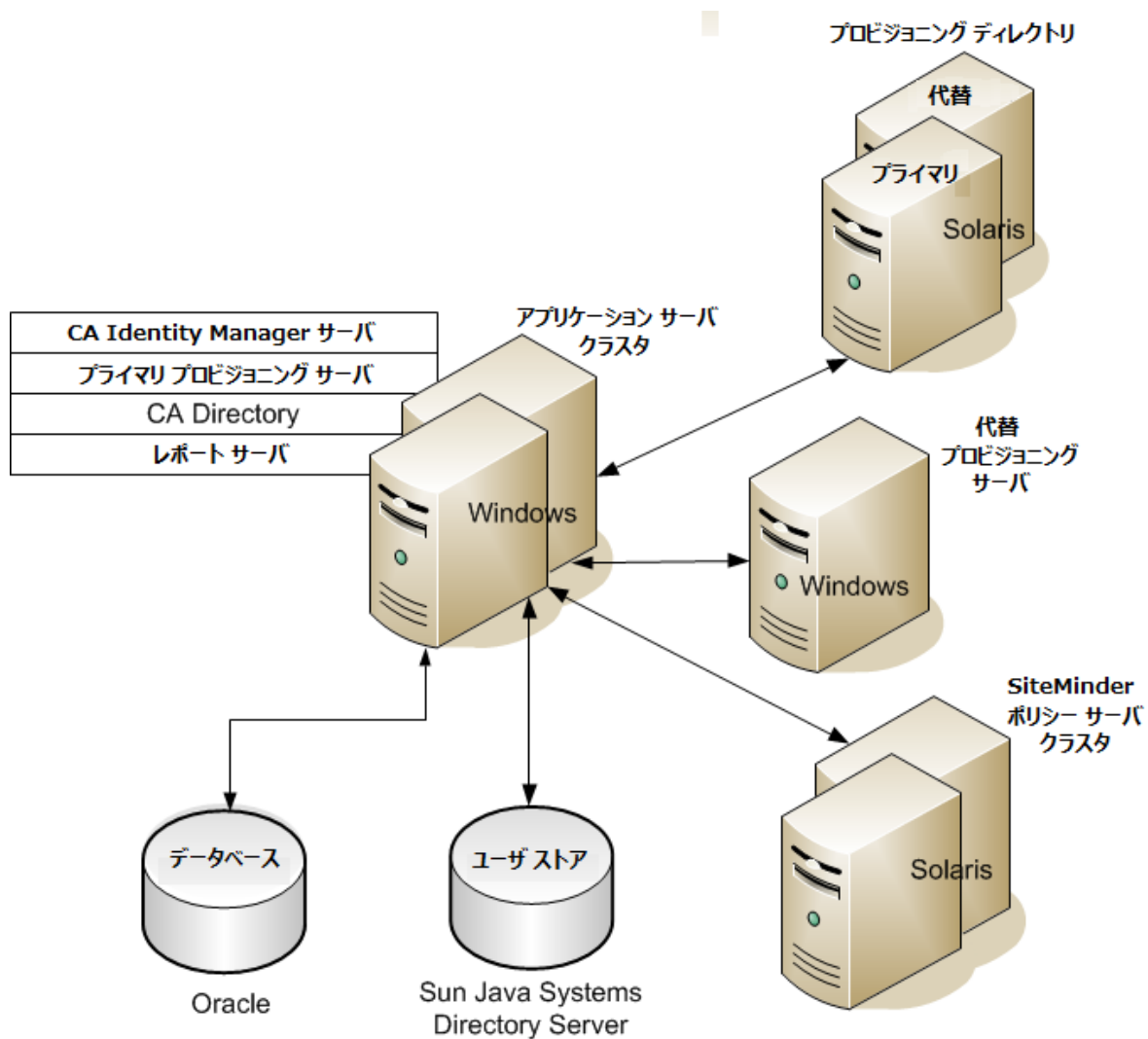
- フェイルオーバー -- プライマリ システムが故障するか、または何らかの理由で一時的にオフラインになった場合、別のシステムに自動的に切り替えます。
- 負荷分散 -- 優れたパフォーマンスが維持され、単一のデバイスが圧倒されることがないように、コンピュータ ネットワーク全体に処理および通信アクティビティを平等に配布します。
- さまざまな展開層が動的なビジネス要件に役立つ柔軟性を提供します。

これらの高可用性機能を提供するために、以下の実装オプションが存在します。

- **CA Identity Manager** サーバがアプリケーションサーバクラスタにインストールされて、クラスタ内のノードへのフェイルオーバーを可能にし、中断されないアクセスをユーザに提供します。アプリケーションサーバは **64** ビット形式も可能で、これは **32** ビット アプリケーションサーバより高いパフォーマンスを提供します。
- プロビジョニングサーバは、**CA Directory** ルータを使用してプロビジョニングディレクトリにトラフィックをルーティングします。
- **CA Identity Manager** には、ディレクトリまたは管理対象システムごとに設定するコネクタサーバが含まれます。複数のコネクタサーバのインストールにより、回復力が向上します。各コネクタサーバも **LDAP** サーバであり、プロビジョニングサーバと同様です。

例: 高可用性インストール

以下の図は、CA Identity Manager サーバ、プロビジョニングサーバ、プロビジョニングディレクトリ、および SiteMinder ポリシーサーバに高可用性を提供する例です。代替コンポーネントおよびクラスタの使用により、高可用性機能を提供します。



この図は高可用性を示し、SiteMinder の図と対照させて、コンポーネントに使用される異なるプラットフォームを示しています。たとえば、データベースは、前の図で示された Microsoft SQL Server の代わりに Oracle を使用しています。

CA Identity Manager サーバアーキテクチャ

CA Identity Manager 実装は、下記の 3 層を含む、ハードウェアとソフトウェアの組み合わせを含む多層環境にまたがる場合があります。

- Web サーバ層
- アプリケーションサーバ層
- ポリシーサーバ層 (オプション)

各層は、同じ機能を実行してその層の作業負荷を共有するサーバのクラスタを含むことができます。各クラスタを別々に設定するので、必要な場所のみサーバを追加できます。たとえば、クラスタ化された CA Identity Manager 実装では、複数のシステムを持つグループはすべて、CA Identity Manager サーバをインストールできます。これらのシステムは、CA Identity Manager サーバが実行した作業を共有します。

注: 異なるクラスタからのノードが同じシステム上に存在できます。たとえば、アプリケーションサーバノードを、ポリシーサーバノードと同じシステム上にインストールできます。

プロビジョニングコンポーネントのアーキテクチャ

プロビジョニングは、以下の 3 つの層で高可用性ソリューションを提供します。

- クライアント層
クライアントは、CA Identity Manager ユーザ コンソール、CA Identity Manager 管理コンソール、およびプロビジョニング マネージャです。地理的な場所、組織単位、ビジネス機能、セキュリティ要件、プロビジョニング作業負荷、または他の管理ニーズに基づいてまとめられるクライアントをグループ化できます。通常、クライアントを管理対象のエンドポイントの近くに保持することをお勧めします。
- プロビジョニングサーバ層
クライアントはそのフェイルオーバー優先順位に従って、プライマリおよび代替プロビジョニングサーバを使用します。クライアントリクエストは、最初のサーバが失敗するまで、そのサーバに送信され続けます。言いかえれば、サーバが失敗するまで、その接続はアクティブのままです。失敗した場合、クライアントは、次に利用可能なサーバを検索するために、設定済みサーバの優先順リストを確認します。

プロビジョニングサーバは、動作する複数のコネクタサーバを持つことができます。コネクタサーバはそれぞれ異なるセットのエンドポイントの操作を処理します。そのため、組織は、ネットワーク内のエンドポイントに近いシステム上にコネクタサーバを展開できます。たとえば、多数の UNIX などのエンドポイントがあるとします。このような場合は、1つのコネクタサーバを各サーバ上にインストールし、各コネクタサーバがそれぞれインストールされているサーバ上のエンドポイントのみを制御するようにします。

また、コネクタサーバをエンドポイントの近くにインストールすると、エンドポイント上のアカウント管理における遅延が軽減されます。

- **CA Directory 層** (プロビジョニングディレクトリ)

プロビジョニングサーバは、CA Directory ルータを使用して、プライマリおよび代替プロビジョニングディレクトリに優先順にリクエストを送信します。

インストールプロセスの全体

CA Identity Manager をインストールするには、以下の手順を実行します。

1. 前提条件のハードウェアおよびソフトウェアをインストールし、必要に応じてシステムを設定します。
2. CA Identity Manager サーバを単一ノードまたはアプリケーションサーバクラスターにインストールします。
3. (オプション) 個別のデータベースを設定します。
4. (オプション) レポートサーバをインストールします。
5. (オプション) 高可用性プロビジョニング機能用の代替プロビジョニングディレクトリ、代替プロビジョニングサーバ、およびコネクタサーバをインストールします。

注: 本書では、CA Identity Manager の機能またはコンポーネントのインストールまたは設定の手順のチェックリストが各章に含まれています。そのセクションのタイトルには「方法」が付いています。

第 2 章: インストールの前提条件

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストール ステータス \(P. 23\)](#)

[前提条件として必要な知識 \(P. 24\)](#)

[必須コンポーネントをインストールする方法 \(P. 24\)](#)

[UNIX およびコンソールモードのインストール \(P. 43\)](#)

[Non-Provisioning インストール \(P. 43\)](#)

インストール ステータス

以下の表は、インストールプロセスのどこにいるかユーザに示します。

現時点	インストールプロセスの手順
X	<ol style="list-style-type: none">1. 前提条件のハードウェアおよびソフトウェアをインストールし、必要なシステムを設定します。
	<ol style="list-style-type: none">2. 以下のインストールのいずれかを実行します。<ul style="list-style-type: none">■ 単一ノードインストール■ アプリケーションサーバクラスタ上のインストール
	<ol style="list-style-type: none">3. (オプション) 個別のデータベースを作成します。
	<ol style="list-style-type: none">4. (オプション) レポートサーバをインストールします。
	<ol style="list-style-type: none">5 (オプション) フェイルオーバーと負荷分散をサポートするために、代替プロビジョニングディレクトリ、代替プロビジョニングサーバ、およびコネクタサーバをインストールします。

前提条件として必要な知識

本書では、ユーザが **Java**、**J2EE 標準**、およびアプリケーションサーバ技術に精通していることを想定しています。本書では、読者が以下の技術知識を持っていることを想定しています。

- J2EE アプリケーションサーバおよび多層アーキテクチャについての理解。
- 以下などのタスクを含め、アプリケーションサーバをインストールおよび管理した経験。
 - アプリケーションサーバの起動
 - 単一ノードのインストール
 - 高可用性をサポートするためのクラスタのインストール
- リレーショナル データベースを管理した経験
- (オプション) **SiteMinder** 概念、用語、およびポリシー サーバ設定タスクについての熟知

必須コンポーネントをインストールする方法

スタンドアロンまたはクラスタのインストールに必要な **CA Identity Manager** の前提条件のハードウェアおよびソフトウェアをインストールする方法



手順

1. システムがハードウェア要件を満たしていることを確認します。
 2. **CA Directory** をインストールします。
 3. (オプション) **FIPS** キーを作成します。
 4. (オプション) 暗号化パラメータ ファイルを作成します。
 5. (オプション) **SiteMinder** と統合します
 6. データベースを作成します。
 7. アプリケーションサーバをセットアップします。
 8. **Solaris** または **Linux** にインストールする場合は、要件を満たします。
 9. **IPv6** システムにインストールする場合は、**IPv6** 要件を満たします。
 10. **CA Identity Manager** インストールプログラムに必要な情報を使って、インストールワークシートに入力します。
-

ハードウェア要件のチェック

CA Identity Manager サーバ

以下の要件は、CA Identity Manager サーバをインストールするシステムにインストールするアプリケーション サーバの要件を考慮しています。

コンポーネント	最小	推奨
CPU	Intel (またはその互換) 2.0 GHz (Windows または Red Hat Linux) 、 SPARC 1.5 GHz (Solaris) または POWER4 1.1 GHz (AIX)	デュアルコア Intel (またはその互換) 3.0 GHz (Windows または Red Hat Linux)、デュアルコア SPARC 2.5 GHz (Solaris) POWER5 1.5 GHz (AIX)
メモリ	4 GB	8 GB
使用可能なディスク領域	4 GB	8 GB
一時領域	2 GB	4 GB
スワッピング/ページングスペース	2 GB	4 GB
プロセッサ	中規模および大規模での展開には、64 ビットプロセッサおよびオペレーティングシステム、デュアルコア	64 ビットのプロセッサおよびオペレーティングシステム、デュアルコア

プロビジョニング サーバまたはスタンドアロン コネクタ サーバ

コンポーネント	最小	推奨
CPU	Intel (またはその互換) 2.0 GHz (Windows または Red Hat Linux) SPARC 1.5 GHz (Solaris)	デュアルコア Intel (またはその互換) 3.0 GHz (Windows または Red Hat Linux) SPARC 2.0 GHz (Solaris)
メモリ	4 GB	8 GB
使用可能なディスク領域	4 GB	8 GB

コンポーネント	最小	推奨
プロセッサ	中規模および大規模での展開には、64 ビットプロセッサおよびオペレーティングシステム	64 ビットのプロセッサおよびオペレーティングシステム、デュアルコア

プロビジョニング ディレクトリ

コンポーネント	最小	推奨
CPU	Intel (またはその互換) 1.5 GHz (Windows または Red Hat Linux) SPARC 1.0 GHz (Solaris)	デュアルコア Intel (またはその互換) 2.5 GHz (Windows または Red Hat Linux) SPARC 1.5 GHz (Solaris)
メモリ	4 GB	8 GB
使用可能なディスク領域	<p>エンドポイントアカウントの数に応じて、2 GB から 10 GB。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ コンパクト -- 10,000 以下のアカウント、1つのデータファイル当たり 0.25 GB (合計 1 GB) ■ 基本 -- 400,000 以下のアカウント、1つのデータファイル当たり 0.5 GB (合計 2 GB) ■ 中規模 -- 600,000 以下のアカウント、1つのデータファイル当たり 1 GB (合計 4 GB) ■ 大規模 -- 600,000 を超えるアカウント、1つのデータファイル当たり 2 GB (合計 8 GB) 	<p>エンドポイントアカウントの数に応じて、2 GB から 10 GB。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ コンパクト -- 10,000 以下のアカウント、1つのデータファイル当たり 0.25 GB (合計 1 GB) ■ 基本 -- 400,000 以下のアカウント、1つのデータファイル当たり 0.5 GB (合計 2 GB) ■ 中規模 -- 600,000 以下のアカウント、1つのデータファイル当たり 1 GB (合計 4 GB) ■ 大規模 -- 600,000 を超えるアカウント、1つのデータファイル当たり 2 GB (合計 8 GB)
プロセッサ	中規模および大規模での展開には、64 ビットプロセッサ、64 ビットオペレーティングシステム、および CA Directory (64 ビットバージョン)	64 ビットのプロセッサおよびオペレーティングシステム

1つのシステム上のすべてのコンポーネント

運用環境として、単一の物理システム上で CA Identity Manager 製品をホストすることはお勧めしません。ただし、それを行う場合のハードウェア要件は以下のとおりです。

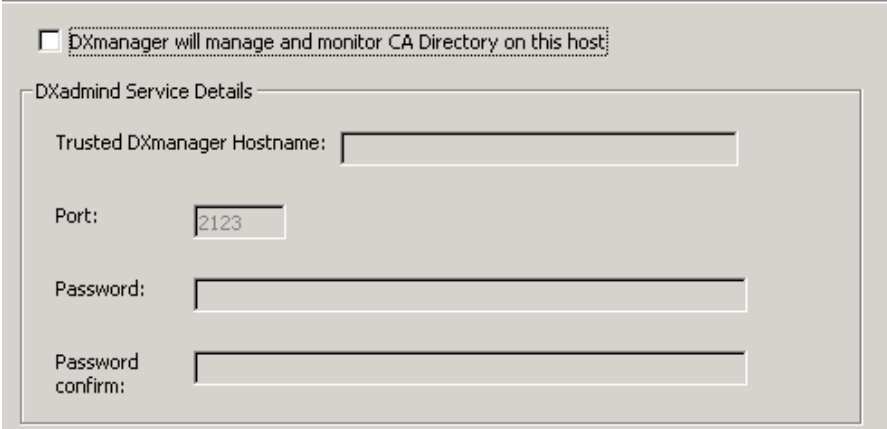
コンポーネント	最小
CPU	Intel (またはその互換) 3.1 GHz (Windows または Red Hat Linux) SPARC 2.5 GHz (Solaris)
メモリ	8 GB
使用可能なディスク領域	アカウントの数に応じて、14 GB ~ 6 GB
プロセッサ	64 ビットのプロセッサおよびオペレーティングシステム、デュアルコア
スワッピング/ページングスペース	6 GB

CA Directory のインストール

CA Identity Manager をインストールする前に、以下の手順に従って CA Directory をインストールします。

1. プロビジョニングディレクトリをインストールする予定のシステムに **CA Directory** をインストールします。サポートされている **CA Directory** のバージョンは、ユーザのインストールメディアに含まれています。インストールの詳細については、サポートサイトから **CA Directory** のマニュアルをダウンロードしてください。

注: インストーラが **DXManager** の **dxadmind** のインストールについて尋ねたら、安全にこのオプションをオフにできます。プロビジョニングディレクトリは **DXManager** を使用しません。



2. プロビジョニングサーバをインストールする予定のシステムに、**CA Directory** の第2のコピーをインストールします。このインストールはルーティングが目的で、プロビジョニングサーバをリモートプロビジョニングディレクトリと通信できるようにします。

重要: インストールの前にすべての対ウイルスソフトウェアを無効にすることをお勧めします。インストール中に、対ウイルスソフトウェアが有効になると、問題が発生する場合があります。インストールが完了した後に、対ウイルスソフトウェアを再度有効にしたことを確認してください。

FIPS 140-2 暗号化キーの作成

CA Identity Manager インストーラを実行するとき、FIPS 140-2 コンプライアンスモードを有効にするオプションを与えられます。CA Identity Manager が FIPS 140-2 をサポートするには、CA Identity Manager 環境内のすべてのコンポーネントが FIPS 140-2 を利用可能である必要があります。インストール中に FIPS 140-2 を有効にするために、FIPS 暗号化キーが必要です。FIPS キーを作成するためのパスワードツールは、`PasswordTool¥bin` のインストールメディアにあります。

重要: すべてのインストールで同じ FIPS 140-2 暗号化キーを使用します。パスワードツールに生成されたキー ファイルを即座に保護したことを確認します。

SiteMinder を使用している場合は、必ず CA Identity Manager インストールの後に正しく `ra.xml` ファイルを設定します。詳細については、「[設定ガイド](#)」の手順「[Adding SiteMinder to an Existing CA Identity Manager Deployment](#)」を参照してください。

暗号化パラメータ ファイルの作成

CA Identity Manager サーバのインストール中に、暗号化パラメータを設定するオプションがあります。この機能を使用し、CA Identity Manager によって使用されるすべての暗号化アルゴリズムのキーの長さ、FIPS 暗号化キーのシードサイズおよび IV サイズ、非 FIPS アルゴリズム (RC2 と PBE) のキー全体など、ユーザ定義のパラメータを提供することにより暗号化コードをカスタマイズします。

パラメータは、プロパティ ファイルとして次の可能なキーで指定される必要があります。PBKey、PBSalt、PBKeySize、RCKey、RCKeySize、AEKey、AEKeySize、AESeedSize、AEIVSize

暗号化アルゴリズムによって許可されている有効なキー サイズ値を以下に示します。

- PBE と RC2 については、キーの最大長は 128 バイトです。
- AES については、有効なキー サイズは 16、24 および 32 バイトです。

重要: すべてのインストールで同じ暗号化パラメータを使用します。インストール後に暗号化パラメータを変更しないでください。

(オプション) SiteMinder との統合

SiteMinder ポリシー サーバは、「*SiteMinder* インストールガイド」に述べられているように、ユーザがインストールするオプション コンポーネントです。ポリシー サーバを高可用にする予定の場合は、それをポリシー サーバクラスタとして設定します。また、CA Identity Manager との通信を有効にするには、JCE ライブラリをインストールします。

ポリシー サーバをインストールする方法

1. SiteMinder ポリシー サーバをインストールします。詳細については、「CA SiteMinder ポリシー サーバインストールガイド」を参照してください。
2. ポリシー サーバを高可用にするには、ポリシー サーバクラスタ内に存在する必要がある各ノードにこれをインストールします。

注: クラスタ内の各ポリシー サーバは、それぞれ同じポリシー ストアを使用します。

3. ユーザが CA Identity Manager サーバをインストールする予定のシステムからポリシー サーバをホストするシステムで、ping を実行できることを確認します。

CA Identity Manager の SiteMinder の拡張機能をインストールする方法

CA Identity Manager サーバをインストールする前に、各ポリシー サーバに対する拡張機能を追加します。ポリシー サーバが CA Identity Manager サーバをインストールする予定のシステム上にあるとします。このときは、拡張機能および CA Identity Manager サーバを同時にインストールできます。この場合、この手順を省略します。

1. CA SiteMinder サービスを停止します。
2. デフォルトのディレクトリの場所を、SiteMinder インストール領域のルートに設定します。
3. 以下のコマンドを発行します。

```
./stop-all
```

すべての SiteMinder 実行可能ファイルはシャットダウンします。

4. CA Identity Manager の SiteMinder の拡張機能をインストールします。以下のタスクのいずれかを実行します。
 - **Windows** : ユーザのインストールメディアから、最上位レベルのフォルダ内の以下プログラムを実行します。
`ca-im-release-win32.exe`
 - **UNIX** : ユーザのインストールメディアから、最上位レベルのフォルダ内の以下プログラムを実行します。
`ca-im-release-sol.bin`

release は、CA Identity Manager の現在のリリースを表します。

5. [Extensions for SiteMinder] を選択します。
6. インストール ダイアログ ボックス内の手順を完了します。
7. 以下のコマンドを発行します。

```
./stop-all
```

すべての SiteMinder 実行可能ファイルはシャット ダウンします。

8. 以下のコマンドを発行します。

```
./start-all
```

すべての SiteMinder サービスが開始します。

JCE ライブラリをインストールする方法

CA SiteMinder も使用する場合、CA Identity Manager サーバは JCE (Java Cryptography Extension) ライブラリを必要とします。

CA Identity Manager サーバをインストールする前に、以下の手順を実行します。

1. Java Cryptography Extension Unlimited Strength Jurisdiction Policy Files をダウンロードしてインストールします。
2. ユーザのアプリケーション サーバと JDK で動作するものを選択します。

ダウンロード ZIP ファイルには、インストール手順を備えた **Readme** テキストファイルが含まれます。

Portal データベースの作成

CA Identity Manager には、監査、スナップショット (レポート)、ワークフローおよびタスク永続性用のオブジェクトおよびデータを格納するためのリレーショナルデータベースが必要です。Oracle または Microsoft SQL Server がサポートされているバージョンをインストールし、データベースを作成します。

CA Identity Manager のインストール時、アプリケーション サーバが起動されるときに、すべてのデータベース スキーマが自動的に作成されます。ただし、CA Identity Manager をインストールした後に、監査、スナップショット (レポート)、ワークフロー、およびタスク永続性用の個別のデータベースを設定できます。これらのデータベースを作成するには、個別のデータベースの設定についての章を参照してください。

WebLogic アプリケーション サーバ

以下のセクションでは、Oracle WebLogic アプリケーション サーバに関する有用な情報を提供します。WebLogic の使用に精通している場合は、以下のセクションに記載されている手順を変更できます。ただし、以下の点に注意してください。

- CA Identity Manager サーバは、サポートされているアプリケーション サーバに展開される J2EE アプリケーションです。
- CA Identity Manager を Solaris にインストールする場合は、root としてインストールを実行します。
- WebLogic は、空白を含まないディレクトリパス名内にインストールしてください。
- CA Identity Manager は、WebLogic の自動展開機能を利用します。WebLogic ドメインを作成する際には、自動展開をサポートするドメインタイプを選択してください。
- アプリケーションサーバが SSL でプロビジョニングサーバおよび他のサーバに接続します。証明書およびキーの情報を含む SSL の設定情報については、アプリケーションサーバのドキュメントを参照してください。

WebLogic アプリケーション サーバのインストール

CA Identity Manager サーバのインストール先にするシステムで、以下の手順を実行します。

1. 「[Oracle WebLogic Documentation](#)」を使用して、アプリケーションサーバをインストールします。
2. アプリケーションサーバシステム上で CA Identity Manager 用にサポートされている JDK (Java Development Kit) または JRE (Java Runtime Environment) をインストールします。

JDK または JRE が 64 ビットバージョンであることを確認します。

注: サポートされているプラットフォームとバージョンの一覧については、[CA サポート](#)の CA Identity Manager サポートマトリックスを参照してください。

WebLogic アプリケーション サーバ インスタンスの作成

CA Identity Manager サーバをインストールする前に、WebLogic インストールの一部である設定ウィザードを使用して WebLogic ドメインを作成し、以下の手順を実行します。

- ドメイン名を書き留めます。CA Identity Manager をインストールするとき、ドメイン名が必要になります。
- [Basic WebLogic Server Domain] テンプレートを選択します。

注: ドメイン作成時に運用モードを選択した場合は、そのドメインを起動して運用モードで正しく実行されることを確認したら、CA Identity Manager をインストールする前に運用モードを停止します。

- `setDomainEnv.cmd/.sh` ファイル
(`weblogic_home\user_projects\domains\weblogic_domain\bin` にある) で `JAVA_HOME` 変数が設定されていることを確認します。

WebLogic ドメインの確認

以下の点を確認します。

- WebLogic アプリケーション サーバが実行されています。
- 以下の URL で WebLogic サーバ管理コンソールにアクセスできます。

`http://hostname:port/console`

以下に例を示します。

`http://myserver.mycompany.com:7001/console`

- [WebLogic Server Administration Console] の [Domain Configurations] の下で、ドメインリンクを選択します。

新しく作成されたドメインが、既存のドメインのリストに表示されます。

注: 確認を完了したら、CA Identity Manager インストールの準備のためにアプリケーションサーバをシャットダウンします。運用モードで WebLogic ドメイン上で CA Identity Manager インストールを実行する場合は、まず、サーバの開始とシャットダウンでドメインを初期化します。

Solaris の要件

プロビジョニング サーバの要件

/etc/system を確認して、以下の最小の IPC カーネル パラメータ値を確認します。

- set msgsys:msginfo_msgmni=32
- set semsys:seminfo_semmni=256
- set semsys:seminfo_semmns=512
- set semsys:seminfo_semmnu=256
- set semsys:seminfo_semume=128
- set semsys:seminfo_smmsl=128
- set shmsys:shminfo_shmmni=128
- set shmsys:shminfo_shmmin=4

Solaris 9 または 10 の要件

Solaris 9 または 10 上にプロビジョニング ソフトウェアをインストールする前に、必要なパッチをダウンロードし、インストールしてください。

1. 以下の場所からプロビジョニング SDK 用の Sun Studio 10 のパッチをダウンロードします。

http://developers.sun.com/prodtech/cc/downloads/patches/ss10_patches.html

2. パッチ 117830 をダウンロードしてインストールします。

注: Sun Studio 11 にはパッチは必要ありません。

3. 以下の場所からすべてのプロビジョニング コンポーネント用の Solaris 9 のパッチをダウンロードします。

<http://search.sun.com/search/onesearch/index.jsp>

4. 9_recommended.zip をダウンロードしてインストールします。

Linux の要件

これらの要件は、Linux システムに存在します。ユーザが Red Hat インストールを登録している場合は、yum を使用してパッケージをインストールすることをお勧めします。そうでない場合は、rpm を使用してパッケージをインストールできます。

あるいは、依存性を解決するために [Add/Remove Software] を使用して、[Only Native Packages] フィルタ オプションをオフにします。この方法を用いて、必要な i686 アーキテクチャ依存性を選択してインストールします。

注: i686 サフィックスは、ライブラリが x86 プロセッサの場合、32 ビットであることを指定します。

CA Identity Manager サーバ

Red Hat 5.x	Red Hat 6.x
glibc-2.5-65.i686.rpm	glibc-2.12-1.47.el6.i686.rpm
libXext-1.0.1-2.1.i386.rpm	libXext-1.1-3.el6.i686.rpm
libXtst-1.0.1-3.1.i386.rpm	libXtst-1.0.99.2-3.el6.i686.rpm
ncurses-devel-5.5-24.20060715.i386.rpm	ncurses-devel-5.7-3.20090208.el6.i686.rpm
ksh-20100202-1.el5_6.6.x86_64.rpm	ksh-20100621-12.el6.x86_64.rpm

プロビジョニング サーバ

Red Hat 5.x	Red Hat 6.x
compat-libstdc++-296-2.96-138.i386.rpm	compat-libstdc++-296-2.96-144.el6.i686.rpm
libstdc++-4.1.2-51.el5.i386.rpm	libstdc++-4.4.6-3.el6.i686.rpm
libidn-0.6.5-1.1.i386.rpm	libidn-1.18-2.el6.i686.rpm
libgcc-4.1.2-52.el5.i386.rpm	libgcc-4.4.6-3.el6.i686.rpm

CA IAM コネクタ サーバ

Red Hat 5.x については、CA IAM CS 用のパッケージは不要です。Red Hat 6.x については、以下のパッケージを以下の順番でインストールします。

1. glibc-2.12-1.25.el6.i686.rpm
2. libX11-1.3-2.el6.i686.rpm
3. libxcb-1.5-1.el6.i686.rpm
4. libXtst-1.0.99.2-3.el6.i686.rpm
5. libXau-1.0.5-1.el6.i686.rpm
6. libXi-1.3-3.el6.i686.rpm
7. libXext-1.1-3.el6.i686.rpm
8. nss-softokn-freebl-3.12.9-3.el6.i686.rpm
9. libXmu-1.0.5-1.el6.i686.rpm
10. libXft-2.1.13-4.1.el6.i686.rpm
11. libXpm-3.5.8-2.el6.i686.rpm

Linux および FIPS の場合

有効な FIPS を持つ Linux システムで、十分なエントロピーが利用可能であることを確認します。CA Identity Manager は、重要な暗号の機能を実行するために `/dev/random` からのランダム データを必要とします。`/dev/` ランダム内のデータが使い尽くされた場合、CA Identity Manager プロセスはランダム データが利用可能になるのを待つ必要があります。この待機により、パフォーマンスが低下します。`rngd-tools` および `rng-tools` を使用して、`/dev/random` に十分なデータがあり、読み取りプロセスがブロックされないことを確認してください。

IPv6 のサポート

CA Identity Manager は、以下のオペレーティング システムで IPv6 をサポートします。

- Solaris 10
- Windows XP SP2 以上
- Windows 2003 SP2 以上
- Windows 2008 以上

注: Microsoft Windows プラットフォーム上では、CA IAM CS は IPv6 をサポートしません。CA Identity Manager r12.5 のリリース時点で IPv6 に対応する JDK はありません。IPv6 で動作する JDK がリリースされれば、[CA Support](#) にある CA Identity Manager サポート マトリックスが更新されます。

IPv6 設定に関する注意事項

IPv6 をサポートする CA Identity Manager 環境を設定する前に、以下の点に注意してください。

- CA Identity Manager で IPv6 アドレスをサポートするには、<idngr> 実装（オペレーティングシステム、JDK、ディレクトリ サービス、およびデータベースなど）のすべてのコンポーネントでも IPv6 アドレスがサポートされている必要があります。
- CA Identity Manager を SiteMinder と統合する場合、アプリケーションサーバの Web サーバプラグインも IPv6 をサポートしている必要があります。
- JDBC 接続を使用して、CA Identity Manager から SiteMinder または任意のデータベースに接続する際に、IP アドレスではなく、ホスト名を指定します。
- レポートサーバはデュアルスタック ホストにインストールできます。デュアルスタック ホストは IPv4 と IPv6 の両方をサポートしますが、サーバとの通信は IPv4 で行う必要があります。
- 管理コンソールでレポートサーバへの接続を設定する際に、サーバ名を IPv4 形式にする必要があります。
- CA Identity Manager は IPv6 リンク ローカルアドレスをサポートしません。
- IPv4/6 環境で、複数のアドレス上でリスニングを行うように CA Directory DSA を設定するには、アドレスを DSA ナレッジファイルに追加する必要があります。詳細については、CA Directory のマニュアルを参照してください。
- IPv6 を使用する Windows 2008 システムで、IPv4 ループバック アドレスが有効であることを確認します。そうでない場合は、C++ Connector Server は開始しません。

IPv6 のみでの Windows 2008 上のプロビジョニング ディレクトリがサポートされない

Sun Java システムの制限により、IPv6 ネットワーク サービスがアンインストールされた Windows 2008 サーバ上でのプロビジョニングディレクトリはサポートされません。

この問題を回避するには、このシステム上に IPv6 サービスをインストールし、無効のままにします。

プロビジョニング ディレクトリ

CA Identity Manager インストール中に必要な、以下のプロビジョニング ディレクトリおよびプロビジョニング サーバの情報を記録します。

フィールド名	説明	回答
Provisioning Directory Hostname	それがリモートである場合は、プロビジョニング ディレクトリ システムのホスト名。 プライマリおよび任意の代替プロビジョニング ディレクトリのホスト名が必要です。	
共有秘密キー	プロビジョニング ディレクトリの特別のパスワード。プライマリおよび任意の代替プロビジョニング ディレクトリに対して同じパスワードを使用します。	
Provisioning Server Hostname	プライマリおよび任意の代替プロビジョニング サーバのホスト名。	

インストール ワークシートの完了

CA Identity Manager インストール プログラムでは、以前インストールしたソフトウェアとこれからインストールするソフトウェアについての情報が要求されます。インストーラ画面では必ずホスト名 (IP アドレスではない) を入力してください。

注: 以下のインストールワークシートを使用してこれらの情報を記録してください。ワークシートはインストールを開始する前に完了することを推奨します。

WebLogic 情報

CA Identity Manager インストール中に必要な以下の WebLogic 情報を記録します。

フィールド名	説明	回答
WebLogic Binary Folder	アプリケーション サーバのホーム ディレクトリの場所。	

フィールド名	説明	回答
Domain Folder	CA Identity Manager 用に作成した WebLogic ドメインの名前。 デフォルト: base_domain	
Server Name	ドメインを設定する WebLogic サーバの名前。 デフォルト: AdminServer	
Cluster Name	WebLogic クラスタの名前 (CA Identity Manager をクラスタ化された環境にインストールする予定の場合)。	
Access URL and port	CA Identity Manager サーバをホストするシステム) アプリケーションサーバをホストするシステム) のアプリケーション URL およびポート番号、またはクラスタ化された環境用の Web サーバポートおよび URL。	

データベース接続情報

Oracle または Microsoft SQL Server データベース がすでに設定されており動作していることを確認します。CA Identity Manager インストール時に必要な以下のデータベース情報を記録します。

フィールド名	説明	回答
データベース タイプ	タスク永続性、ワークフロー、監査、レポート、オブジェクトストレージ、およびタスク永続性アーカイブに対して作成されるデータベースのタイプ (ベンダー/バージョン)。	
Host Name	データベースが存在するシステムのホスト名。 注: IP アドレスではなく、ホスト名を指定したことを確認してください。	
Port Number	データベースのポート番号。	
Database Name	データベース識別子。	

フィールド名	説明	回答
Username	データベース アクセス用ユーザ名。 注: スキーマを手動でインポートしない場合は、データベースに対する管理者権限が必要です。	
Password	管理者権限を持つユーザ アカウントのパスワード。	

ログイン情報

プロビジョニング コンポーネントのインストール中に必要な以下のパスワードを記録します。

フィールド名	説明	回答
ユーザ名	プロビジョニング コンポーネントにログインするために作成するユーザ名。 この製品をインストールする場合は、ユーザ名に「siteminder」を使用しないでください。この名前はCA SiteMinder と競合します。	
Provisioning Server password	この Server のパスワード。	
C++ Connector Server password	このサーバについてはパスワードが必要です。各 C++ Connector Server は一意のパスワードを持つことができます。	
Provisioning Directory password	プロビジョニング サーバがプロビジョニング ディレクトリに接続するために使用するパスワード。 代替プロビジョニング サーバについては、プライマリ プロビジョニング サーバに対して作成されたプロビジョニング ディレクトリのパスワードを入力します。	

SiteMinder 情報

CA Identity Manager を保護するために SiteMinder ポリシー サーバを使用する予定の場合は、以下の情報を記録してください。

フィールド名	説明	回答
Policy Server Host Name	SiteMinder ポリシー サーバのホスト名を指定してください。	
SiteMinder Administrator Name	SiteMinder ポリシー サーバの管理者ユーザ名。	
SiteMinder 管理者パスワード	SiteMinder ポリシー サーバの管理者ユーザのパスワード。	
SiteMinder Folder (Solaris のみ)	SiteMinder ポリシー サーバがインストールされているシステム上の SiteMinder の場所。	
SiteMinder Agent Name	SiteMinder に接続するために CA Identity Manager が使用する SiteMinder エージェントの名前。	
SiteMinder Shared Secret	指定されたエージェント名の共有秘密キー。	

UNIX およびコンソール モードのインストール

このガイドの例では、インストールプログラムの Solaris 実行可能ファイル名を提供します。ただし、AIX または Linux にインストールする場合があります。

- AIX の場合は、次を使用します。 `ca-im-release-aix.bin`
- LINUX の場合は、次を使用します。 `ca-release-linux.bin`

`release` は、CA Identity Manager の現在のリリースを表します

UNIX ワークステーションなどのコンソールモードでインストールを実行している場合は、別のオプションをコマンドラインに追加します。

- 主なインストールの場合は、`-i` コンソールを追加します。以下に例を示します。

```
./ca-im-release-sol.bin -i console
```
- プロビジョニング コンポーネントのインストールの場合は、`-console` をセットアップ コマンドに追加します。

Non-Provisioning インストール

本ガイドでは、プロビジョニング ソフトウェアをインストールするためのオプションを提供するインストーラの Windows および Solaris のプログラム名を参照しています。プロビジョニング オプションを参照しない場合は、以下のインストーラを使用できます。

- Windows では、`IMWithoutProvisioning\ca-im-Web-release-win.bat` を使用する
- Solaris では、`IMWithoutProvisioning/ca-im-web-release-sol.sh` を使用する

`release` は、CA Identity Manager の現在のリリースを表します。

第 3 章: 単一ノードインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストール ステータス](#) (P. 45)

[CA Identity Manager コンポーネント](#) (P. 46)

[単一ノードインストールを実行する方法](#) (P. 47)

インストール ステータス

以下の表は、インストールプロセスのどこにいるかユーザに示します。

現時点	インストール プロセスの手順
	1. 前提条件のハードウェアおよびソフトウェアをインストールし、必要なシステムを設定します。
X	2. 以下のインストールのいずれかを実行します。 <ul style="list-style-type: none">■ 単一ノードインストール■ アプリケーション サーバ クラスタ上のインストール
	3. (オプション) 個別のデータベースを作成します。
	4. (オプション) レポート サーバをインストールします。
	5 (オプション) フェイルオーバーと負荷分散をサポートするために、代替プロビジョニング ディレクトリ、代替プロビジョニング サーバ、およびコネクタ サーバをインストールします。

CA Identity Manager コンポーネント

単一ノードインストールでは、各コンポーネントの1つのコピーをインストールしますが、インストール先に複数のシステムを使用します。

注: 高可用性のためにコンポーネントの複数のコピーをインストールする場合は、クラスタ上のインストールおよび高可用性プロビジョニングインストールについての章を参照してください。

ユーザのサイトで以下の各コンポーネントの1つをシステムにインストールします。

- **CA Identity Manager サーバ** -- 製品の基本的な機能を提供するサーバをインストールします。
- **CA Identity Manager 管理ツール** -- プロビジョニング マネージャ (Windows システム上で実行される)、**CA IAM CS 用の SDK**、および **Connector Xpress** などのツールをインストールします。

Connector Xpress は動的なコネクタを管理し、それらをエンドポイントにマップし、ルーティングルールを確立します。動的なコネクタは、**SQL データベース**および**LDAP ディレクトリ**のプロビジョニングと管理を行えるようにします。

- **CA Identity Manager プロビジョニング サーバ** -- **CA Identity Manager** 内のプロビジョニングを有効にします。このサーバのインストールには、**C++ Connector Server** が含まれます。これは、**C++** コネクタを使用するエンドポイントを管理します。
- **CA IAM CS** -- **Java** コネクタを使用するエンドポイントを管理します。プロビジョニングサーバのインストール時に、**CA IAM CS** はプロビジョニングサーバと共に登録されます。
- **CA Identity Manager プロビジョニング ディレクトリ初期化** -- プロビジョニングデータを格納するために **CA Directory** インスタンスを設定します。**CA Directory** がインストールされている各システム上でインストールプログラムを使用します。
- **SiteMinder** の拡張機能 -- **CA Identity Manager** を保護するために使用している場合は、**SiteMinder** ポリシーサーバを拡張します。**CA Identity Manager** サーバをインストールする前に、ポリシーサーバと同じシステムにこれらの拡張機能をインストールします。

単一ノード インストールを実行する方法

CA Identity Manager の基本的なインストールを実行するために以下のチェックリストを使用します。



手順

1. CA Identity Manager コンポーネントを、必要なシステムにインストールします。
2. CA Identity Manager サーバが起動することを確認します。
3. リモート システムにインストールされている場合は、プロビジョニング マネージャを設定します。
4. オプションのプロビジョニング コンポーネントをインストールします。

CA Identity Manager コンポーネントのインストール

運用環境の場合は、データ サーバ用の個別システムを使用します。たとえば、プロビジョニング ディレクトリとデータベース (SQL または Oracle) を CA Identity Manager サーバおよびプロビジョニング サーバとは別のシステムに置くことを推奨します。SiteMinder をインストールする場合は、SiteMinder も別のシステムに置くことができます。管理ツールは任意のシステムにインストールできます。

CA Identity Manager インストーラを使用して、必要なシステムでインストールを実行してください。インストーラを実行する以下の手順では、インストールメディアの最上位フォルダにある以下のプログラムを参照します。

- **Windows の場合 :**
`ca-im-release-win32.exe`
- **UNIX の場合 :**
`ca-im-release-sol.bin`

`release` は、CA Identity Manager の現在のリリースです。

インストールするコンポーネントごとに、ホスト名とパスワードなど[インストーラ画面で必要となる情報](#) (P. 39)を確認しておいてください。インストール中に問題が発生した場合は、[インストールログ](#) (P. 155)を確認します。

SiteMinder の拡張をインストールする方法

1. SiteMinder がローカル管理者 (Windows の場合) またはルート (Solaris の場合) としてインストールされる場合、システムにログインします。
2. SiteMinder サービスを停止します。
3. インストーラを実行し、[Extensions for SiteMinder] を選択します。

CA Identity Manager サーバをインストールする方法

1. SiteMinder を別のシステムにインストールした場合は、SiteMinder の拡張もそのシステムにインストールしたことを確認してください。
2. ローカル管理者 (Windows の場合) またはルート (Solaris の場合) として、アプリケーションサーバがインストールされているシステムにログインします。
3. アプリケーションサーバを停止します。
4. インストーラを実行し、[CA Identity Manager Server] を選択します。
5. ローカルシステム上に SiteMinder がある場合は、[Extensions for SiteMinder] を選択します。SiteMinder がリモートシステム上にある場合は、[Connect to Existing SiteMinder Policy Server] を選択します。

プロビジョニング ディレクトリをインストールする方法

1. ローカル管理者 (Windows の場合) またはルート (Solaris の場合) としてシステムにログインします。
2. システムに CA Directory がすでにインストールされていることを確認します。
3. インストーラを実行し、[CA Identity Manager Provisioning Directory Initialization] を選択します。
4. 展開サイズに関する質問に答えます。将来の増加のために余裕を持って、以下のガイドラインに従います。
 - コンパクト -- 10,000 までのアカウント
 - 基本 -- 400,000 までのアカウント
 - 中規模 -- 600,000 までのアカウント
 - 大規模 -- 600,000 を超えるアカウント

プロビジョニング サーバをインストールする方法

1. ローカル管理者（Windows の場合）またはルート（Solaris の場合）としてシステムにログインします。
2. CA Directory がすでにインストールされており、リモートのプロビジョニング ディレクトリ の詳細情報があることを確認します。
3. インストーラを実行し、[CA Identity Manager Provisioning Server] を選択します。

WebLogic での CA Identity Manager サーバの起動の確認

WebLogic で CA Identity Manager を起動するには、startWebLogic.cmd ファイル（Windows の場合）または startWebLogic.sh ファイル（UNIX の場合）を使用します。このファイルは、CA Identity Manager ドメイン用に作成された Weblogic ドメインディレクトリにあります。

注: 運用モードで WebLogic を使用する場合は、インストールまたはアップグレード後の最初のアプリケーションサーバ起動時に、CA Identity Manager EAR が自動的に展開されないことがあります。その場合は、weblogic_domain¥applications フォルダから iam_im.ear を手動で展開してください。

次の手順に従ってください:

1. コマンドラインから weblogic_domain/bin に移動します。
2. 以下のコマンドを入力します。
 - **Windows:** startWebLogic
 - **UNIX:** ./startWebLogic.sh

アプリケーションサーバの起動には、WebLogic 管理者名とパスワードの入力を要求される場合があります。

3. プロンプトが表示されたら、ドメイン作成時に指定した WebLogic 管理者名とパスワードを入力します。

注: CA Identity Manager サーバを初めて起動すると、CA Identity Manager の JSP ファイルがプリコンパイルされます。このため、初期起動に時間がかかることがあります。

サーバの起動が完了すると、以下のメッセージが表示されます。

```
<Server started in RUNNING mode>
```

4. 管理コンソールにアクセスし、以下のポイントを確認します。
 - ブラウザから以下の URL にアクセスできます。
`http://im_server:port/iam/immanage`
以下に例を示します。
`http://MyServer.MyCompany.com:port-number/iam/immanage`
 - 管理コンソールが開きます。
 - アプリケーション サーバ ログにエラーが表示されません。
 - ディレクトリ リンクをクリックした場合、ユーザはエラー メッセージを受信しません。
5. 以下の URL 形式を使用して、アップグレードされた環境にアクセスできることを確認してください。
`http://im_server:port/iam/im/environment`

リモートプロビジョニング マネージャの設定

プロビジョニング マネージャをプロビジョニング サーバから別のシステムにインストールした場合、サーバへの通信を設定します。

注: プロビジョニング マネージャをインストールするには、CA Identity Manager 管理ツールを Windows システムにインストールします。

次の手順に従ってください:

1. プロビジョニング マネージャをインストールした Windows システムにログインします。
2. [スタート] - [プログラム] - [CA] - [Identity Manager] - [Provisioning Manager Setup] に移動します。
3. プロビジョニング サーバのホスト名を入力します。
4. [構成] をクリックします。
5. 代替プロビジョニング サーバについては、プルダウン リストからドメイン名を選択します。
6. [OK] をクリックします。

これでプロビジョニング マネージャを起動し、設定したドメイン名を参照できるようになります。

オプション プロビジョニング コンポーネントのインストール

CA Identity Manager のオプションのプロビジョニング コンポーネントは、`im-pc-release.zip` にあります。

`release` は、CA Identity Manager の現在のリリースを表します。

ZIP ファイルの内容は、以下のとおりです。

リモート エージェント

これらのコンポーネントをインストールするには、プロビジョニング コンポーネントメディア (¥RemoteAgent の下) から固有のエージェント インストーラを実行します。IPv6 サポートを望む場合は、ユーザのエージェントをインストールする必要があります。

パスワード同期エージェント

このコンポーネントをインストールするには、プロビジョニング コンポーネントメディア (¥Agent 下) からパスワード同期エージェント インストーラを実行します。

クレデンシャル プロバイダ

このコンポーネントをインストールするのは、プロビジョニング コンポーネントメディア (¥Agent 下) からクレデンシャルプロバイダ インストーラを実行します。

Bulk Loader クライアント/PeopleSoft フィード

このコンポーネントをインストールするには、プロビジョニング コンポーネントメディア (¥Clients 下) から Bulk Loader Client インストーラを実行します。

CA IAM Server 2000 SDK

このコンポーネントをインストールするには、CA Identity Manager メディア (¥Provisioning 下) から CA IAM コネクタ サーバ SDK インストーラを実行します。

CCI スタンドアロン

このコンポーネントをインストールするには、プロビジョニング コンポーネントメディア (¥Infrastructure の下) から CCI スタンドアロン インストーラを実行します。

CA Identity Manager インストーラは、デフォルトではすべてのコネクタをインストールします。ただし、管理しているエンドポイントシステムにエージェントをインストールしないと、関連のコネクタを使用できない場合があります。

コネクタはプロビジョニングサーバ上で実行されて、エンドポイントによって管理されているシステムと通信します。たとえば、プロビジョニングサーバに ADS コネクタがインストールされた場合にのみ、Active Directory Services (ADS) を実行するシステムを管理できます。

注: 各コネクタの詳細については、「コネクタ ガイド」を参照してください。

これらのコンポーネントの詳細については以下のガイドを参照してください。

- クレデンシャルプロバイダ (管理ガイド)
- パスワード同期エージェント (管理ガイド)
- Connector Xpress (Connector Xpress ガイド)
- コネクタで使用するエージェント (コネクタ ガイド)

第 4 章: WebLogic クラスタでのインストール

WebLogic サーバクラスタは、複数の WebLogic サーバインスタンスで構成され、協調動作により拡張性と信頼性を増大します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストール ステータス \(P. 53\)](#)

[WebLogic クラスタ \(P. 54\)](#)

[CA Identity Manager を WebLogic クラスタにインストールする方法 \(P. 55\)](#)

[WebLogic クラスタの起動 \(P. 64\)](#)

[クラスタ化されたインストールの確認 \(P. 65\)](#)

[リモートプロビジョニング マネージャの設定 \(P. 66\)](#)

[オプションプロビジョニング コンポーネントのインストール \(P. 67\)](#)

インストール ステータス

以下の表は、インストールプロセスのどこにいるかユーザに示します。

現時点	インストール プロセスの手順
	1. 前提条件のハードウェアおよびソフトウェアをインストールし、必要に応じてシステムを設定します。
X	2. 以下のインストールのいずれかを実行します。 <ul style="list-style-type: none">■ 単一ノードインストール■ アプリケーションサーバクラスタ上のインストール
	3. (オプション) 個別のデータベースを作成します。
	4. (オプション) レポート サーバをインストールします。
	5. (オプション) フェイルオーバーと負荷分散をサポートするために、代替プロビジョニング ディレクトリ、代替プロビジョニング サーバ、およびコネクタ サーバをインストールします。

WebLogic クラスタ

WebLogic サーバクラスタは、複数の WebLogic サーバ インスタンスで構成され、連携して動作することで拡張性と信頼性を増大します。

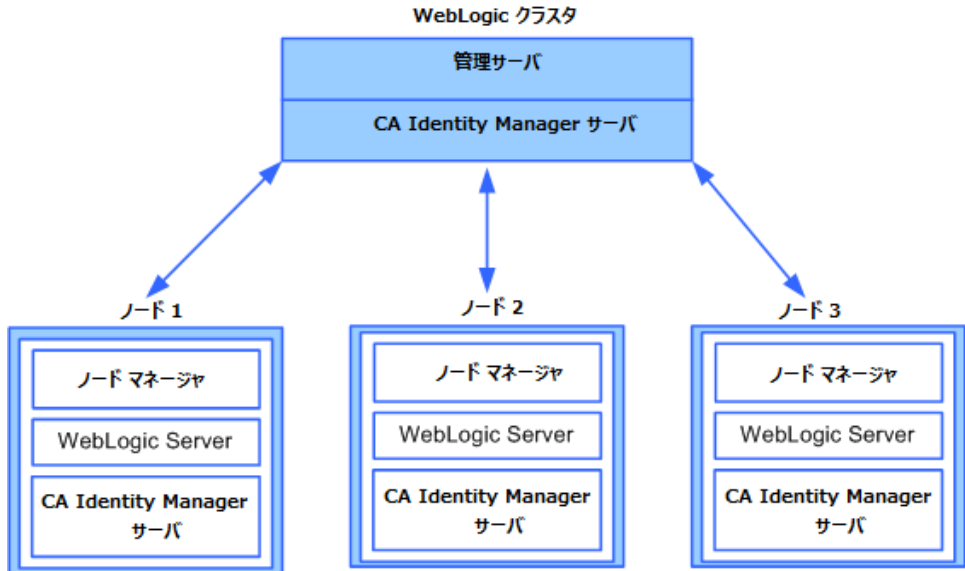
注: WebLogic クラスタを設定する前に、WebLogic クラスタおよび JMS オブジェクトに精通しておく必要があります。 [Oracle WebLogic 11 のドキュメント](#)を参照します。

WebLogic クラスタには以下のコンポーネントが含まれています。

- 1つの管理サーバ。そのドメイン内の WebLogic Server インスタンスを設定および管理します。
- 管理対象サーバノード。ノードごとに CA Identity Manager サーバを実行します。
- ノードマネージャ。WebLogic サーバのユーティリティとして、リモートから管理サーバおよび管理対象サーバノードを起動、シャットダウン、および再起動することを可能にします。

クラスタ内の各 WebLogic サーバに Node Manager をインストールします。

以下の図は、WebLogic クラスタで管理サーバと3つの管理対象サーバノードの関係を示しています。



CA Identity Manager を WebLogic クラスタにインストールする方法

以下の手順では、CA Identity Manager を Oracle WebLogic クラスタにインストールする方法について説明します。



手順

1. WebLogic クラスタを作成します。
2. WebLogic 用分散 JMS サーバを作成します。
3. ワークフロー用分散 JMS サーバを作成します。
4. プロキシプラグインを設定します。

WebLogic クラスタの作成

このセクションの手順では、「[Oracle WebLogic 11 Documentation](#)」に記載されている多層アーキテクチャに基づいてクラスタを設定する方法を説明します。

次の手順に従ってください:

1. クラスタ内のどのシステムを管理サーバにするか、どのシステムを管理対象ノードにするかを決定します。
2. 管理サーバと管理対象ノードに WebLogic をインストールします。
3. WebLogic 設定ウィザードを使用して、管理サーバ上に WebLogic ドメインを作成します。
4. WebLogic ドメインをクラスタ用にカスタマイズします。
5. 管理サーバを作成するノードにクラスタ ドメインを作成します。

このドメインは、管理対象サーバノードへのアプリケーションの展開元として使用できます。

ノード マネージャの登録

ノード マネージャは、リモートから管理サーバと管理対象ノードを起動する WebLogic ユーティリティです。Oracle では、クラスタ内の各管理対象ノードでノード マネージャを登録することを推奨しています。ノード マネージャの登録手順については、「[Oracle WebLogic 11 Documentation](#)」を参照してください。

WebLogic クラスタの確認

各管理対象ノードを起動および停止できることを確認します。

次の手順に従ってください：

WebLogic 管理者コンソールから、以下の手順を実行します。

1. 各管理対象ノードのユーザとパスワードを設定します。
 - a. インターネットブラウザで、`http://admin server machine:7001/console` に移動します。
 - b. [Environment] - [Servers] からサーバ名を選択します。
 - c. [Server Start] タブに移動します。
 - d. 管理対象ノードの設定に使用したユーザおよびパスワードを入力します。
2. 各ノードマネージャ システムで以下のアクションを実行します。
 - a. 各管理対象ノードでノードマネージャを起動します。
 - Windows の場合： [スタート] - [プログラム] - [Oracle WebLogic Server 11gR1] - [Tools] - [Node Manager] に移動します。
 - Solaris の場合： `startNodeManager.sh` スクリプトを使用します。
`startNodeManager.sh` スクリプトのサンプルは `WL_HOME¥server¥bin` にインストールされています。このスクリプトを環境に合わせて編集してください。
 - b. 管理対象の各サーバ/マシンを起動します。WebLogic 管理コンソールで、以下のように移動します。
[Environment] - [servers] - <Server Name> - [control] - [start]
3. CA Identity Manager のインストールに備えて、管理サーバとすべての管理対象サーバを停止します。

WebLogic クラスタへの CA Identity Manager のインストール

CA Identity Manager をクラスタに展開する前に、管理サーバのクラスタ ドメインに展開して CA Identity Manager が正しくインストールされることを確認します。クラスタ ドメインは、CA Identity Manager をテストしてからクラスタ内の他のノードに展開できるステージング エリアとして機能します。

インストール中にクラスタ名を指定すると、以下のプライマリ リソースが設定されます。

- 分散キュー/トピック。指定されたクラスタ名をもつクラスタをすべてのキュー/トピックのターゲットとし、ラウンドロビンをデフォルトの負荷分散アルゴリズムとします。

- 指定されたクラスタ名をもつクラスタをターゲットとした接続ファクトリ。
- 指定されたクラスタ名をもつクラスタをターゲットとしたデータ ソース。
- 2つの JMS モジュール : `imjmsmodule` および `wpjmsmodule`

インストール時には、EAR ファイル (`iam_im.ear` および `ca-stylesr5.1.1.ear`) が以下のルートでクラスタ ドメインにインストールされます。

`WL_HOME¥user_projects¥domains¥weblogic_domain¥applications`

管理対象ノード サーバが起動すると、EAR ファイルは、管理対象ノードのこの場所にプッシュされます。

`WL_HOME¥common¥nodemanager¥servers¥server-name¥stage`

注: ホスト名やパスワードなど[インストーラ画面で必要となる情報 \(P. 39\)](#)を確認しておいてください。インストール中に問題が発生した場合は、[インストールログ \(P. 155\)](#)を確認します。

次の手順に従ってください:

1. UNIX システムにインストールする場合は、`/etc/hosts` ファイルを更新します。
これらのファイルに、インストール時に組み込むリモートシステムの IP アドレスとホスト名を含めます。
2. WebLogic 管理サーバをホストするシステムで、インストールプログラムを使用して、CA Identity Manager サーバをインストールします。
 - Windows : ユーザのインストール メディアから、以下のプログラムを実行します。
`ca-im-release-win32.exe`
 - UNIX : ユーザのインストール メディアから、以下のプログラムを実行します。
`ca-im-release-sol.bin`

`release` は、CA Identity Manager の現在のリリースを表します。

3. インストールでパスワードまたは共有秘密キーを入力するときは、必要ときに思い出すことができるパスワードを確実に入力してください。

Provisioning Directory Information

The Provisioning Server stores its data in a repository called the Provisioning Directory. To configure Provisioning Directory, enter the following information.

Provisioning Directory Host:	<input type="text" value="us-west3"/>
Provisioning Directory Shared Secret:	<input type="password" value="*****"/>
Confirm Shared Secret:	<input type="password" value="*****"/>

4. [WebLogic] セクションで、以下の項目の入力を完了します。

WebLogic Binary Folder

アプリケーション サーバのホーム ディレクトリの場所。

Domain Folder

CA Identity Manager 用に作成した WebLogic ドメインの名前。

Server Name

ドメインが設定される WebLogic サーバの名前。

Cluster Name

クラスタの名前です。

Access URL and port

負荷分散用の Web サーバの URL とポート番号を指定します。

- Oracle または Microsoft SQL Server データベースについて収集した情報を使用して、[Database Connection Information] セクションを完了します。

Database Connection Information

Enter database connection information for task persistence and archive, workflow, auditing, reporting, and object storage.

Host Name:	<input type="text" value="central3.kolapd.com"/>
Port Number:	<input type="text" value="1433"/>
Database Name:	<input type="text" value="main_objectstore"/>
Username:	<input type="text" value="db_inwest"/>
Password:	<input type="password" value="*****"/>

- 組織の要件に準拠したパスワードを指定して、[Login Information] セクションを完了します。

Login Information

To create a user for connecting to the embedded CA components and administering Provisioning Server, provide a user name and password.
Note: The password you specify must be at least six characters.

Username:	<input type="text" value="ps_user"/>
Password:	<input type="password" value="*****"/>
Confirm Password:	<input type="password" value="*****"/>

- SiteMinder に接続している場合は、表示される [Policy Server] セクションを完了します。
- 選択内容が正しいことを [Installation Summary] で確認し、[Install] をクリックします。

管理対象ノードの設定

CA Identity Manager インストーラは JAR ファイルを管理サーバにインストールします。管理対象ノードはこれらのファイルが必要としますが、これらのファイルは EAR の外部にあり、ノードにプッシュされません。以下の手順で、各管理対象ノードに JAR ファイルをコピーし、ノードごとに JDBC ドライバを設定します。

注: CA Identity Manager のインストール後にノードを追加したい場合も、この手順を適用できます。

次の手順に従ってください:

1. 他のすべての管理対象ノードにデータベース JDBC ドライバをコピーします。sqljdbc.jar または ojdbc14.jar を、管理サーバの `WL_HOME/server/lib` からノードの `WL_HOME/server/lib/` に移動します。
2. ノードマネージャをインストールしたノードにログオンします。
3. Windows サービスとして ノードマネージャをインストールしている場合は、まず以下のようにノードマネージャを無効にする必要があります。
 - a. [コントロールパネル] で [管理ツール] をダブルクリックします。
 - b. [サービス] アイコンをダブルクリックします。
 - c. [Oracle WebLogic NodeManager] をダブルクリックします。
 - d. [停止] をクリックします。
 - e. [スタートアップの種類] をクリックし、[無効] を選択します。
4. 管理サーバで、WebLogic を起動します。
5. WebLogic 管理サーバの管理コンソールを開きます。
 - a. [Environment] - [Servers] - <Server> - [Server Start] タブに移動します。
 - b. アプリケーションサーバ付属 JDK の Sun JDK ホームの場所を [Java Home] に入力します。
 - c. [Java Vendor] には「Sun」と入力します。
 - d. [Class Path] には、アプリケーションインストール付属の `commEnv.{cmd,sh}` ファイルから完全に解決された `WEBLOGIC_CLASSPATH` のコンテンツに `WL_HOME¥server¥lib¥ojdbc14.jar;WL_HOME¥server¥lib¥sqljdbc.jar` を補足して入力します (WL_HOME は、製品付属の `commEnv.{cmd,sh}` ファイルで設定されています)。

- e. JAVA ARGUMENT のコンテンツが以下のとおりであることを確認します。

```
-Xms256m -Xmx1024m -XX:ReservedCodeCacheSize=50m -XX:MaxPermSize=256m  
-Djavax.xml.stream.XMLInputFactory=weblogic.xml.stax.XMLStreamInputFactor  
y
```

非標準のニーズがある場合は、この引数を変更してください。
 - f. [保存] をクリックします。
6. 次のノードにログオンし、上記の手順を繰り返します。

WebLogic 用分散 JMS サーバの作成

可用性の高い WebLogic クラスタを設定するには、クラスタ用 JMS モジュールのキューとトピックを管理する分散 JMS サーバを設定します。

次の手順に従ってください:

1. たとえば、管理対象ノード上に IM_JMS_filestore ディレクトリを作成します。
`WL_HOME¥user_projects¥IM_JMS_filestore`
2. [Admin Console] の下で、[Services] - [Messaging] - [JMS Servers] - [New JMS Server] に移動します。
3. [Persistent Store] セクションで、以下の JMS オブジェクトを設定します。
 - JMS ファイルストア
名前: IM_JMS_filestore
ディレクトリ: *pathname*/IM_JMS_filestore
 - JMS サーバ
サーバ名: *jms_server_name* (意味のある任意の名前)
永続的ストア: *jms_store_name* (設定した JMS ファイルストア)
ターゲット: JMS サービスが実行されるサーバにこれらのオブジェクトのターゲットを設定します。インストール中に作成された `imjmsmodule` を使用します。
注: 必要な分散キューおよびトピックは、インストール中にクラスタ用に作成済みです。
4. クラスタ内のサーバごとに、各管理対象ノードに対して手順 1 ~ 3 を繰り返します。

- 作成した各 IM JMS サーバを `GeneralMonitorCFdeployment` サブ展開のターゲットとします。 `GeneralMonitorCFdeployment` を以下のリソースに関連付けます。

- `iam_im GeneralMonitorCF`
- `iam_im IMS イベント`
- `iam_im 実行時ステータス`
- `iam_im サーバ コマンド トピック`
- `iam_im 一般モニタ メッセージ`

注: クラスタはインストーラによって `GeneralMonitorCFdeployment` のターゲットとして使用されました。したがって、そのクラスタはターゲットとして削除する必要があります。

- 設定を続行するには、ワークフロー用の分散 JMS サーバを設定します。

ワークフロー用分散 JMS サーバの作成

開発環境でワークフローを使用する場合は、WebLogic クラスタの追加 JMS リソースを作成します。

次の手順に従ってください:

- 各管理対象ノードで `WP_JMS_filestore` ディレクトリを作成します。例を以下に示します。

```
WL_HOME¥user_projects¥WP_JMS_filestore
```

- WebLogic 管理コンソールで、各管理対象ノードの JMS サーバを作成します。各 JMS サーバのターゲットを管理対象ノード名に設定し、手順 1 で作成したファイルストアを使用するように各 JMS サーバを設定します。

- 作成した各 ワークフロー JMS サーバに `wpConnectionFactory` サブ展開を設定します。

`wpConnectionFactory` が `queue/wpServAutoActQueue`、`queue/wpUtilQueue`、`queue/wpEventQueue`、および `jms/wpConnectionFactory` の各リソースに関連付けられます。

注: クラスタはインストーラによって `wpConnectionFactory` のターゲットとして使用されました。したがって、そのクラスタはターゲットとして削除する必要があります。

- ワークフロー データベースのワークフロー データ ソースを作成します。

クラスタのデータ ソースを作成する際には、ターゲットをクラスタに設定し、`[Logging Last Resource]` を有効にします。

5. クラスタ内の サーバごとに、1つの管理対象ノードに対してこの手順を繰り返します。

プロキシ プラグインの設定

WebLogic ドキュメントの説明に従って、Web サーバ用の WebLogic プロキシ プラグインをインストールします。次に、以下のいずれかの手順で、プロキシ プラグイン ファイルを変更します。

- [IIS Web サーバ用プラグインの変更](#) (P. 63)
- [iPlanet Web サーバ用プラグインの変更](#) (P. 63)

IIS Web サーバ用プラグインの変更

次の手順に従ってください:

1. ファイル拡張子によるプロキシングとパスによるプロキシングを設定します。ファイル拡張子によるプロキシングを設定する際には、以下のプロパティを使用して [App Mapping] タブにアプリケーション マッピングを追加します:

- 実行可能ファイル: IISProxy.dll
- 拡張子: .wlforward

2. iisproxy.ini ファイルにこれらの変更を加えるか、WebLogicHost エントリと WebLogicPort エントリを削除またはコメント解除します。たとえば、以下のエントリをコメント解除します。

```
WebLogicHost=localhost  
WebLogicPort = 7001
```

3. 以下の形式で WebLogicCluster エントリを追加します。

```
WebLogicCluster="wl_hostname:port,wl_host:port,..."
```

このクラスタが 2 つのノードを含む例を以下に示します。

```
WebLogicCluster=north.com:7101,south.com:7201
```

注: IP アドレスではなく、必ずホスト名を使用してください。動的な IP アドレスを使用する場合でも、ホスト名は機能します。

iPlanet Web サーバ用プラグインの変更

次の手順に従ってください:

以下の変更を obj.conf ファイルに加えます。

1. WebLogicHost パラメーターと WebLogicPort パラメータを含む行を見つけます。以下に例を示します。

```
Service fn="wl-proxy"  
WebLogicHost="north.com" WebLogicPort="7001" PathTrim="/weblogic"
```

2. 以下の形式で、これらのパラメータを `WebLogicCluster` パラメータに置換します。

```
WebLogicCluster="wl_host:port,wl_host:port,..."
```

このクラスタが 2 つのノードを含む例を以下に示します。

```
Service fn="wl-proxy" WebLogicCluster="north.com:7001,south.com:7001"  
PathTrim="/weblogic"
```

注: IP アドレスではなく、必ずホスト名を使用してください。動的な IP アドレスを使用する場合でも、ホスト名は機能します。

WebLogic クラスタの起動

管理対象ノードの設定後、WebLogic クラスタを起動します。

注: WebLogic が運用モードの場合は、インストールまたはアップグレード後にアプリケーションサーバを初めて起動すると、CA Identity Manager EAR が自動的に展開しないことがあります。その場合は、`user_projects¥applications` フォルダから `iam_im.ear` を手動で展開してください。

次の手順に従ってください:

1. SiteMinder を使用する場合は、CA Identity Manager をサポートする SiteMinder ポリシーサーバの 1 つを起動します。

注: ポリシーサーバクラスタがある場合は、CA Identity Manager ディレクトリを作成しているか、CA Identity Manager 環境を作成または変更しているか、WorkPoint 設定を変更しているときは、ポリシーサーバを 1 つしか実行できません。

2. 各管理対象ノードでノードマネージャを起動します。

- Windows の場合: [スタート] - [プログラム] - [Oracle WebLogic Server 11gR1] - [Tools] - [Node Manager] に移動します。

- Solaris の場合: `startNodeManager.sh` スクリプトを使用します。

`startNodeManager.sh` スクリプトのサンプルは `WL_HOME¥server¥bin` にインストールされています。このスクリプトを環境に合わせて編集してください。

3. WebLogic 管理コンソールを使用して、以下のように管理対象ノードを起動します。

- a. [Environment] - [servers] - *<managed node>* - [control] - [start/stop] に移動します。

- b. クラスタ内の各管理対象ノードで、この手順を繰り返します。

4. すでに SiteMinder Web エージェントをインストールしている場合は、SiteMinder Web エージェントおよびアプリケーション サーバプロキシプラグインのインストール先にした Web サーバを起動します。

クラスタ化されたインストールの確認

すべての手順を完了して、クラスタを開始したときに、インストールが成功したことをチェックしてください。

次の手順に従ってください:

1. CA Identity Manager サーバによって使用されるデータベースを開始します。
2. 停止していた余分なポリシー サーバおよび CA Identity Manager ノードを開始します。
3. 管理コンソールにアクセスし、以下のポイントを確認します。
 - ブラウザから以下の URL にアクセスできます。
`http://im_server:port/iam/immanage`
以下に例を示します。
`http://MyServer.MyCompany.com:port-number/iam/immanage`
 - 管理コンソールが開きます。
 - アプリケーション サーバログにエラーが表示されません。
 - ディレクトリ リンクをクリックした場合、ユーザはエラー メッセージを受信しません。
4. 以下の URL 形式を使用して、アップグレードされた環境にアクセスできることを確認してください。

`http://im_server:port/iam/im/environment`

リモートプロビジョニング マネージャの設定

プロビジョニング マネージャをプロビジョニング サーバから別のシステムにインストールした場合、サーバへの通信を設定します。

注: プロビジョニング マネージャをインストールするには、CA Identity Manager 管理ツールを Windows システムにインストールします。

次の手順に従ってください:

1. プロビジョニング マネージャをインストールした Windows システムにログインします。
2. [スタート] - [プログラム] - [CA] - [Identity Manager] - [Provisioning Manager Setup] に移動します。
3. プロビジョニング サーバのホスト名を入力します。
4. [構成] をクリックします。
5. 代替プロビジョニング サーバについては、プルダウン リストからドメイン名を選択します。
6. [OK] をクリックします。

これでプロビジョニング マネージャを起動し、設定したドメイン名を参照できるようになります。

オプション プロビジョニング コンポーネントのインストール

CA Identity Manager のオプションのプロビジョニング コンポーネントは、`im-pc-release.zip` にあります。

`release` は、CA Identity Manager の現在のリリースを表します。

ZIP ファイルの内容は、以下のとおりです。

リモート エージェント

これらのコンポーネントをインストールするには、プロビジョニング コンポーネントメディア (¥RemoteAgent の下) から固有のエージェント インストーラを実行します。IPv6 サポートを望む場合は、ユーザのエージェントをインストールする必要があります。

パスワード同期エージェント

このコンポーネントをインストールするには、プロビジョニング コンポーネントメディア (¥Agent 下) からパスワード同期エージェント インストーラを実行します。

クレデンシャル プロバイダ

このコンポーネントをインストールするのは、プロビジョニング コンポーネントメディア (¥Agent 下) からクレデンシャルプロバイダ インストーラを実行します。

Bulk Loader クライアント/PeopleSoft フィード

このコンポーネントをインストールするには、プロビジョニング コンポーネントメディア (¥Clients 下) から Bulk Loader Client インストーラを実行します。

CA IAM CS SDK

このコンポーネントをインストールするには、CA Identity Manager メディア (¥Provisioning の下) から、CA IAM CS SDK のインストーラを実行します。

CCI スタンドアロン

このコンポーネントをインストールするには、プロビジョニング コンポーネントメディア (¥Infrastructure の下) から CCI スタンドアロン インストーラを実行します。

CA Identity Manager インストーラは、デフォルトではすべてのコネクタをインストールします。ただし、管理しているエンドポイントシステムにエージェントをインストールしないと、関連のコネクタを使用できない場合があります。

コネクタはプロビジョニングサーバ上で実行されて、エンドポイントによって管理されているシステムと通信します。たとえば、プロビジョニングサーバに ADS コネクタがインストールされた場合にのみ、Active Directory Services (ADS) を実行するシステムを管理できます。

注: 各コネクタの詳細については、「コネクタガイド」を参照してください。

これらのコンポーネントの詳細については以下のガイドを参照してください。

- クレデンシャルプロバイダ (管理ガイド)
- パスワード同期エージェント (管理ガイド)
- Connector Xpress (Connector Xpress ガイド)
- コネクタで使用するエージェント (コネクタガイド)

第 5 章: 個別データベース設定

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストールステータス \(P. 69\)](#)

[個別データベースの作成 \(P. 70\)](#)

[個別データベースを作成する方法 \(P. 71\)](#)

インストールステータス

このテーブルでは、インストールプロセスにおける現在のステータスがわかります。

現在のステータス	インストール処理の手順
	1. あらかじめ必要なハードウェアとソフトウェアをインストールし、要件に応じてシステムを設定します。
	2. 次のインストールの 1 つを実行します。 <ul style="list-style-type: none">■ 単一ノードへのインストール■ アプリケーションサーバクラスタへのインストール
X	3. (オプション) 個別のデータベースを作成します。
	4. (オプション) レポートサーバをインストールします。
	5. (オプション) 代替のプロビジョニングディレクトリ、代替のプロビジョニングサーバ、およびコネクタサーバをインストールして、フェイルオーバーと負荷分散をサポートします。

個別データベースの作成

CA Identity Manager には、監査、スナップショット（レポート）、ワークフローおよびタスク永続性用のオブジェクトおよびデータを格納するためのリレーショナルデータベースが必要です。CA Identity Manager のインストール時、アプリケーションサーバが起動されるときに、すべてのデータベーススキーマが自動的に作成されます。ただし、スケーラビリティを目的として、個別のデータベースを作成し、インストール中に CA Identity Manager によって最初に作成された既存のデータベーススキーマのいずれか 1 つと置換する場合があります。

以下についてデータベース インスタンスを作成できます。

- ワークフロー
- 監査
- タスク永続性
- オブジェクトストア
- スナップショット（レポート）
- アーカイブ（タスク永続性アーカイブ）

重要: CA Identity Manager データベーススキーマファイル用の Windows デフォルトの場所を以下に示します。

- ワークフロー：このセクションを参照し、CreateDatabase スクリプトを実行します。
- 監査：C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\db
- タスク永続性：C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\db
- オブジェクトストア：C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\db
- スナップショット（レポート）：C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\imrexpertools\db
- アーカイブ（タスク永続性アーカイブ）：C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\db

個別データベースを作成する方法

CA Identity Manager 用個別データベースを作成する方法



手順

1. CA Identity Manager 用の Microsoft SQL Server または Oracle データベースのインスタンスを作成します。
2. データ ソースを編集します。
3. (オプション) SQL スクリプトを実行します。

MS SQL Server データベース インスタンスの作成

次の手順に従ってください：

1. SQL サーバでデータベース インスタンスを作成します。
2. ユーザを作成し、ユーザのプロパティを編集して、このユーザにデータベースに対して必要な権限（public および db_owner 権限など）を付与します。

注：ユーザは、データベースを作成するための .sql スクリプトによって作成されたすべてのテーブルに対して少なくとも選択、挿入、更新、および削除の権限を持っている必要があり、これらのスクリプトで定義されたすべてのストアドプロシージャ（該当する場合）を実行できる必要があります。たとえば、ユーザは、テーブルについてのこれらの許可が以下のデフォルトの場所で定義されている必要があります。

```
C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\db\taskpersistence\sqlserver\idm_db_sqlserver.sql
```

3. ユーザのプロパティの編集中、先ほど作成したデータベースをユーザのデフォルト データベースとして設定します。
4. データベースがインストールされているサーバの [SQL Server のプロパティ] ダイアログボックスの [セキュリティ] タブで、[認証] 設定が「SQL Server」の値であることを確認します。

注：Microsoft SQL Server の詳細については、Microsoft SQL Server のドキュメントを参照してください。

Oracle データベース インスタンスの作成

次の手順に従ってください:

1. 新規表スペースを作成します。
2. 新規ユーザを作成します。
3. 新規データベースへのユーザ権限を付与します。
 - テーブルの作成/変更/ドロップ
 - ビューの作成/変更/ドロップ
 - インデックスの作成/変更/ドロップ
 - ストアドプロシージャの作成/置換/ドロップ
 - 機能の作成/置換/ドロップ
 - シーケンスの作成/ドロップ
 - トリガの作成/置換/ドロップ
 - タイプの作成/置換/ドロップ
 - レコードの挿入/選択/削除
 - CREATE SESSION/データベースへの接続
4. ユーザへの DBA 権限の付与

注: Oracle の詳細については、Oracle のドキュメントを参照してください。

データソースの編集

次の手順に従ってください:

1. WebLogic サーバ管理コンソールで、適切なデータ ソース記述子を開きます。
データ ソース記述子の JNDI 名は以下のとおりです。
 - タスク永続性 : iam/im/jdbc/jdbc/idm
 - ワークフロー : iam/im/jdbc/jdbc/weblogic.jdbc.jts.WPDS
 - 監査 : iam/im/jdbc/auditDbDataSource
 - スナップショット : iam/im/jdbc/jdbc/reportsnapshot
 - オブジェクトストア : iam/im/jdbc/jdbc/objectstore
 - アーカイブ : iam/im/jdbc/jdbc/archive

2. データソース記述子内の **DatabaseName**、**User**、および **Password** の値を新しいデータベース用の適切な値に変更します。

CA Identity Manager を再起動すると、データベーススキーマ (SQL スクリプト) が自動的に適用されます。

3. データソース上で **[Support Global Transactions]** を無効にします。

CA Identity Manager の再起動時にデータベーススキーマ (SQL スクリプト) を自動的に適用するか、スクリプトを実行して今すぐ変更を適用できます。

SQL スクリプトの実行

CA Identity Manager の起動時に、SQL スクリプトはデータベースに対して自動的に実行されますが、ユーザ自身が SQL スクリプトを実行する場合は、アプリケーションサーバを再起動する前に以下の手順に従ってください。

これらのスクリプトは、CA Identity Manager 管理ツールでインストールされます。

次の手順に従ってください:

1. 以下のいずれかを実行します。
 - **Microsoft SQL Server** : クエリアナライザ: ツールを開き、必要なスクリプトを選択します。
 - **Oracle** : 必要なスクリプトの SQL プロンプトを開きます。
2. データベースの作成目的に応じて以下のいずれかのスクリプト (デフォルトの Windows の場所と共に表示) を選択します。
 - **タスク永続性** :
 - **Microsoft SQL Server** : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\db\taskpersistence\sqlserver\idm_db_sqlserver.sql
 - **Windows 上の Oracle** : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\db\taskpersistence\oracle9i\idm_db_oracle.sql
 - **UNIX 上の Oracle** :
/opt/CA/IdentityManager/IAM_Suite/Identity_Manager/tools/db/taskpersistence/oracle9i/idm_db_oracle.sql

- 監査：
 - Microsoft SQL Server : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\db\auditing\sqlserver\ims_mssql_audit.sql
 - Windows 上の Oracle : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\db\auditing\oracle\ims_oracle_audit.sql
 - UNIX 上の Oracle :
/opt/CA/IdentityManager/IAM_Suite/Identity_Manager/tools/db/auditing/oracle/ims_oracle_audit.sql
 - スナップショット：
 - Microsoft SQL Server : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\imreexport\db\sqlserver\ims_mssql_report.sql
 - Windows 上の Oracle : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\imreexport\db\oracle\ims_oracle_report.sql
 - UNIX 上の Oracle :
/opt/CA/IdentityManager/IAM_Suite/Identity_Manager/imreexport/db/oracle/ims_oracle_report.sql
 - ワークフロー：「ワークフローのスキプトの実行」のセクションを参照してください。
3. スクリプトを実行します。
 4. スクリプトを実行したときに、エラーが表示されなかったことを確認します。

ワークフローのスキプトの実行

CA Identity Manager には、新規ワークフロー データベース インスタンスをセットアップするための SQL スクリプトが含まれます。

CreateDatabase スクリプトを実行する方法

次の手順に従ってください:

1. スクリプトを実行する前に、CreateDatabase.bat または .sh スクリプト内の DB_CLASSPATH 属性に対する sqjjdbc.jar へのパスを追加します。
2. コマンドプロンプトから、CreateDatabase.bat または sh を実行します。このファイルのデフォルトの場所は、以下のとおりです。

Windows : C:¥Program Files¥CA¥Identity Manager¥IAM Suite¥Identity Manager¥tools¥Workpoint¥install.

UNIX :

/opt/CA/IdentityManager/IAM_Suite/Identity_Manager/tools/Workpoint/install.

コマンドプロンプト ウィンドウおよび WorkPoint アプリケーションが表示されます。

3. ドロップダウン リストからデータベース タイプを選択します。
4. 設定ユーティリティのフィールドに入力するには、以下のガイドラインを使用します。
 - JDBC クラス パラメータについては、以下を入力します。

Oracle : oracle.jdbc.driver.OracleDriver

SQL Server : com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver
 - JDBC URL については、以下を入力します。

Oracle : jdbc:oracle:thin:@wf_db_system:1521:wf_oracle_SID

SQL Server : jdbc:sqlserver://wf_db_system:1433; databaseName=wf_db_name
 - データベース ユーザ ID パラメータについては、ワークフロー データベースを作成するとき作成したワークフロー ユーザを入力します。
 - パスワード パラメータについては、ワークフロー ユーザに対して作成したパスワードを入力します。
 - データベース ID については、「WPDS」を入力します
5. デフォルトのチェック ボックスの選択を使用します。

6. [初期化] ボタンをクリックします。

設定が完了すると、以下のようなメッセージがコマンドプロンプトウィンドウに表示されます。

The create database process finished with 0 errors. (データベース作成プロセスはエラー 0 で終了しました。)

7. アプリケーションサーバを再起動します。

第 6 章: レポート サーバのインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストール ステータス \(P. 77\)](#)

[レポートिंगのアーキテクチャ \(P. 78\)](#)

[レポートの考慮事項 \(P. 79\)](#)

[ハードウェア要件 \(P. 79\)](#)

[レポート サーバをインストールする方法 \(P. 80\)](#)

[JBoss/WebLogic の CA Identity Manager およびレポート サーバ接続を保護する方法 \(P. 93\)](#)

[レポート インストールの確認 \(P. 94\)](#)

[サイレントインストール \(P. 94\)](#)

[レポートをアンインストールする方法 \(P. 95\)](#)

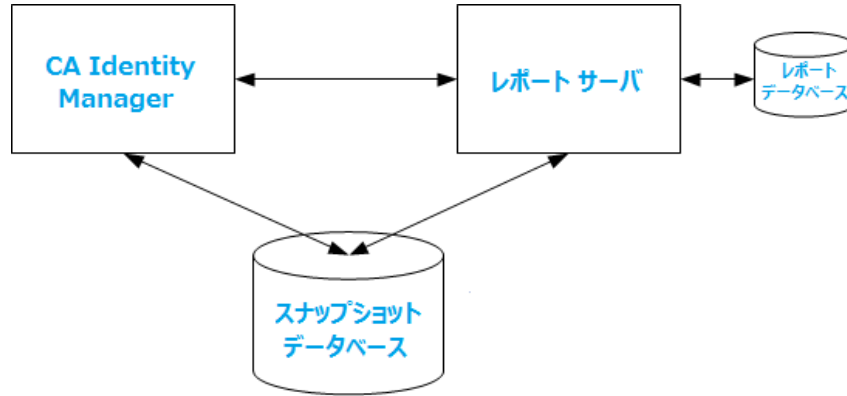
インストール ステータス

以下の表は、インストールプロセスのどこにいるかユーザに示します。

現時点	インストール プロセスの手順
	1. 前提条件のハードウェアおよびソフトウェアをインストールし、必要に応じてシステムを設定します。
	2. 以下のインストールのいずれかを実行します。 <ul style="list-style-type: none">■ 単一ノードインストール■ アプリケーション サーバ クラスタ上のインストール
	3. (オプション) 個別のデータベースを作成します。
X	4. (オプション) レポート サーバをインストールします。
	5. (オプション) レポート サーバで SSL 証明書を設定します。
	6. (オプション) フェイルオーバーと負荷分散をサポートするために、代替プロビジョニング ディレクトリ、代替プロビジョニング サーバ、およびコネクタ サーバをインストールします。

レポートニングのアーキテクチャ

CA Identity Manager では、レポートのセットアップに、以下の図の 3 つの主要コンポーネントが必要です。



注: この図のスナップショットデータベースは、監査データベースまたはワークフローデータベースである場合もあります。

レポートサーバ

別名 CA Business Intelligence のこのサーバは、CA Identity Manager およびスナップショットデータベースと直接通信して、レポートを生成します。

レポート データベース

CA レポートサーバ (Business Objects) が独自データを格納するデータベース。

CA Identity Manager

CA Identity Manager により、レポートデータベースに CA Identity Manager オブジェクトデータをエクスポートできるようになります。

スナップショット データベース

CA Identity Manager 内のオブジェクトのスナップショットデータを含む別個のデータベース

重要: レポートサーバは Business Objects Enterprise を使用します。ユーザ環境にすでにレポートサーバがあり、CA Identity Manager と共にそれを使用する場合、CA Identity Manager が必要とする最小バージョンは CA Business Intelligence 3.2 SP1 です。

レポートの考慮事項

レポート サーバをインストールする前に、以下を考慮します。

- レポート サーバのインストールは、最大で 2 時間かかる場合があります。
- レポート サーバをインストールするコンピュータに JBoss がインストールされていると、ポート競合が発生する場合があります。 Apache Tomcat が Web サーバである場合、以下のファイル内で JBoss ポート情報を見つけられます。

- jboss-service.xml

デフォルトの場所 : `jboss_home¥server¥server_configuration¥conf`

- server.xml

デフォルトの場所 :

`jboss_home¥server¥server_configuration¥deploy¥jboss-web.deployer`

`jboss_home`

JBoss のインストールパスを指定します。

`server_configuration`

サーバ設定の名前を指定します。

デフォルト値 : default

注: これらのファイルのいずれかに変更を加える場合は、JBoss を再起動します。

ハードウェア要件

レポート サーバのハードウェア要件はオペレーティングシステムに基づいています。 `installer-media-root-directory/Docs` フォルダ内のユーザのオペレーティングシステムと一致するファイル名を持つ PDF を参照します。

注: サポートされている OS バージョンおよびデータベースの詳細については、[Business Objects Web サイト](#)を参照してください。

レポートサーバをインストールする方法

以下のチェックリストでは、CA Identity Manager のレポート機能をインストールする手順について説明します。



手順

1. レポートインストール前のチェックリストを確認します。
2. レポート情報を収集します。
3. レポートサーバが必要とするポートを開きます。
4. レポートサーバ (CA Business Intelligence) および Service Packs をインストールします。
5. レジストリ スクリプトを実行します。
6. JDBC JAR ファイルをコピーします。
7. プロキシサーバをバイパスします。
8. デフォルト レポートを展開します。
9. インストール後の手順を実行します。

注: インストール後のレポートの設定の詳細については、「管理ガイド」を参照してください。

レポート インストール前のチェックリスト

レポートサーバをインストールする前に、最小限のシステムおよびデータベースの要件を満たしているか確認するために、以下のチェックリストを印刷します。

- レポートサーバをインストールする Windows または UNIX システムが、最小限のシステム要件を満たしているか確認します。
- レポートデータベースとして MySQL を使用しているか確認します。

- スナップショットデータベースのデータベース インスタンスを作成する場合は、新しいデータベース上で以下のスクリプトを実行します。
 - Microsoft SQL : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\imreexport\db\sqlserver\ims_mssql_report.sql
 - Oracle : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\imreexport\db\oracle\ims_oracle_report.sqlこれらのスクリプトを実行するために、データベース ユーザには次のものがが必要です。グローバルなクエリ リライト許可を使用してテーブル、インデックス、セッションおよびビューを作成するための、DBA、接続、およびリソースのロールならびにシステム権限。
- UNIX 上で、ローカル .profile ファイル内にグローバルとして以下のパラメータを設定します。
 - ORACLE_BASE : Oracle がインストールされている最上位のディレクトリ。
 - ORACLE_HOME : ORACLE_BASE 下の Oracle のルートディレクトリへのパス
 - LD_LIBRARY_PATH : \$ORACLE_HOME/lib32:\$ORACLE_HOME/lib
Oracle が 64 ビット インストールである場合は、lib32 を使用します。SQL Plus を使用して、Oracle データベース インスタンスに接続し、64 ビット インストールかどうかを判別します。
 - ORACLE_SID : tnsnames.ora ファイルで使用される SID 名。
 - JAVA_HOME : Java のルートディレクトリへのパス。Business Objects は以下の場所に JDK をインストールします。
report_server_home/jre注: JDK 1.5 はレポートがサポートされている最小バージョンです。

- PATH :
\$LD_LIBRARY_PATH:\$JAVA_HOME:\$JAVA_HOME/bin:\$ORACLE_HOME/bin:\$PATH

- LC_ALL : en_US.UTF-8

注: CASHCOMP 環境変数が空であることを確認してください。

■ UNIX システムの場合

■ 3 GB の空きディスク領域が /tmp 下に必要です。

■ レポートサーバをインストールするには、root 以外のユーザアカウントへのアクセスが必要です。

このユーザはローカルファイルシステムにホームディレクトリを持っている必要があります。たとえば、以下のコマンドはローカルホームディレクトリを持つユーザを作成します。

```
useradd -u 505 -g 0 -d /export/home/cabi -m cabi
```

また、インストールグループおよび root ユーザがメンバであるグループに、root 以外のユーザを追加します。

■ データベースサーバがレポートサーバと同じシステム上にない場合は、/etc/hosts ファイルにデータベースサーバ名を入力します。(DNSがある場合、この手順は不要です。)

■ 問題が発生する場合は、以下の場所の下の SDK.log を検査します。

```
/opt/CA/SharedComponents/CommonReporting3/ca-install.log
```

```
/opt/CA/SharedComponents/CommonReporting3/CA_Business_Intelligence_InstallLog.log
```

レポート情報

レポートサーバインストール中に必要な以下の情報を記録します。

フィールド名	説明	回答
管理者パスワード	Business Objects Infoview コンソールにログインするためのパスワードを定義します。	
User Name	レポートデータベースのユーザ名を識別します。	
Password	レポートデータベースの管理パスワードクレデンシャルを識別します。	

フィールド名	説明	回答
Pre-Installed Tomcat Information	Tomcat の以前のインストールについてのパスおよびポート番号を識別します。ユーザが Tomcat の以前のインストールを使用しない場合、レポートサーバインストーラは Tomcat をインストールできます。	
Tomcat Port Numbers	Tomcat の接続、リダイレクト、およびシャットダウンのポート。 注: レポートサーバを CA Identity Manager と同じシステムにインストールする場合は、CA Identity Manager をインストールする際にアプリケーションサーバ URL に対して指定したポート番号と Tomcat 接続ポートが矛盾しないことを確認します。	

レポートサーバ用ポートを開く

CA Identity Manager およびレポートサーバが正常に通信するには、以下のポートが開かれている必要があります。

- 集中管理サーバ (CMS) ポート : 6400
- レポートサーバ Web アプリケーションポート :
 - JBoss/Tomcat : 8080
 - WebLogic : 7001
 - WebSphere : 9080

以下の点に注意してください。

- このポートは CA Identity Manager サーバのアプリケーション サーバポートではありません。
- Web サーバポートはレポートサーバインストール中に提供されません。ユーザがインストール中に別のポートを使用する場合は、レポートサーバが実稼働で展開されているとき、それらのポートがファイアウォールを介して開いている必要があります。
- レポートサーバは、CA Identity Manager によって使用されるアプリケーションサーバに接続しません。
- CA Identity Manager がレポートおよび監査データベース用に設定したすべてのデータベースポート。CA Identity Manager サーバは、レポートサーバにデータベース情報を送信する必要があるため、これらのポートが開かれている必要があります。たとえば、スナップショットデータベースが Oracle データベースである場合、レポートサーバはアウトバウンドに開いた Oracle ポートを必要とします。

CA レポートサーバのインストール

サポートされる Windows または UNIX システムにレポートサーバをインストールできます。以下のセクションでは、Windows および UNIX インストールウィザードを使用してレポートサーバをインストールする方法を詳述します。

重要: 実稼働環境の場合は、CA Identity Manager サーバを有するシステムからレポートサーバを別個のシステムにインストールします。レポートサーバをデモンストレーション目的のための CA Identity Manager サーバと同じシステムにインストールする場合、JBoss がデフォルト Tomcat ポート 8080 および 1099 のポートを使用しているときは、それらのポートを選択しないでください。

注: CA Identity Manager は、CA Business Intelligence 3.3 SP1（これは Business Objects XI 3.0 SP6 です）をサポートします。

Windows インストーラの実行

レポートサーバメディアにある Windows インストールウィザード（Disk1¥InstData¥VM¥Install.exe）を使用して、レポートサーバをインストールします。

注: [CA Support サイト](#)の CA Identity Manager 製品ダウンロードで、レポートサーバをダウンロードすることができます。

レポートサーバをインストールする手順を以下に示します。

次の手順に従ってください:

1. アプリケーションをすべて終了します。
2. レポートサーバをダウンロードして解凍します。
3. Disk1¥InstData¥VM に移動し、インストールの実行プログラムをダブルクリックします。

インストールウィザードが起動されます。

4. レポートサーバをインストールするために収集されたレポート情報を使用します。

以下の点に注意してください。

- インストール中に、新規インストールを選択します。この選択は、レポートデータベースとして MySQL を使用することを確認するのに役立ちます。デフォルト以外のポートがポート競合を回避するように設定する必要がある場合は、カスタムインストールを選択しますが、必ずレポートデータベースに MySQL を選択します。
 - IIS を選択解除して、Web サーバとして Tomcat を選択します。
 - レポートサーバを CA Identity Manager と同じシステムにインストールしている場合は、Tomcat 接続ポートを慎重に選択します。そのポートが、CA Identity Manager のインストール時にアプリケーションサーバ URL に対して指定したポート番号と矛盾しないことを確認してください。ただし、実稼働環境内の CA Identity Manager サーバとは異なるシステムにレポートサーバをインストールすることをお勧めします。
5. インストール設定を確認し、[インストール] をクリックします。
レポートサーバがインストールされます。

UNIX インストーラの実行

以下のコマンドの実行により、インストール ファイルに実行許可を追加します。
`chmod+x /cabi-linux-3_2_00/cabiinstall.sh`

重要: さまざまなサブネットにわたって実行された場合、インストーラがクラッシュすることがあります。この問題を回避するには、レポートサーバをホストシステムに直接インストールします。

レポートサーバをインストールするには、以下の手順を実行します。

次の手順に従ってください:

1. レポートサーバをインストールするために作成した `root` 以外のユーザとしてログインします。
2. すべてのアプリケーションを終了します。
3. レポートサーバをダウンロードして `tar` ファイルを解凍します。

注: CA Support サイトの CA Identity Manager 製品ダウンロードで、レポートサーバをダウンロードすることができます。

4. コマンドウィンドウを開けて、インストールプログラムがある場所へ移動します。
5. 以下のコマンドを入力します。

```
/cabi-solaris-3_2_00/cabiinstall.sh
```

6. レポートサーバをインストールするために収集されたレポート情報を使用します。

以下の点に注意してください。

- インストール中に、新規インストールを選択します。この選択は、レポートデータベースとして **MySQL** を使用することを確認するのに役立ちます。デフォルト以外のポートがポート競合を回避するように設定する場合は、カスタムインストールを選択しますが、必ずレポートデータベースに **MySQL** を選択します。
 - **Web** サーバとして **Tomcat** を選択します。
 - インストーラは、`/opt/CA/SharedComponents/CommonReporting3` にレポートサーバをインストールします。別の場所を指定して、インストール場所を変更することはできません。`/opt/CA` ディレクトリに対しては `root` 以外のユーザ権限が必要なので、それがないとインストールは失敗します。
7. インストール設定を確認し、[インストール] をクリックします。
レポートサーバがインストールされます。

Linux インストーラの実行

次の手順に従ってください:

1. X-サーバをクライアント オペレーティング システム上にインストールして起動します。

以下の場所から X-Win32 をダウンロードできます。

<http://www.starnet.com/products/xwin32/download.php>

2. Business Objects インストール アカウントを使用して、Linux にログオンし、以下のコマンドを実行します。

```
bash$ export DISPLAY=$YOURXWin32ClientMACHINENAME:0.0
bash$ echo &DISPLAY
bash$ cd $INSTALLDIR/bobje/setup/
bash$ source env.sh
bash$ regedit
```

「\$INSTALLDIR」はレポートサーバがインストールされている場所です。

3. X-win32 クライアント システムに切り替えます。

設定が成功したことを示す Registry Editor メッセージが表示されます。

4. 以下の HKEY_LOCAL_MACHINE の場所の下にレジストリ カテゴリを作成します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥Business Objects¥Suite 12.0¥Crystal
Reports¥DatabaseOptions
```

5. DatabaseOptions カテゴリ下に MergeConnectionProperties という名前のキーを追加し、値を「Yes」に設定します。

6. 以下の場所 HKEY_CURRENT_USER の下に MergeConnectionProperties という名前のキーを追加します。

```
HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Business Objects¥Suite 12.0¥Crystal
Reports¥DatabaseOptions
```

7. MergeConnectionProperties の値を「Yes」に設定します。

8. インストールが成功したことを確認するために、Infoview 内のレポートをリフレッシュまたはスケジュールします。

レジストリ スクリプトの実行

CA Identity Manager がレポートサーバ内のレポートのデータソースを変更するように、mergeConnection スクリプトを実行します。

注: 64 ビットシステムでは、この手順を省略します。レポートサーバは 32 ビットアプリケーションです。したがって、レジストリの 32 ビット側を使用します。64 ビットシステムで、SysWOW64 から REGEDT32 を直接開き、タイプが「REG_SZ」で値が「Yes」の MergeConnectionPropertie キーを作成します。以下の場所にキーを作成します。

```
@HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\Business Objects\Suite 12.0\Crystal Reports
```

Windows では、以下の手順に従います。

1. CA Identity Manager 管理ツールキットを有するシステムからレポートサーバに mergeConnection スクリプトをコピーします。ツールキットを有するシステムで、このスクリプトのデフォルトの場所は以下のとおりです。

```
C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\ReportServerTools
```

2. mergeconnections_3.0.reg スクリプトを実行して、表示されるプロンプトに回答します。
3. [スタート] - [Program Files] - [CA] - [Report Server] - [Central Configuration Manager] をクリックします。
4. Tomcat および BO サーバサービスを含むすべてのサービスが開始します。

UNIX および Linux では、以下の手順に従います。

1. mergeconnections スクリプト内の Windows 制御文字をチェックします。

バイナリモードの FTP を使用してソフトウェアをダウンロードした場合、これらの文字はこのスクリプト中にありません。別のダウンロード方法を使用した場合は、これらの文字を削除するために dos2unix コマンドを使用します。

2. CA Identity Manager 管理ツールキットを有するシステムからレポートサーバに mergeconnections_3.0.cf スクリプトをコピーします。ツールキットを有するシステムで、このスクリプトのデフォルトの場所は以下のとおりです。

```
/opt/CA/IdentityManager/IAM_Suite/Identity_Manager/tools/ReportServerTools
```

レポートサーバシステムで、このスクリプトを以下の場所に配置します。

```
installation-directory/bobje/enterprise120/generic
```

3. BusinessObjects Enterprise 用の環境変数のソースは以下のとおりです。

```
source installation-directory//bobje/setup/env.sh
```

4. 以下のとおり、以下のスクリプトを実行します。

```
./configpatch.sh mergeconnections_3.0.cf
```

入力を促されたとき、オプションとして [1] を選択します。

注: Linux システムでは、スクリプトを実行する前に、以下のように環境変数を設定します。

```
export _POSIX2_VERSION=199209
```

5. 以下のように、Crystal 処理サーバを再起動します。
 - a. レポートサーバをインストールするために使用した root 以外のユーザとしてログインします。
 - b. 以下のコマンドを発行します。

```
cd /opt/CA/SharedComponents/CommonReporting3/bobje
./stopservers
./startservers
```

JDBC JAR ファイルのコピー

次の手順に従ってください:

1. CA Identity Manager 管理ツールキットがインストールされている jdbcdrivers フォルダに移動します。デフォルトの場所は以下のとおりです。
 - Windows : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\lib\jdbcdrivers
 - UNIX :
/opt/CA/IdentityManager/IAM_Suite/Identity_Manager/tools/lib/jdbcdrivers
2. ojdbc14.jar (Oracle の場合) または sqljdbc.jar (SQL Server の場合) を以下の場所にコピーします。
 - Windows : CA\SC\CommonReporting3\common\4.0\java\lib
 - UNIX : /opt/CA/SharedComponents/CommonReporting3/bobje/java/lib

注: レポートサーバと互換性のある 1.2 ドライバを使用するために Tools\lib\jdbcdrivers\1.2 から sqljdbc.jar をコピーします。

3. 以下の場所にある CRConfig.xml ファイルを開きます。
 - Windows : CA\SC\CommonReporting3\common\4.0\java
 - UNIX : /opt/CA/SharedComponents/CommonReporting3/bobje/java

4. JDBC JAR ファイルの場所をクラスパスに追加します。例：
 - Windows の場合：
<Classpath>report_server_home¥common¥4.0¥java¥lib¥sqljdbc.jar;
report_server_home¥common¥4.0¥java¥lib¥ojdbc14.jar ...</Classpath>
 - UNIX の場合：
<Classpath>\${BOBJEDIR}/java/lib/sqljdbc.jar:\${BOBJEDIR}/java/lib/ojdbc14.jar:
...</Classpath>
5. ファイルを保存します。
6. 以下のように Web サーバを再起動します。
 - Windows の場合、以下の手順に従います。
 - a. [スタート] - [すべてのプログラム] - [BusinessObjects XI version] - [BusinessObjects Enterprise] - [Central Configuration Manager] に移動します。

Central Configuration Manager が開きます。
 - b. すべてのサービスを選択し、[Restart] をクリックします。
 - UNIX の場合、以下の手順に従います。

```
cd /opt/CA/SharedComponents/CommonReporting3/bobje
./stopservers
./startservers
```

プロキシサーバのバイパス

CA Identity Manager がインストールされているシステムで要求送信のチャンネルにプロキシサーバを使用している場合、プロキシサーバをバイパスする必要があります。詳細については、「[Java Networking and Proxies](#)」を参照してください。

デフォルトレポートの展開

CA Identity Manager には、レポートに使用できるデフォルト レポートが付属しています。BIconfig は、固有の XML 形式を使用して CA Identity Manager 用のこれらのデフォルト レポートをインストールするユーティリティです。

レポート サーバの旧バージョンからアップグレードしている場合は、まず中央管理コンソールを使用して CA Identity Manager Reports フォルダを削除します。既存のレポートは動作しません。その後、新しいレポートサーバのデフォルト レポートを展開できます。

重要: このプロセスはすべてのデフォルト レポートを更新します。デフォルト レポートをカスタマイズした場合は、更新を実行する前にそれらを必ずバックアップしてください。

次の手順に従ってください:

1. レポート サーバに関する以下の情報を収集します。
 - ホスト名
 - 管理者名
 - 管理者パスワード
 - スナップショット データベースのタイプ
2. Reports installer-root-directory/disk1/cabi/biconfig フォルダから im_admin_tools_dir/ReportServerTools フォルダにすべてのコンテンツをコピーします。
3. JAVA_HOME 変数を、インストールした JDK1.5 の 32 ビットバージョンに設定します。
4. 以下のいずれかのコマンドを実行します。
 - Microsoft SQL スナップショット データベースの場合：

```
biconfig -h "hostname" -u "administrator_name" -p "administrator_password" -f "ms-sql-biar.xml"
```
 - Oracle スナップショット データベースの場合：

```
biconfig -h "hostname" -u "administrator_name" -p "administrator_password" -f "oracle-biar.xml"
```

注: UNIX オペレーティング環境で、biconfig.sh が実行許可を持っていることを確認します。

- 手順 4 でコマンドを実行した場所にある `biconfig.log` ファイルを表示します。
- デフォルト レポートが正常にインストールされたことを確認します。ログファイルの末尾のステータスを調べます。正常なインストールは、以下のよう示されます。

```
ReportingDeployUtility - Reporting utility program terminated and return code = 0
```

BusinessObjects XI 3.x のインストール後の手順

レポートタスクを実行し、「Server Input% not found or server may be down" error message」というエラーメッセージを受信した場合は、以下の手順を実行します。

次の手順に従ってください:

- レポートサーバインストール中に入力したユーザ名およびパスワードを使用して、中央管理コンソールにログインします。
- メインダッシュボードの下の [Servers] を選択します。
- [Server Name] 欄の下の [Input File Repository server] を探して、名前をダブルクリックします。
- [Server Name] テキストボックスに、以下を入力します。
`Input.report_server_hostname.InputFileRepository`
- [Save] をクリックします。
- [Server Name] 欄の下の [Output File Repository server] を探して、名前をダブルクリックします。
- [Server Name] テキストボックスに、以下を入力します。
`Output.report_server_hostname.OutputFileRepository`
- [Save] をクリックします。
- [Server List] 内のサーバを選択して、すべてのサーバを再起動します。

JBoss/WebLogic の CA Identity Manager およびレポート サーバ接続を保護する方法

CA Identity Manager とレポート サーバは保護されていない接続で通信します。SSL (Secure Sockets Layer) 接続を使用すると、レポート サーバと CA Identity Manager 間の接続を保護することができます。

SSL 接続は、レポート サーバからデータがアクセスされるときに通信が暗号化されることを保証します。SSL を設定する前に、BO (Business Object) サーバで HTTPS が有効なことを確認してください。SSL で接続を保護するには、自己署名証明書または CA (認証局) からの証明書を使用できます。

自己署名証明書を使用して、SSL 証明書を設定するには、以下の手順に従います。

1. 証明書を生成するツールを使用して、BO サーバで使用されたキーストアから証明書をエクスポートします。
2. CA Identity Manager がインストールされているディレクトリに証明書をコピーします。
3. Java 信頼ストアに証明書をインポートします (cacerts)。CA Identity Manager サーバによって現在使用されている Java バージョンにも証明書がインポートされていることを確認します。
4. 変更を有効にするため、アプリケーション サーバを再起動します。
5. CA Identity Manager で、[システム] - [レポート] - [レポート サーバ接続] に移動します。[セキュア接続] オプションを選択します。
6. [テスト接続] をクリックして、接続を確認します。

以下の手順は、Keytool ユーティリティを使用して、証明書をエクスポート/インポートする例を示しています。

次の手順に従ってください:

1. BO サーバで、コマンドプロンプトを開き、以下のコマンドを入力して、キーストアから証明書をエクスポートします。

Windows の場合 :

```
..%jvm%bin%keytool -export -alias testcert -file certificate.cer -keystore c:%cert%.keystore -storepass <keystore password>
```

Linux または Solaris の場合 :

```
../jvm/bin/keytool -export -alias testcert -file certificate.cer -keystore /root/.keystore -storepass <keystore password>
```

2. CA Identity Manager がインストールされているディレクトリに証明書をコピーします。

3. CA Identity Manager サーバで、コマンド プロンプトを開き、以下のコマンドを入力してキーストアに証明書をインポートします。

Windows の場合 :

```
..%jvm%bin%Keytool -import - trustcacerts -file c:%cert%certificater.cer -alias testcert -keystore JAVA_HOME%jre%lib%security%cacerts -storepass password
```

Linux または Solaris の場合 :

```
../jvm/bin/Keytool -import - trustcacerts -file /root/certificater.cer -alias testcert -keystore JAVA_HOME/jre/lib/security/cacerts -storepass password
```

証明書が正常にインストールされます。

注: レポート サーバに SSL を設定するには、ベンダー固有のドキュメントを参照することを推奨します。レポート サーバは Tomcat サーバと IIS サーバをサポートします。

レポート インストールの確認

レポートが正しくインストールされていることを確認するには、以下の手順に従います。

- 中央管理コンソールで、すべてのサービスが実行されていることを確認します。
- ユーザのレポート データベースが実行されていることを確認します。

注: インストール後のレポートの設定の詳細については、「管理ガイド」を参照してください。

サイレント インストール

レポート サーバのサイレント インストールの詳細については、「CA Business Intelligence インストール ガイド」を参照してください。レポート サーバインストーラ ファイルを解凍する場合、レポート サーバ ドキュメントは以下のいずれかの場所で利用可能です。

- **Windows** : `install_root_directory%Docs%CABI_Impl_ENU.pdf`
- **UNIX** : `install_root_directory/Docs/ENU/CABI_Impl_ENU.pdf`

レポートをアンインストールする方法

システムでポリシー サーバが不要になった場合は、アンインストールします。**注:** 詳細については、CA Business Intelligence のドキュメントを参照してください。

レポート サーバをアンインストールした後に、[残存するアイテムを削除します](#) (P. 95)。

残存アイテムの削除

以下のセクションでは、できるだけシステムをクリーンに保ち、同じシステムへのレポート サーバの再インストールが失敗するのを防ぐために、レポート サーバをアンインストールした後に手動で削除する必要があるアイテムの詳細について説明します。

Windows アイテムの削除

次の手順に従ってください:

1. `report_server_home` に移動します。
`report_server_home` は、レポート サーバのインストールパスを示します。
2. BusinessObjects Enterprise 12 フォルダを開き、以下のフォルダを削除します。
 - Data
 - java
 - Logging
 - Samples
 - Web Content
 - Web Services
 - win32x86
3. Report Server フォルダに戻ります。
4. 共通フォルダを開きます。
5. 4.0 フォルダを開き、以下のフォルダを削除します。
 - `crystalreportviewers115`
 - `java`

残っていたアイテムの削除が完了しました。

UNIX アイテムの削除

UNIX 上に残存するレポート サーバ アイテムを削除する手順を以下に示します。

次の手順に従ってください:

1. コマンドプロンプトから、以下の場所へ移動します。
`/opt/CA/SharedComponents`
2. `CommonReporting3` を削除します。

残存アイテムの削除が完了しました。

第 7 章: コネクタ サーバのインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[コネクタ サーバの前提条件](#) (P. 97)

[CA IAM CS のインストール](#) (P. 100)

[C++ Connector Server のインストール](#) (P. 103)

[CA IAM CS のサイレントインストール](#) (P. 104)

[CA IAM CS 用 SDK のインストール](#) (P. 105)

[コネクタ サンプルのインストール](#) (P. 105)

[JDBC サポートのセットアップ](#) (P. 106)

[コネクタのセットアップに関する詳細情報](#) (P. 111)

コネクタ サーバの前提条件

コネクタ サーバインストールを準備する手順については、以下のセクションを参照してください。

システム要件

CA IAM CS を、プロビジョニングサーバまたは CA Identity Manager サーバと同じコンピュータにインストールする必要はありません。

一部のコネクタは、エンドポイント上のエージェントを必要とします。詳細については、「コネクタ ガイド」および「[エンドポイントガイド](#)」を確認してください。

CA IAM CS のインストールプログラムには、独自の Java 仮想マシンが含まれます。したがって、Java を個別にインストールする必要はありません。

タイムゾーンの考慮事項

典型的な環境において、時刻は、プロビジョニングサーバ内、および CA IAM CS によって参照されるさまざまなエンドポイントに格納されます。コンポーネントは、同じタイムゾーンを持つサーバ上で実行される必要はありません。ただし、すべてのコンポーネントが同じ絶対時間を使用する必要があります。

ファイルの場所

下記の表に、Windows および UNIX のデフォルトディレクトリを示します。実際のインストールディレクトリは、オペレーティングシステム、およびインストールプロセス中のユーザの選択に依存します。

パス表記法	デフォルト	ディレクトリ
	Windows	UNIX
<i>im-home</i>	C:\Program Files\CA\Identity Manager	/opt/CA/IdentityManager
<i>imps-home</i>	C:\Program Files\CA\Identity Manager\Provisioning Server	/opt/CA/IdentityManager/ProvisioningServer
<i>cs-home</i>	C:\Program Files\CA\Identity Manager\Connector Server	/opt/CA/IdentityManager/ConnectorServer
<i>cs-sdk-home</i>	C:\Program Files\CA\Identity Manager\Connector Server SDK	/opt/CA/IdentityManager/ConnectorServer SDK
<i>conxp-home</i>	C:\Program Files\CA\Identity Manager\Connector Xpress	/opt/CA/IdentityManager/ConnectorXpress

32 ビットおよび 64 ビット アプリケーション

CA IAM CS は 64 ビット アプリケーションです。C++ Connector Server (CCS) は 32 ビット アプリケーションです。64 ビット オペレーティングシステムにインストールされる場合、CCS は 32 ビット アプリケーションとして実行されます。

一部のコネクタは、サードパーティクライアントが CCS ホスト上に存在することを要求します。たとえば、Oracle Applications は Oracle Client を必要とし、DB2 は DB2 Connect を必要とします。これらのサードパーティアプリケーションの一部には、32 ビットおよび 64 ビット モードの両方があります、CCS でエンドポイントを管理する場合は、32 ビットクライアントをインストールします。

Linux の要件

Red Hat 5.x については、CA IAM CS 用のパッケージは不要です。Red Hat 6.x については、以下のパッケージを以下の順番でインストールします。

1. glibc-2.12-1.25.el6.i686.rpm
2. libX11-1.3-2.el6.i686.rpm
3. libxcb-1.5-1.el6.i686.rpm
4. libXtst-1.0.99.2-3.el6.i686.rpm
5. libXau-1.0.5-1.el6.i686.rpm
6. libXi-1.3-3.el6.i686.rpm
7. libXext-1.1-3.el6.i686.rpm
8. nss-softokn-freebl-3.12.9-3.el6.i686.rpm
9. libXmu-1.0.5-1.el6.i686.rpm
10. libXft-2.1.13-4.1.el6.i686.rpm
11. libXpm-3.5.8-2.el6.i686.rpm

非 FIPS モードインストールの場合、Linux では、エントロピーを生成する以下のコマンドが必要です。

```
/sbin/rngd -r /dev/urandom -o /dev/random -t 1
```

CA IAM CS のインストールが成功しない場合は、このコマンドを繰り返してください。

CA IAM CS のインストール

Java コネクタをホスト、ルーティング、管理するために、CA IAM CS をインストールします。複数の CA IAM CS をインストールする場合は、追加のガイドラインとして、高可用性プロビジョニングインストールについての章を参照してください。

重要: CA IAM CS またはその SDK をインストールする前に、すべてのアンチウイルスソフトウェアを無効にすることをお勧めします。インストールプロセス中にアンチウイルスソフトウェアが有効な場合、問題が発生するおそれがあります。インストールの完了後に、忘れずに対ウイルス保護を再び有効にしてください。

次の手順に従ってください:

1. Windows 管理者、あるいは UNIX または Linux の root ユーザとしてシステムにログインします。
2. コネクタ サーバをホストするすべてのコンピュータの[時間設定](#) (P. 97) が一致していることを確認します。
3. Linux システムについては、[前提条件となるパッケージ](#) (P. 99) がインストールされていることを確認します。
4. インストーラを起動します。

すべての CA Identity Manager コンポーネントをインストールするメイン インストーラを使用して、CA IAM CS をインストールできます。または、以下のサブフォルダに移動して、セットアップファイルを実行できます。

Provisioning¥ConnectorServer

5. セットアップタイプ ([Typical] または [Custom]) を選択します。[Typical] を選択した場合、インストール場所は変更できませんが、他はすべて変更できます。
6. インストールパスを入力します([Custom]セットアップタイプの場合のみ)。
7. Connector Server C++ Management を、以下のように設定します。
 - [None] -- CCS をインストールしません。後から CCS をインストールする場合、CCS は CA IAM CS によって管理されません。
 - [Local] -- CCS を CA IAM CS と同じコンピュータにインストールします。CCS は CA IAM CS によって管理されます。
 - [Remote] -- 既存のリモート CCS を管理するように CA IAM CS を設定します。

8. (推奨) CA IAM CS インストールをプロビジョニング サーバに登録してください。詳細については、「[プロビジョニング サーバの登録 \(P. 103\)](#)」を参照してください。

以下の情報を使用します。

ドメイン

プロビジョニング サーバのドメインを定義します。

サーバホスト

プロビジョニング サーバを定義します。

サーバポート

プロビジョニング サーバが実行されるポートを定義します。

ユーザ名

プロビジョニング サーバの管理者を指定します。

パスワード

プロビジョニング サーバの管理者パスワードを定義します。

9. (オプション) クラウド CA IAM CS に登録します。クラウドバージョンのコネクタ サーバとオンプレミスバージョンを接続させると、2つのコネクタ サーバは通信を行い、クラウドおよびオンプレミスのエンドポイントへの接続を管理することができます。

10. パスワードおよび以下のポートを設定します。

メッセージブローカー ポート

メッセージブローカーは、さまざまなコンピュータ上の CA IAM CS のインスタンス間のメッセージを送信します。

- HTTP ポート (デフォルト 22001)
- HTTPS ポート (デフォルト 22002)

Web ポート

以下のポートを使用し、Web インターフェースを介して CA IAM CS にログインできます。

- HTTP ポート (デフォルト 20080)
- HTTPS ポート (デフォルト 20443)

RMI レジストリ ポート

このポートを使用し、実行中の Java プロセスに関する情報を表示できます (デフォルト 1099)。

11. (オプション) HTTP プロキシを設定します。このプロキシの詳細は、以下の応用に使用できます。

- クラウドコネクタサーバと通信するとき。
- Google Apps または Salesforce のエンドポイントを作成するとき。これらのエンドポイントについては、この HTTP プロキシを使用できるか、どのプロキシも使用できないかのいずれかです。別のプロキシを指定できません。HTTP プロキシ詳細を変更するには、再度このインストールプログラムを実行して、新しいプロキシ詳細を入力します。

注: 組織がインターネットに直接接続している場合は、HTTP プロキシをセットアップしないことをお勧めします。

以下の情報を使用して、HTTP プロキシをセットアップしてください。

ホスト

エンドポイントに接続するために使用する HTTP プロキシサーバの名前を指定します。

ポート

CA IAM CS が HTTP プロキシにアクセスできるポートを指定します。

ドメイン

HTTP プロキシのドメインを指定します。

ユーザ名

プロキシサーバにログインするために使用するユーザ名を指定します。

注: 組織のプロキシサーバが認証を必要とする場合は、ユーザ名とパスワードを指定することをお勧めします。

パスワード

HTTP プロキシのドメインパスワードを指定します。

12. (オプション) FIPS 140-2 準拠モードをアクティブ化します。
13. [次へ] をクリックします。

インストールプログラムは CA IAM CS をインストールして、新規サービスを作成します。Windows 上で、これはサービスに追加されます。また、UNIX 上で、これはスクリプトに相当します。

プロビジョニング サーバの登録

常にプロビジョニング サーバに CA IAM CS を登録することをお勧めします。登録によって、プロビジョニング サーバに、インストールされた CA IAM CS を使用してそれに対して展開されたすべての静的なコネクタを管理させます。別のコネクタ サーバに特定の静的または動的なコネクタを管理させる場合は、Connector Xpress を使用して、コネクタを管理する CA IAM CS のインスタンスを指定できます。

また、コネクタがすでに CA IAM CS の特定のインスタンスに展開されている プロビジョニング サーバにおいて、Connector Xpress を使用して新しい名前空間を作成することもできます。バンドルされたテンプレートファイルを使用するか、またはそれらが利用可能でない場合は、コネクタのメタデータをインポートしてプロジェクトを作成します。メタデータが利用可能な場合は、新しい名前空間を展開します。

注: 詳細については、「Connector Xpress ガイド」を参照してください。

C++ Connector Server のインストール

CA IAM CS をインストールするときに、C++ Connector Server (CCS) をインストールできます。このトピックでの手順は、単一コネクタ サーバにも適応できます。1つまたは複数の CCS をインストールする予定がある場合は、高可用性プロビジョニングのインストールについての章を参照してください。

次の手順に従ってください:

1. インストール パッケージをアンパックしたところで、以下のプログラムを実行します。
 - Windows の場合:
Provisioning¥Provisioning Server¥setup.exe
 - UNIX の場合:
Provisioning/ProvisioningServer¥setup.bin
2. インストーラ ダイアログ ボックス内の手順を完了します。

このインストール プログラムは、ユーザに代替 プロビジョニング サーバをインストールするオプションも与えます。ただし、そのコンポーネントについては、別の手順が適用されます。

CA IAM CS のサイレント インストール

CA IAM CS をサイレント インストールできます。サイレント インストールを実行する前に、応答ファイルを作成します。

注: 応答ファイルの生成時および実行時には、完全修飾パス名を使用します。たとえば、`responsefile.txt` は有効ではありませんが、`C:\¥r esponsefile.txt` は有効です。

次の手順に従ってください:

1. コマンド ウィンドウで、解凍されたインストール ファイル内の以下の場所に移動します。

`Servers/ConnectorServer`

2. 応答ファイルを作成するには、以下のコマンドを入力してから、テンプレートに必要な値を入力します。

```
setup -options-template filename
```

3. 以下のコマンドを使用して、サイレント インストールを開始します。

```
setup -options filename -silent
```

注: 応答ファイルを作成し、同時に CA IAM CS をインストールするには、以下のコマンドを使用します。

```
setup -options-record filename
```

CA IAM CS 用 SDK のインストール

わかりやすい例を見てコネクタを書き込む方法について学習するには、CA IAM CS 用 SDK およびサンプル コネクタをインストールします。これらの例については、「*Connectors Programming Guide*」で説明します

重要: CA IAM CS をインストールしたコンピュータとは別のコンピュータに SDK をインストールします。

次の手順に従ってください:

1. CA Identity Manager インストールのダウンロードまたは他のメディアを見つけて、製品ファイル (ZIP または TAR) を解凍します。
2. 以下のサブフォルダに移動します。

Provisioning/ConnectorServerSamples

注: このフォルダ内の圧縮ファイル *jcs-connector-sdk* には SDK 自体が含まれません。他のファイルには、各々 1 つのサンプル コネクタが含まれます。

3. ファイルをこのフォルダから以下のサブフォルダにコピーします。

Provisioning/ConnectorServer

4. CA IAM CS のインストールプログラムを実行します。

注: CA IAM CS 用 SDK の詳細については、*cs-sdk-home/Readme.txt* をご覧ください。

詳細情報:

[ファイルの場所](#) (P. 98)

コネクタ サンプルのインストール

重要: テスト環境でのみサンプル コネクタを使用することをお勧めします。サンプル コネクタはサポートされていません。そのため、これらのサンプルのアンインストールプログラムはありません。

インストールを実行する前に、オペレーティング環境に対応するインストーラおよびサンプルアーカイブを同じフォルダに解凍します。

JDBC サポートのセットアップ

一部のコネクタは、ユーザ自身が JDBC 接続をアクティブにする必要があります。一部のドライバおよびライセンスを CA IAM CS と共に適法に出荷できないか、またはこれらのコネクタが有効化の前に追加の手動設定を必要とするため、インストーラによりこれらのコネクタをアクティブにすることができません。

重要: コネクタ サーバを新しいバージョンにアップグレードしたら、以下の手順を再度実行してください。

DB2 for z/OS コネクタ用ライセンス ファイルのセットアップ

DB2 for z/OS コネクタは JDBC を使用しますが、DB2 エンドポイントに接続するには、ライセンス ファイルが必要です。ライセンス ファイルを利用できるのは、DB2 Connect のライセンスを持っている場合のみです。

詳細については、以下の IBM 技術情報を参照してください。

- [IBM 技術情報： Location of the db2jcc license cisuz.jar file](#)
- [IBM 技術情報： DB2 JDBC driver is not licensed for connectivity](#)

次の手順に従ってください：

1. CA IAM CS をインストールまたはアップグレードします。
インストールでは CA IAM CS がプロビジョニング サーバと共に登録され、DB2 エンドポイント タイプを作成し、関連するメタデータを入力します。
2. DB2 Connect アクティベーション CD の以下の場所にある `db2jcc_license_cisuz.jar` を見つけます。
`/db2/license`
3. ライセンス ファイルを CA IAM CS コンピュータの以下の場所にコピーします。
`cs_home/jcs/resources/jdbc`
4. 同じ場所で `jdbc_db2_zos` スクリプトを実行します。
このスクリプトは、ライセンス ファイルを含むバンドルを作成します。このバンドルは、CA IAM CS を使用して展開します。
5. CA IAM CS にログインします。
6. 一番上の [コネクタ サーバ] タブをクリックします。
7. [コネクタ サーバ管理] 領域で、[バンドル] タブをクリックします。
8. 新しいバンドルを追加します。

注：コネクタ サーバ GUI から OSGI バンドルを展開するか、または `ca-home/jcs/data/bundles/restore` に `jar` ファイルをコピーできます。次に、コネクタ サーバを再起動し、それがロードされるまで最大 10 分待機します。

- a. 右側の [バンドル] 領域で、[追加] をクリックします。
- b. スクリプトが作成したバンドルを参照し、このコネクタが利用可能になるコネクタ サーバを選択します。
- c. [OK] をクリックします。

新しいバンドルが、[バンドル] リストに表示されます。

9. [バンドル] リストからメインコネクタバンドルを探し、リストでその名前を右クリックし、ポップアップメニューから [インポートのリフレッシュ] を選択します。

CA IAM CS は、DB2 エンドポイントに接続できるようになりました。

Sybase コネクタ用ライセンス ファイルのセットアップ

Sybase エンドポイントに接続するには、CA IAM CS では、JDBC 用 Sybase SDK のファイルが必要です。また、Sybase のライセンスが必要です。

注: Sybase は DYN/JDBC エンドポイントとしてのみ管理できます。

次の手順に従ってください:

1. 以下のドライバファイルを見つけます。 <http://www.sybase.com> からダウンロードできます。また、Sybase 製品のメディアにも含まれています。

`jConnect-6_05.zip`

2. ZIP から以下のファイルを抽出します。

`jConnect-6_05\classes\jconn3.jar`

3. `jconn3.jar` ファイルを以下の場所にコピーします。

`conxp_home/lib/`

4. すべての Connector Xpress セッションを停止して再起動します。

5. コマンドウィンドウで、以下の場所に移動します。

`cs-home/jcs/resources/jdbc`

6. 以下のスクリプトを実行します。

- Windows : `jdbc_sybase_post_install.bat`
- UNIX : `jdbc_sybase_post_install`

このスクリプトは、ライセンス ファイルを含むバンドルを作成します。このバンドルは、CA IAM CS を使用して展開します。

7. CA IAM CS にログインします。
8. 一番上の [コネクタ サーバ] タブをクリックします。
9. [コネクタ サーバ管理] 領域で、[バンドル] タブをクリックします。
10. 新しいバンドルを追加します。

注: コネクタ サーバ GUI から OSGI バンドルを展開するか、または `ca-home/jcs/data/bundles/restore` に `jar` ファイルをコピーできます。次に、コネクタ サーバを再起動し、それがロードされるまで最大 10 分待機します。

- a. 右側の [バンドル] 領域で、[追加] をクリックします。
- b. スクリプトが作成したバンドルを参照し、このコネクタが利用可能になるコネクタ サーバを選択します。
- c. [OK] をクリックします。

新しいバンドルが、[バンドル] リストに表示されます。

11. [バンドル] リストからメインコネクタバンドルを探し、リストでその名前を右クリックし、ポップアップメニューから [インポートのリフレッシュ] を選択します。

CA IAM CS は、Sybase エンドポイントに接続できるようになりました。

SQL Server コネクタの Windows 認証をセットアップ

Windows 上での Microsoft SQL ネイティブ認証をアクティブ化できるのは、Connector Xpress および CA IAM CS の両方が Windows オペレーティングシステム上で実行されている場合のみです。必要なライブラリ `sqljdbc_auth.dll` は、Connector Xpress にバンドルされています (Microsoft の Web サイトからダウンロードすることもできます)。

Connector Xpress の使用を予定している場合は、Microsoft SQL Server エンドポイントと同じドメインで Connector Xpress を実行する必要があります。また、適切なデータベース インスタンスにアクセスできるように、SQL Server を設定しておく必要があります。

次の手順に従ってください:

1. 必要な Windows ユーザとして実行するように CA IAM CS サービスを更新します。

デフォルトでは、このサービスは、ローカルシステム ユーザとして実行するように設定されています。ただし、信頼できる認証を使用している場合は、ドメイン ユーザとしてサービスを実行します。以下の手順を実行します。

 - a. [スタート] - [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] をクリックします。
 - b. [CA Identity Manager-Connector Server (Java)] を右クリックして、[プロパティ] を選択します。
 - c. [アカウント] チェック ボックスをオンにし、サービスを実行するドメイン ユーザの詳細を入力します。
2. CA IAM CS サービスを停止して再起動します。
3. Connector Xpress で Microsoft SQL データ ソースをセットアップする場合は、[Edit Sources] ダイアログ ボックスの [Native] チェック ボックスをオンにします。

Connector Xpress は、接続に使用される JDBC URL に以下を追加します。

`integratedSecurity=true`

注: データ ソースの設定の詳細については、「Connector Xpress ガイド」を参照してください。

コネクタのセットアップに関する詳細情報

コネクタおよび必須コンポーネントの詳細については、「コネクタ ガイド」を参照してください。このガイドでは、どのコンポーネントをどこにインストールするかについて説明し、各エンドポイントタイプの特定の手順についても説明します。

第 8 章: 高可用性プロビジョニングのインストール

この章のガイドラインに基づいて、代替プロビジョニング サーバとプロビジョニングディレクトリ、および C++ コネクタと Java コネクタ用のコネクタ サーバをインストールすることにより、プロビジョニング コンポーネントの高可用性を実装してください。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストール ステータス \(P. 113\)](#)

[高可用性プロビジョニング コンポーネントをインストールする方法 \(P. 114\)](#)

[冗長プロビジョニング ディレクトリ \(P. 114\)](#)

[冗長プロビジョニング サーバ \(P. 118\)](#)

[冗長コネクタ サーバ \(P. 123\)](#)

[プロビジョニングクライアントのフェイルオーバー \(P. 133\)](#)

インストール ステータス

以下の表は、インストールプロセスのどこにいるかユーザーに示します。

現時点	インストール プロセスの手順
	1. 前提条件のハードウェアおよびソフトウェアをインストールし、必要なシステムを設定します。
	2. 以下のインストールのいずれかを実行します。 <ul style="list-style-type: none">■ 単一ノードインストール■ アプリケーション サーバ クラスタ上のインストール
	3. (オプション) 別個のデータベースを作成します。
	4. (オプション) レポート サーバをインストールします。
X	5. (オプション) 代替プロビジョニングディレクトリ、代替プロビジョニングサーバ、およびコネクタ サーバをインストールして、フェイルオーバーと負荷分散をサポートします。

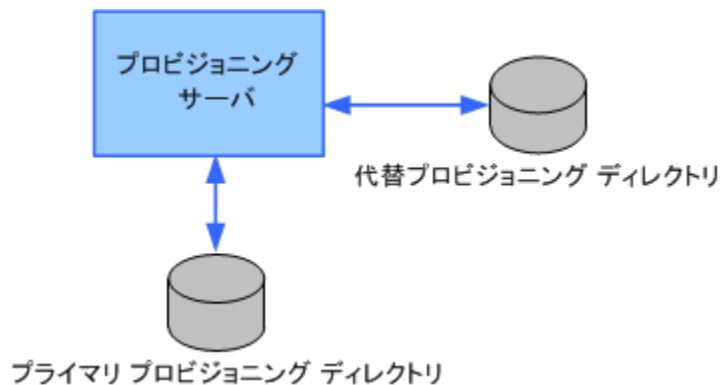
高可用性プロビジョニング コンポーネントをインストールする方法

以下の表では、高可用性のプロビジョニング コンポーネントのインストールに関連する手順について説明します。

✓	手順
	1. 負荷分散とフェイルオーバーのためにプライマリと代替のプロビジョニング サーバおよびプロビジョニング ディレクトリをインストールします。
	2. 負荷分散とフェイルオーバーのために複数のコネクタ サーバをインストールします。
	3. プロビジョニング サーバのクライアントをフェイルオーバーできるようにします。

冗長プロビジョニング ディレクトリ

フェイルオーバーをサポートするために、プライマリおよび代替のプロビジョニング ディレクトリをインストールできます。たとえば、プロビジョニング サーバとプライマリ プロビジョニング ディレクトリのある2つのシステムがある場合が考えられます。別のシステムに、代替プロビジョニング ディレクトリがあります。プライマリ プロビジョニング ディレクトリが失敗すると、代替のプロビジョニング ディレクトリが自動的に割り当てられます。



次の手順に従ってください:

1. インストールパッケージをアンパックした場所からプロビジョニング ディレクトリ インストーラを使用して、プライマリ プロビジョニング ディレクトリをインストールします。
 - **Windows の場合:**
`UnpackedInstall-Package¥Provisioning¥Provisioning Directory¥setup.exe`
 - **UNIX の場合:**
`Unpacked-Install-Package/Provisioning/ProvisioningDirectory/setup`
2. 1つ以上の代替プロビジョニング ディレクトリをインストールします。次のセクションを参照してください。

代替プロビジョニング ディレクトリのインストール

必要な前提条件設定を完了したら、代替プロビジョニング ディレクトリをインストールできます。

次の手順に従ってください:

1. 代替プロビジョニング ディレクトリをインストールする予定のシステムにローカル管理者 (Windows の場合) または root (Solaris の場合) としてログインします。
2. そのシステムに CA Directory がインストールされていることを確認します。
3. プライマリ プロビジョニング ディレクトリについて以下のいずれかが該当する場合、`%DXHOME%/config/schema` ディレクトリにカスタム スキーマ ファイルをコピーします。
 - COSX (`etrust_cosx.dxc`) が変更されている
 - LDA コネクタ (`etrust_lda.dxc`) がインストールされている
 - カスタム C++ コネクタ スキーマが作成されている

プロビジョニング ディレクトリのインストールでは、`etrust_*.dxc` という名前の付いたエキストラのスキーマ ファイルについて `%DXHOME%/config/schema` ディレクトリをチェックし、それらをグループ スキーマ ファイル、`impd.dxc` に追加します。カスタム スキーマ ファイルがローカルにコピーされていないと、プロビジョニング ディレクトリ間のデータ レプリケーションは失敗します。

4. インストールパッケージをアンパックした場所からプロビジョニング ディレクトリ インストーラを実行します。
 - **Windows の場合 :**
`UnpackedInstall-Package¥Provisioning¥Provisioning Directory¥setup.exe`
 - **UNIX の場合 :**
`Unpacked-Install-Package/Provisioning/ProvisioningDirectory/setup`
5. [High Availability] を選択し、他のプロビジョニングディレクトリがインストールされているシステムのホスト名、およびどのシステムがプライマリ プロビジョニング ディレクトリであるかについて回答します。
6. プライマリ プロビジョニング ディレクトリのインストール時と同じ回答を用い、以下に関する質問に答えます。
 - 展開サイズ
 - 共有秘密キー
 - FIPS キー
7. プライマリ プロビジョニング ディレクトリ からデータをレプリケートする方法および時期に基づいて、以下の質問に答えます。
プロビジョニング ディレクトリへのレプリケーションを開始しますか。

以前のリリースからアップグレードしている場合は、レプリケートすべき多量のデータがある場合があります。レプリケーションをこの時点で開始しない場合は、チェック ボックスをオフにする必要があります。その場合はインストール後に、既存のプロビジョニングディレクトリから LDIF データ ダンプまたはオンラインバックアップ ファイルをコピーしてそのデータをロードするか、または手動で DSA を開始し、これにより自動レプリケーションを開始する必要があります。

重要: 代替プロビジョニング ディレクトリのインストールが失敗したときは、その前にデータ レプリケーションに問題が発生している可能性があります。この場合、マスタおよび代替プロビジョニングディレクトリに、レプリケーションが発生したというレコードがあります。この時点で代替プロビジョニングディレクトリを再インストールすると、そのデータはまたレプリケートされません。代わりに、再インストールする前に、プライマリおよび代替プロビジョニングディレクトリで高可用性設定コマンドを使用して、代替プロビジョニングディレクトリを削除し、復元します。

プロビジョニング ディレクトリを持つシステムの再設定

必要に応じて、プロビジョニング ディレクトリを持たせるシステムの設定を変更できます。

次の手順に従ってください：

1. プライマリ プロビジョニング ディレクトリがインストールされているシステムにログインします。
2. コマンドラインプロンプトで、プロビジョニング ディレクトリをインストールした、高可用性サブディレクトリに移動します。以下に例を示します。

```
cd C:\Program Files\CA\Identity Manager\Provisioning  
Directory\highavailability
```

3. 以下のコマンドを入力します。

```
highavailability.bat
```

このコマンドは、次を含む現在の設定のサマリを表示します。ドメイン名、プロビジョニング サーバおよびプロビジョニング ディレクトリのそれぞれのホスト名、ならびにどれがプライマリ プロビジョニング ディレクトリであるか。

4. 追加予定の各代替プロビジョニング ディレクトリのホスト名のプロンプトに応じます。

代替プロビジョニング サーバをインストールする予定の場合は、プロンプトに応答してそれらのホスト名を追加できます。

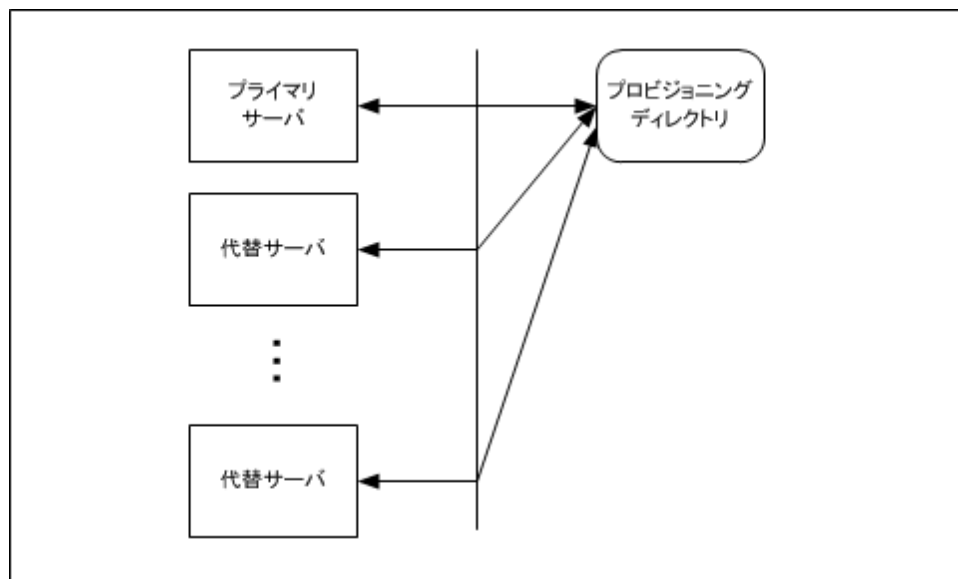
5. 他のすべてのプロビジョニング ディレクトリとプロビジョニング サーバにログインし、手順 2～4 を繰り返します。

各システムの設定は一致する必要があります。

冗長プロビジョニング サーバ

複数のプロビジョニング サーバは、プロビジョニング ドメインの作業負荷を共有して、優れたパフォーマンス、拡張性、および高可用性を提供します。最初にインストールされたプロビジョニング サーバを、プライマリ プロビジョニング サーバと呼びます。追加のサーバを、代替プロビジョニング サーバと呼びます。

この図で表示されるように、1つのプライマリプロビジョニング サーバに対して複数の代替プロビジョニング サーバを設定できます。



この図では、3つのプロビジョニングサーバがプロビジョニングドメインをサブスクリプションするように設定されています。すべてのサーバは、プライマリプロビジョニングサーバインストールのプロビジョニングディレクトリを使用するように設定されています。

プロビジョニング サーバのルータ DSA

プロビジョニング サーバは、CA Directory ルータ DSA を介し、プロビジョニング ディレクトリと直接ではなく通信します。ルータ DSA、imps-router は、プロビジョニング サーバインストーラでインストールされます。この DSA はプロビジョニング サーバからリクエストを受理し、プレフィックスに応じた適切なプロビジョニング ディレクトリ DSA (impd-co、impd-main、impd-inc、または impd-notify) にルーティングします。

高可用性インストールでは、imps-router DSA は、少なくとも 1 つの代替プロビジョニング ディレクトリ システム上のプロビジョニング ディレクトリ DSA の接続情報を持っています。プライマリ プロビジョニング ディレクトリ DSA が利用不可になると、ルータ DSA は代替 DSA の使用を試行します。

imps-router DSA は、ポート 20391、20391、20393 (それぞれアドレス、SNMP、コンソール用) を割り当てられています。

注: このソフトウェアの以前のリリースでは、etrustadmin DSA がポート 20391 を使用していました。プロビジョニング ディレクトリおよびプロビジョニング サーバが同じシステム上にない場合、プロビジョニング ディレクトリ システム上の 20391 に対する接続は失敗します。そのため、プロビジョニング サーバシステム上のポート 20391 へのこれらの接続の経路を変更します。

1 つのシステム上で実行されている CA Directory DSA が別のシステム上の DSA と通信するためには、それらが互いの接続情報を持っている必要があります。したがって、プロビジョニング ディレクトリのインストール中、それに接続できる各プロビジョニング サーバを確認してください。

プロビジョニング サーバのインストール

フェイルオーバをサポートするために、プライマリおよび代替のプロビジョニング サーバをインストールできます。

次の手順に従ってください:

1. インストールパッケージをアンパックした場所からプロビジョニング サーバ インストーラを使用して、プライマリ プロビジョニング サーバをインストールします。
 - **Windows の場合 :**
`Unpacked-Install-Package\Provisioning\Provisioning Server\setup.exe`
 - **UNIX または Linux の場合 :**
`Unpacked-Install-Package/Provisioning/ProvisioningServer/setup`
2. 1つ以上の代替プロビジョニング サーバをインストールします。次のセクションを参照してください。
3. CA Identity Manager 管理コンソールのプロビジョニングを有効にしたら、代替プロビジョニング サーバのホストとポート番号を入力します。詳細については、「[設定ガイド](#)」を参照してください。

代替プロビジョニング サーバのインストール

高可用性コマンドに含まれる前提条件設定を実行すると、1つ以上のプロビジョニングサーバをインストールできます。

次の手順に従ってください：

1. 代替プロビジョニングサーバをホストする各システムに、ローカル管理者（Windows の場合）または root（Solaris の場合）としてログインします。
2. このシステムに CA Directory がインストールされていることを確認します。
3. プライマリ プロビジョニング ディレクトリに対して以下のいずれかが該当する場合、%DXHOME%/config/schema ディレクトリにカスタム スキーマ ファイルをコピーします。
 - COSX（etrust_cosx.dxc）が変更されている
 - LDA コネクタ（etrust_lda.dxc）がインストールされている
 - カスタム C++ コネクタ スキーマが作成されている

プロビジョニング ディレクトリのインストールでは、etrust_*.dxc という名前の付いたエキストラのスキーマ ファイルについて %DXHOME%/config/schema ディレクトリをチェックし、それらをグループ スキーマ ファイル、impd.dxc に追加します。カスタム スキーマ ファイルがローカルにコピーされなければ、プロビジョニングサーバはカスタム スキーマをルーティングしません。

4. インストール パッケージをアンパックした場所からプロビジョニング サーバ インストーラを実行します。
 - **Windows の場合：**
`Unpacked-Install-Package¥Provisioning¥Provisioning Server¥setup.exe`
 - **UNIX の場合：**
`Unpacked-Install-Package/Provisioning/ProvisioningServer/setup`
5. インストーラ ダイアログ ボックス内の手順を完了します。

インストール中にチェック ボックスをオンにして、プロビジョニング ディレクトリ高可用性を設定できます。このオプションを選択する場合、すべての代替プロビジョニング ディレクトリのホスト名を入力し、プライマリ プロビジョニング ディレクトリを指定する必要があります。

プロビジョニング サーバを持つシステムの再設定

必要に応じて、プロビジョニング サーバを持たせるシステムの設定を変更できます。

次の手順に従ってください：

1. プライマリ プロビジョニング ディレクトリがインストールされているシステムにログインします。
2. コマンドラインプロンプトで、プロビジョニング ディレクトリまたはプロビジョニング サーバをインストールした場所へ移動します。その場所で、高可用性サブディレクトリを見つけます。以下に例を示します。

```
cd C:\Program Files\CA\Identity Manager\Provisioning
Directory\highavailability
```

3. 以下のコマンドを入力します。

```
highavailability.bat
```

このコマンドでは、ドメイン名、各プロビジョニング サーバおよびプロビジョニング ディレクトリのホスト名など、現在の設定の概要が表示されます。

4. プロンプトに回答して、追加するプロビジョニング サーバごとに必要なホスト名を指定します。

代替プロビジョニング ディレクトリもインストールする場合は、プロンプトに回答してホスト名を追加できます。

5. プロビジョニング ディレクトリをホストする各システムにログインし、手順 2～4 を繰り返します。

各システムの設定は一致する必要があります。

プロビジョニング サーバのフェイルオーバーの設定

CA Identity Manager がプライマリ プロビジョニング サーバと代替プロビジョニング サーバを識別するために、管理コンソールの JIAM でサーバ定義を作成します。ユーザの環境の CA Identity Manager ディレクトリと関連付けられたディレクトリ オブジェクトでこれらの定義を作成します。初期化中、CA Identity Manager は、そのオブジェクトで定義されたどのフェイルオーバー サーバ定義も読み取り、JIAM フェイルオーバー サーバ定義にそれらを追加します。

注：サーバ定義をセットアップする詳細については、「設定ガイド」を参照してください。

冗長コネクタ サーバ

コネクタ サーバフレームワーク (CSF) を使用して、複数のコネクタ サーバを実行し、固有のコンテキストでコネクタ サーバと通信するようにプロビジョニングサーバを設定できます。

その結果、プロビジョニングサーバは以下のことができます。

- プロビジョニングサーバがインストールされているプラットフォームでは利用できないエンドポイントタイプを管理するために、別のプラットフォーム上のコネクタ サーバをサポートします。
- 異なるエンドポイントタイプまたはエンドポイントのセットをそれぞれ管理する複数のコネクタ サーバと通信します。これにより、エンドポイントタイプまたはエンドポイントを並列に管理して、負荷分散を達成できます。

複数のコネクタ サーバのインストール

コネクタ サーバの複数のインスタンスをネットワーク ピアとして設定すると、それらは管理アカウントによって使用されるパスワードと自動的に同期します。このため、インストール中に同じアカウント詳細を設定するようお勧めします。

コネクタ サーバの複数インスタンスを同じコンピュータにインストールする場合は、インスタンスがそれぞれ一意のポート番号を使用することを確認します。ポート番号がコネクタ サーバの複数のインスタンスによって使用されると、サーバは予期せぬ動作をします。

コネクタ サーバフレームワーク

複数のコネクタ サーバの使用は、コネクタ サーバフレームワークと呼ばれます。コネクタ サーバフレームワークには、以下の 2 つの重要な特性があります。

- 拡張性 - マルチコネクタ サーバは、1 組のエンドポイント上で作業のロードを共有することができます。
たとえば、1 つのコネクタ サーバ上のエンドポイント上での長時間の検索は、別のコネクタ サーバによって制御されているエンドポイント上での操作機能に影響を及ぼしません。
- 通信チャネルのセキュリティ - プロビジョニングサーバおよびコネクタサーバの間の通信は、TLS を使用して暗号化されます。

エンドポイントタイプが専用プロトコルを使用して、そのプロトコルのコネクタ サーバとエンドポイント間で通信する場合、専用プロトコルの使用範囲はローカルネットワークどころか、1 つのサーバ内部のローカル通信のみに制限されることがあります。

実装戦略を決めるとき、不正なアクセスから組織内のコネクタ サーバを保護するために、以下の要因を考慮してください。

- コネクタ サーバは、クリア テキストでパスワードを開示するように設定されていることがあります。

コネクタ サーバを実行するシステムへのアクセス権限、およびコネクタ サーバの設定を変更して、コネクタ サーバを再起動するのに十分な権限を持つどのユーザも、クリア テキストでコネクタ サーバログ パスワードを表示させることができます。

コネクタ サーバは、オープン ソース `slapd` プロセスに基づいています。`slapd` プロセス ログをクリア テキストの受信パスワードにする手順は、パブリック ドメイン、たとえば、<http://www.openldap.org> のマニュアル ページで参照できます。

- コネクタ サーバは、バインド パスワードによってのみ保護されます。

コネクタ サーバは、それに接続し、Bind DN および Bind パスワードなど適切なクレデンシャルを提供できるあらゆるクライアントを信頼します。コネクタ サーバは、その接続がプロビジョニング サーバからなのか、またはそうではないのか識別しません。内部アクセス権限を持つどのユーザも、バインド パスワードを開示し、別のサーバからコネクタ サーバに接続することができるので、そのコネクタ サーバで制御されているエンドポイントに対して管理者権限を持ちます。

- コネクタ サーバはバインド パスワードへの総当たり攻撃から保護されていません。

プロビジョニング サーバと異なりコネクタ サーバは、さまざまなパスワードを用いたバインドの反復試行から保護されていません。そのため、攻撃者は、総当たり攻撃によってパスワードを推測できる場合があります。攻撃者がバインド パスワードの推測に成功すると、ロードは攻撃者に対して開かれ、このコネクタ サーバの管理下のエンドポイントを制御できます。

これらの理由により、以下のように実装を設計するようお勧めします。

- 同じ組織単位が、すべてのプロビジョニング サーバおよびコネクタ サーバへの管理アクセスを担当する。
- ユーザのコネクタ サーバはファイアウォールによって適切に保護され、非認可の手段によってポートに到達できないようになっている。
- 非 TLS ポート上のプロビジョニング サーバおよびコネクタ サーバに接続する機能は、実稼働環境で無効化されている必要があります。

複数のコネクタ サーバを 1 台のコンピュータにインストールする場合は、各インスタンスがそれぞれポート番号の一意のセットを使用することを確認します。

負荷分散およびフェイルオーバー

コネクタ リクエストのフェイルオーバーおよび負荷分散は、`csfconfig` または **Connector Xpress** を使用して定義された **CSF** 設定に基づいて各プロビジョニングサーバによって達成されます。

各プロビジョニングサーバは、それに適用され、各エンドポイントまたはエンドポイントタイプにアクセスするにはどのコネクタサーバを使用する必要があるか決定する **CSF** 設定を確認します。同じエンドポイントまたはエンドポイントタイプをサブするように設定された複数のコネクタサーバが存在するとき、フェイルオーバーと負荷分散が発生します。

フェイルオーバーと負荷分散は一体になっていて、別々に制御できません。フェイルオーバーが必要なとき以外、特定のコネクタサーバがアイドル状態のみであるように指示できません。そうではなく、2つ以上のコネクタサーバを交互に使用するように設定されているプロビジョニングサーバは、通常動作中にこれらのコネクタサーバに作業を分散します（負荷分散）。コネクタサーバの1つまたは複数が利用不可になると、残るコネクタサーバが利用不可なコネクタサーバにフェイルオーバーサポートを提供します。

信頼性および拡張性

コネクタサーバフレームワーク (**CSF**) により、コネクタサーバ高可用性機能は、信頼性および拡張性を強化します。

複数のコネクタサーバにプロビジョニングサーバを対応させることにより、信頼性は増加し、1つ以上のコネクタサーバが利用不可になってもプロビジョニングサーバの機能を続行できます。

たとえば、1つのコネクタサーバが **UNIX** エンドポイントタイプを管理し、別のコネクタサーバが **Active Directory** エンドポイントタイプを管理し、**Active Directory** コネクタサーバは利用不可になった場合、プロビジョニングサーバは今までもおり **UNIX** エンドポイントタイプを管理できます。

拡張性は、増加するエンドポイントタイプまたはエンドポイントを管理するためにより多くのコネクタサーバを追加するメカニズムを備えることにより達成されます。たとえば、エンドポイントの数が **100** に増加した場合、プロビジョニングサーバを、**20** のコネクタサーバを持ち、各コネクタサーバが **5** つのエンドポイントタイプを管理するように設定できます。または、各コネクタサーバがフェイルオーバーと負荷分散の動作に対して同様に許可するように **10** のエンドポイントタイプの重複セットを管理する、**20** 個のコネクタサーバを設定します。

Multi-Platform のインストール

コネクタ サーバフレームワークは、複数システム上に存在するコネクタ サーバの設定で、システムは **Windows** または **Solaris** システムです。

以下のユース ケースがサポートされています。

- ユース ケース 1
 - プロビジョニング サーバおよびコネクタ サーバは、**Solaris** システム上にインストールされました。
 - 別のコネクタ サーバは、**Windows** システムにインストールされ、非マルチプラットフォーム コネクタをサーブしています。
- ユース ケース 2
 - プロビジョニング サーバおよびコネクタ サーバは、**Windows** システムにインストールされました。
 - 2 番目のコネクタ サーバは、**Solaris** システムにインストールされ、マルチプラットフォーム コネクタをサーブします。
 - 3 番目のコネクタ サーバは、リモート **Windows** システムにインストールされ、他のコネクタをサーブします。
- ユース ケース 3
 - プロビジョニング サーバは、**Windows** または **Solaris** システムにインストールされました。また、**Connector Server** は同じシステムにインストールされました。
 - 複数の追加のコネクタ サーバは、**Windows** または **Solaris** システム上にインストールされ、エンドポイント エージェントとしてサーブ。このシナリオは、コネクタが専用または安全でない通信チャネルを使用しているケースで重要です。このトポロジを使用して、ネットワーク トラフィックの重要なセグメントは、専用のプロトコルによってではなく、コネクタ サーバに対するプロビジョニング サーバの標準的な通信プロトコルによって保護されます。

コネクタ サーバの設定

csfconfig コマンドの使用により、または Connector Xpress の使用によりコネクタサーバフレームワークを設定します。csfconfig コマンドは、プロビジョニングサーバに接続するための Windows レジストリ (またはプロビジョニングサーバに対して作成された UNIX 相当物) 内のデータを使用します。csfconfig コマンドは、1つのプロビジョニングサーバが実行されるシステム上で実行される必要があります。

このコマンドを使用して、以下の処理を実行できます。

- コネクタサーバ、ホストおよびポートなどの情報を持つコネクタサーバ接続オブジェクトを追加または変更します。
- コネクタサーバがどのエンドポイントまたはエンドポイントタイプに使用されるか定義します。これにより、代替プロビジョニングサーバのこの定義を変える場合もあります。
- コネクタサーバ接続情報オブジェクトを削除します。
- ドメインのコネクタサーバ接続オブジェクトをすべてリスト表示します。
- 1つまたはすべてのコネクタサーバの1つまたはすべてのコネクタサーバ接続オブジェクトを表示します。

csfconfig コマンドは、グローバルユーザクレデンシャルによって提供される認可を使用します。そのため、グローバルユーザは、適切な ConfigParam および ConfigParamContainer オブジェクトを操作するために必要な管理者権限を有する必要があります。

csfconfig Command

csfconfig コマンドを使用するためのコマンドライン構文は以下のとおりです。

```
csfconfig [--help[=op]] [operation] [argument]
```

これらのフラグは任意の順で指定できます。ユーザが --help 引数を使用していない場合、操作引数は必要です。

--help [=op] オプションは最小のオンラインヘルプを提供します。「=op」引数は、操作に必要なまたはオプションの引数をリスト表示するために使用され得ます。たとえば、「--help=add」は、加算操作の説明を提供します。その一方で「--help」は一般情報を提供します。

ヘルプがリクエストされている場合、他の引数は無視され、リクエストはサーバに送信されません。

注: ドメインパラメータは、それが常に全体のインストールで使用されるドメインである場合、省略できます。

以下のパラメータが使用可能です。

add

新しい CS 接続オブジェクトを追加します。名前は、1つがユーザーによって指定されなければ、この操作によって生成されます。必要な引数: authhost、pass。オプションの引数: authpwd、br-add、desc、domain、name、port、usetls、debug。

addspec

1つのプロビジョニングサーバに対するブランチの特殊化を追加します。

ユーザーが代替プロビジョニングサーバをインストールした場合、コネクタサーバがこれらのすべてプロビジョニングサーバ用に使用されないことがあります。または、さまざまなプロビジョニングサーバが、さまざまなブランチ（エンドポイントタイプまたはエンドポイント）用の同じコネクタサーバを使用することがあります。ブランチの特殊化は、1つのプロビジョニングサーバに固有のブランチのリストです。特殊化のないプロビジョニングサーバのみが、メイン CS 接続オブジェクトで指定されたブランチを使用します。必要な引数: auth、name、server。オプションの引数: authpwd、br-add、domain、debug。

list

CS 接続オブジェクトをすべてリスト表示します。必要な引数: auth。オプションの引数: authpwd、domain、debug。

modify

CS 接続オブジェクトを変更します。必要な引数: auth、name。オプションの引数: authpwd、br-add、br-rem、desc、domain、host、pass、port、usetls、debug。

modspec

addspec によって作成された特殊化を編集します。必要な引数: auth、name、server。オプションの引数: authpwd、br-add、br-rem、domain、debug。

remove

既存の CS 接続オブジェクトを削除します。必要な引数: auth、name。オプションの引数: authpwd、debug。

remspec

addspec によって作成された特殊化を削除します。必要な引数: auth、name、server。 オプションの引数: authpwd、domain、debug。

modify

CS 接続オブジェクトを変更します。必要な引数: auth、name。 オプションの引数: authpwd、br-add、br-rem、desc、domain、host、pass、port、server、tls、usetls。

show

特定の CS 接続オブジェクトを表示するか、または CS 接続オブジェクトをすべて表示します。その出力は、コネクタ サーバのホストおよびポートを表示します (利用可能な場合)。必要な引数: auth オプションの引数: authpwd、name、domain、debug。

各操作は、「name=value」の形式の複数の引数をとります。スペースは「=」記号の前またはこの記号の後に許可されません。また、値にスペースが含まれる場合、引数はプラットフォーム (Windows または UNIX) 用に適切に引用される必要があります。記述されているものを除き、値は提供され、空でない必要があります。

上述したように、以下の引数が操作に使用されます。

auth=<value>

認証のためにグローバル ユーザを識別します。

値形式: 「name」 (name はグローバル ユーザの名前です。)

authpwd=<value>

最初の行上にグローバル ユーザのパスワードを含むファイルを識別します。この引数が指定されないと、ユーザはパスワードを求められます。

値形式: 任意の適切なオペレーティング システム ファイルパス。

br-add=<value>

新しいブランチ グループを追加します。この引数は、複数のブランチを追加するために、複数回指定される場合があります。

値形式: 「[[endpoint,]endpoint type][@[domain]]」。すべてのブランチを表すには、「@」単独のブランチを使用します。特定のエンドポイント タイプまたはエンドポイントを識別するには、「endpoint type」または「endpoint,endpoint type」を追加します。

br-rem=<value>

既存のブランチを削除します。この引数は、複数のブランチを削除するために、複数回指定される場合があります。

値形式： **br-add** について指定された形式と同じです。

debug=<value>

コマンドのトレース ログ記録をオンにします。トレースするメッセージは、ファイル `$HOME/logs/etaclientYYYYMMDD.log` ファイルに書き込まれます。

値形式： 値「yes」はログ記録を有効にします。

desc=<value>

オブジェクトの任意の説明を提供します。加算操作で指定されない場合、これがホスト引数の値のデフォルトになります。

値形式： 任意の文字列。

domain=<value>

デフォルト ドメインを定義します。指定されない場合、認証引数で指定されたドメインがデフォルトとして使用されます。

この値のみがデフォルトになり得るので、このパラメータは常に省略できます。

host=<value>

コネクタ サーバを実行するホストの名前を定義します。

値形式： 任意の正しいホスト名または IP アドレス。

name=<value>

コネクタ サーバの名前を定義します。Add の中で指定されなければ、`csfconfig` は名前を割り当てて、作成された名前を表示します。

値形式： 大文字の英語文字 (A-Z)、小文字の英語文字 (a-z)、数字 (0-9)、ハイフン (-)、またはアンダースコア () から構成される、大文字と小文字を区別しない 1 字以上の文字列。

pass[=<value>]

コネクタ サーバ接続オブジェクトのパスワードが含まれるファイルを定義します。値が指定されない場合、プロンプトが表示されます。

値形式：任意の適切な OS ファイルパス。

重要：指定する必要があるパスワードは、そのコネクタ サーバをインストールしたときに入力したパスワード、またはインストール後にそのコネクタ サーバシステムで `pwdmgr` ユーティリティを実行してユーザが変更したパスワード。

port=<value>

オブジェクトのポート番号を定義します。これは、コネクタ サーバが接続をリスンするポートの有効な数である必要があります。

値形式：整数。

server[=<value>]

`addspec`、`modspec` および `remspec` コマンドで、コネクタ サーバによってサブされるプロビジョニング サーバの名前を定義します。特殊化が上書きで定義されたブランチ、特定のプロビジョニング サーバについては、`add` または `modify` コマンドで CS 設定オブジェクトに定義されたブランチ。

値形式：システムのホスト名コマンドによって返される、プロビジョニング サーバが実行されているホストの名前です。

注：コネクタ サーバ設定オブジェクトは、他のドメイン設定パラメータと共にプロビジョニング ディレクトリに格納されます。プロビジョニング マネージャでコネクタ サーバ設定パラメータを直接に表示できないか、または変更できない一方で、プロビジョニング マネージャ（システム タスク、ドメイン設定ボタン）を使用して既知のプロビジョニング サーバのリストを取得できます。リストを開くには、「Servers」パラメータ フォルダを開きます。そうすれば、既知のプロビジョニング サーバがリスト表示されます。

usetls[=<value>]

コネクタ サーバと通信するために TLS が使用されるべきかどうかを示します。値は操作の追加に対してのみのオプションであり、その場合、「yes」がデフォルトになります。

値形式：文字列の「yes」または「no」。

操作の追加が正常に完了すると、新しく作成された コネクタ サーバ接続オブジェクトの名前がリスト表示されます。 `name` パラメータがない場合、名前が生成されます。 以下に例を示します。

```
Created CS object with name = SA000
```

ほとんどの操作に対して、成功してもしなくても、ステータスおよびメッセージ（もしあれば）が表示されます。 以下に例を示します。

ホスト名、ポート番号、または `TLS` フラグが正常に変更されました。 ブランチ設定は正常に変更されました。

無効なコマンドラインパラメータなどいくつかのエラーについては、ステータスコードまたはサーバエラーメッセージが表示されません。 これらの場合で、エラーの単純なステートメントが表示されます。 以下に例を示します。

```
$ csfconfig add
No authentication information supplied.
For on-line help, use "--help [=<op>]
```

csfconfig コマンドの例

UNIX および CA Access Control エンドポイントタイプが、ホスト「`sunserver01`」上で実行されるコネクタサーバに処理され、残るエンドポイントタイプがホスト「`windows02`」上で実行されるコネクタサーバに処理されるよう指定するには、以下のコマンドを発行します。

各コマンド実行の際は、ユーザに `etaadmin` パスワードを求めるプロンプトが表示されます。

```
csfconfig add ¥
auth="etaadmin" ¥
br-add="UNIX - etc" ¥
br-add="UNIX - NIS-NIS plus Domains" ¥
br-add="Access Control" ¥
host="sunserver01" ¥
usetls="yes"
```

```
csfconfig add ¥
auth="etaadmin" ¥
br-add="@ " ¥
host="sunserver01" ¥
usetls="yes"
```

Solaris 上の C++ Connector Server

C++ Connector Server (CCS) を UNIX 上にインストールする場合、いくつかの制限事項があります。詳細については、「Windows および UNIX 上の CCS」を参照してください。

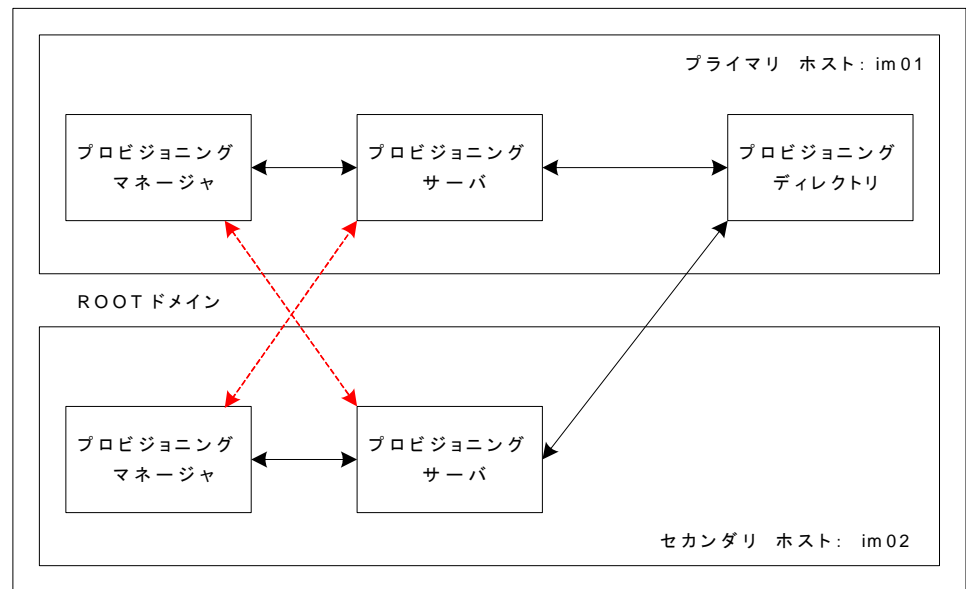
プロビジョニング クライアントのフェイルオーバー

ポリシー サーバ設定には、以下のタスクが含まれます。

- Windows クライアント層フェイルオーバーの設定
- ローカルプロビジョニングサーバと通信し、リモートプロビジョニングサーバにフェイルオーバーするためのプロビジョニング マネージャの設定

同じ [プロビジョニング マネージャ] ダイアログ ボックスを使用して、これらのタスクを両方とも各サーバ上で順番に実行します。

以下の図で示された設定では、プロビジョニング マネージャが 1つのプロビジョニングサーバにアイデンティティ プロビジョニングのリクエストを送信して、別のサーバにフェイルオーバーするようにします。



プロビジョニング マネージャは、デフォルト プロビジョニング サーバにリクエストを送信し、別のサーバにフェイルオーバーします。

ユーザ コンソール フェイルオーバーの有効化

CA Identity Manager サーバのアプリケーションサーバが失敗した場合、それはプロビジョニングサーバ更新を受信しません。その結果、CA Identity Manager ユーザ コンソールはプロビジョニング変更を表示しません。そのため、CA Identity Manager サーバに対して別の URL を設定する必要があります。

次の手順に従ってください:

1. プロビジョニング マネージャを起動します。
2. [システム] - [CA Identity Manager セットアップ] をクリックします。
3. クラスタ内の別のシステムのホスト名およびポートを入力します。
4. 環境を入力します。
これはプライマリ URL 上の環境と同じである必要があります。
5. [追加] をクリックします。

プロビジョニング マネージャ フェイルオーバーの有効化

第1および第2のホストサーバ上でプロビジョニング マネージャ フェイルオーバーを有効にできます。この手順が完了すると、各サーバが他方にフェイルオーバーするように設定されます。

次の手順に従ってください:

1. プロビジョニング マネージャを起動します。
2. [ファイル] - [基本設定] - [フェイルオーバー] タブを選択します。
3. [フェイルオーバーの有効化] チェック ボックスをオンにします。デフォルトでは、ローカルプロビジョニングサーバはすでに定義されています。
4. [追加] をクリックします。
5. リモートプロビジョニングサーバのホスト名を入力します。
たとえば、im01 で、im02 のサーバホストを入力します。im02 で、im01 のサーバホストを入力します。
6. LDAP/TLS ポート値として「20390」、LDAP ポート値として「20389」をそれぞれ入力します。
7. リストでエントリを上下に移動させることにより、優先順序を調節します。
8. [OK] をクリックします。
9. プロビジョニング マネージャを再起動して、変更を有効にします。

プロビジョニング マネージャ フェイルオーバーのテスト

以下の手順に実行することにより、クライアント フェイルオーバーの設定をテストできます。

次の手順に従ってください:

1. 1つのドメイン サーバ上の **CA Identity Manager - プロビジョニング サーバ** サービスを停止します。
2. このサーバインストール用のプロビジョニング マネージャを使用して、1つ以上の操作を発行します。

CA Identity Manager - プロビジョニング サーバ サービスのローカルな停止後、トラフィックはフェイルオーバー ドメイン サーバにフローします。それでない場合は、設定を確認し、再度テストを試みます。

付録 A: アンインストールと再インストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[CA Identity Manager をアンインストールする方法 \(P. 137\)](#)

[管理コンソールを使用した CA Identity Manager オブジェクトの削除 \(P. 138\)](#)

[ポリシーストアからの CA Identity Manager スキーマの削除 \(P. 138\)](#)

[CA Identity Manager ソフトウェア コンポーネントのアンインストール \(P. 140\)](#)

[WebLogic からの CA Identity Manager の削除 \(P. 142\)](#)

[CA Identity Manager の再インストール \(P. 143\)](#)

CA Identity Manager をアンインストールする方法

CA Identity Manager を完全にアンインストールするには、CA Identity Manager ソフトウェア コンポーネントを削除して、ユーザのアプリケーションサーバ内の CA Identity Manager 固有の設定をクリーンアップします。以下のチェックリストでは、CA Identity Manager をアンインストールする手順について説明します。



手順

1. 管理コンソールで CA Identity Manager オブジェクトを削除します。
 2. (オプション) SiteMinder を使用した場合は、ポリシーストアから CA Identity Manager スキーマを削除するか、またはポリシーサーバを削除します。詳細については、「*CA SiteMinder Web Access Manager Policy Server Installation Guide*」を参照してください。
 3. プロビジョニングディレクトリおよびプロビジョニングサーバをアンインストールするには、以下の場所から高可用性コマンドを使用します。
`Unpacked-Install-Package¥Provisioning¥Provisioning Directory¥highavailability`
 4. CA Identity Manager コンポーネントをアンインストールします。
 5. アプリケーションサーバから CA Identity Manager 設定情報を削除します。
-

管理コンソールを使用した CA Identity Manager オブジェクトの削除

ユーザが環境とディレクトリを設定するときに、CA Identity Manager によって自動的に作成されたオブジェクトを削除するには、管理コンソールを使用します。

1. 以下の管理コンソールを開きます。
`http://im_server:port/iam/immanage`
2. [環境] をクリックします。
3. 既存の [環境] のすべてのチェック ボックスをオンにします。
4. [削除] をクリックします。
5. [ディレクトリ] をクリックします。
6. 既存の [ディレクトリ] のすべてのチェック ボックスをオンにします。
7. [削除] をクリックします。

ポリシー ストアからの CA Identity Manager スキーマの削除

SiteMinder ポリシー サーバを使用していた場合は、ポリシー ストアから CA Identity Manager スキーマを削除します。

SQL Policy Store からの CA Identity Manager スキーマの削除

CA Identity Manager の SiteMinder の拡張機能をインストールしたシステムで、CA Identity Manager スキーマを削除します。スキーマを削除するコマンドのデフォルトの場所を以下に示します。

- SQL Server の場合:
C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\policystore-schemas\MicrosoftSQLServer
- Oracle の場合:
UNIX :
/opt/CA/IdentityManager/IAM_Suite/Identity_Manager/tools/policystore-schemas/OracleRDBMS

Windows : C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\tools\policystore-schemas\OracleRDBMS

LDAP ポリシーストアからの CA Identity Manager スキーマの削除

注: ポリシーストアとして Microsoft Active Directory または Microsoft ADAM を使用している場合、この手順を完了する必要はありません。これらのポリシーストアからスキーマオブジェクトを削除することはできません。ただし、それらを無効にできます。詳細については、ご使用のディレクトリのドキュメントを参照してください。

次の手順に従ってください:

- 以下のいずれかの操作を完了します。
 - ポリシーストアとして IBM Directory Server を使用している場合は、IBM Directory Server の Web 管理ユーザ インターフェイスで、スキーマ設定のファイルセクションからスキーマファイル V3.imsschema60 を削除します。その後、ディレクトリサーバを再起動します。

注: IBM Directory Server からこのスキーマを削除するのに必要な他の手順はありません。CA Identity Manager ソフトウェア コンポーネントの削除を続行します。
 - ポリシーストアとして CA Directory を使用している場合は、`dxserver_home¥config¥schema` から `etrust_ims.dxc` ファイルを削除します。ここで `dxserver_home` は CA Directory のインストール場所です。

注: CA Directory Server からこのスキーマを削除するのに必要な他の手順はありません。CA Identity Manager ソフトウェア コンポーネントの削除を続行します。
 - ポリシーストアとして別の LDAP ディレクトリを使用している場合は、手順 2 にスキップします。
- `policystore-schemas` フォルダに移動します。以下はデフォルトの場所です。
 - **Windows :** `C:¥Program Files¥CA¥Identity Manager¥IAM Suite¥Identity Manager¥tools¥policystore-schemas`
 - **UNIX :** `/opt/CA/IdentityManager/IAM_Suite/Identity_Manager/tools/policystore-schemas`
- ディレクトリからスキーマを削除するには、以下のテーブルの適切な LDIF スキーマファイルを使用します。

注: スキーマファイルの削除の詳細については、ご使用のディレクトリのドキュメントを参照してください。

ディレクトリタイプ	LDIF ファイル
Novell eDirectory	<code>novell¥novell-delete-ims8.ldif</code>

ディレクトリタイプ	LDIF ファイル
Oracle Internet Directory (OID)	oracle-internet-directory¥oracle-internet-directory-delete-ims8.ldif
Sun Java Systems (Sun One、iPlanet)	sunone¥sunone-delete-ims8.ldif

CA Identity Manager ソフトウェア コンポーネントのアンインストール

コンポーネントをインストールした各システムから CA Identity Manager コンポーネントをアンインストールするには、このセクションの手順を使用します。たとえば、CA Identity Manager サーバおよび CA Identity Manager 管理ツールを別個のシステムにインストールした場合は、両方のシステムからコンポーネントをアンインストールします。

Windows 上で CA Identity Manager ソフトウェア コンポーネントをアンインストールする方法

次の手順に従ってください:

1. [スタート] - [コントロールパネル] - [プログラムの追加と削除] に移動し、CA Identity Manager を選択します。
2. CA Identity Manager を選択します。
3. [変更と削除] をクリックします。

すべての非プロビジョニング コンポーネントがアンインストールされます。

4. プロビジョニング コンポーネントについては、個別のコンポーネントインストーラを使用してコンポーネントをアンインストールします。

注: 管理ツールでプロビジョニング マネージャをインストールしますが、このコンポーネントをアンインストールするにはプロビジョニング マネージャインストーラを使用します。

UNIX で CA Identity Manager ソフトウェア コンポーネントをアンインストールする方法

次の手順に従ってください:

1. 以下の場所に移動します。

```
IM_HOME/install_config_info/im-uninstall
```

2. 以下のスクリプトを実行します。

```
sh uninstall.sh
```

画面の指示に従います。

3. プロビジョニング コンポーネントについては、個別のコンポーネント インストーラを使用してコンポーネントをアンインストールします。

WebLogic からの CA Identity Manager の削除

CA Identity Manager ソフトウェアのアンインストール後、WebLogic アプリケーション サーバから CA Identity Manager の設定を削除できます。

次の手順に従ってください:

1. WebLogic アプリケーション サーバを必ず実行中にしておきます。
2. Weblogic 管理コンソールを起動します。
3. メッセージング領域で以下の JMS リソースを削除します。
 - imJMSModule および wpJMSmodule
 - wpJMSserver および Hawaii、または WebLogic をインストールした場合に手動で作成したすべての JMS サーバ
4. [Deployments] 領域で、以下のアプリケーションを削除します。
 - castyles5.1.1.ear
 - iam_im.ear
5. [サービス] 領域で、以下のリソースを削除します。
 - IAM Suite Mail セッション
 - CA Identity Manager によってインストールされた以下の JDBC データソース
 - DataSource-archive
 - DataSource-audit
 - DataSource-rs
 - DataSource-os
 - DataSource-tp
 - DataSource-wf

CA Identity Manager の再インストール

再度インストーラを実行することにより、CA Identity Manager ソフトウェア コンポーネントを再インストールできます。ユーザがインストーラを実行するとき、インストーラはシステムにインストール済みの CA Identity Manager コンポーネントを検出します。システムに当初インストールしたのと同じコンポーネント、または元々システムになかった他のコンポーネントを、再インストールする場合があります。

注: CA Identity Manager 管理ツールの再インストールは、Administrative Tools ディレクトリ内のファイルをすべて置換します。カスタム ファイルへの上書きを防ぐには、管理ツールがインストールされているディレクトリをバックアップします。

付録 B: 無人インストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Administrative UI の無人インストールを実行する方法 \(P. 145\)](#)

[設定ファイルの変更 \(P. 145\)](#)

[設定ファイルの形式 \(P. 150\)](#)

Administrative UI の無人インストールを実行する方法

次の手順に従ってください：

1. `im-installer.properties` ファイルを変更します。
2. 以下のコマンドを実行します。
 - **Windows** の場合：
`ca-im-release-win32.exe -f im-installer.properties -i silent`
 - **UNIX** の場合：
`./ca-im-release-sol.bin -f im-installer.properties -i silent`

設定ファイルの変更

無人 CA Identity Manager インストールを有効にするには、テキストエディタを使用して、`im-installer.properties` 設定ファイルの設定を変更します。ファイルのデフォルトパラメータは、最初の CA Identity Manager インストール中に入力された情報を反映します。必要に応じてデフォルト値を変更します。

設定ファイルを変更する場合は、以下の点に注意してください。

- ファイルは最初のインストールまたは設定中に入力した値をすべて保持するので、オリジナルを変更する前にインストーラ プロパティ ファイルのバックアップコピーを作成します。
- パラメータ名、等号 (=)、パラメータ値の間に余分なスペースを追加しないでください。
- すべての Windows のディレクトリ名には、単一の円記号ではなく、ダブル円記号またはスラッシュが含まれる必要があります。

初期選択

基本的なインストールの選択項目については、以下のパラメータの値を入力します。

パラメータ	命令
DEFAULT_NEW_INSTANCE_DISPLAY_NAME	これがフレッシュ インストールである場合は、「New Installation」と入力します。アップグレードの場合は、これは空白になります。
DEFAULT_COMPONENTS	以下の 1 つまたは複数のコンポーネントを入力します。 <ul style="list-style-type: none">■ Server - CA Identity Manager サーバ■ Exten - ポリシー サーバに対する拡張■ Admin - CA Identity Manager 管理ツール■ Provision - プロビジョニング サーバ■ Directory - プロビジョニング ディレクトリ 複数のコンポーネントをインストールする場合は、カンマでコンポーネントを区切ります。
DEFAULT_INSTALL_FOLDER	CA Identity Manager サーバ をインストールするディレクトリを入力します。
DEFAULT_GENERIC_USERNAME	インストールされている CA Identity Manager コンポーネントの汎用なログイン情報。
DEFAULT_GENERIC_PASSWORD	インストールされている CA Identity Manager コンポーネントの汎用パスワード情報。
DEFAULT_FIPS_MODE	FIPS 140-2 コンプライアンスを有効にする場合は選択します。
DEFAULT_FIPS_KEY_LOC	FIPS キーの場所へのパスを入力します。

インストールプログラムは、インストールしているコンポーネントに適用されないパラメータを無視します。たとえば、ユーザが DEFAULT_COMPONENTS を Exten に設定した場合、DEFAULT_PS_ROOT と DEFAULT_USE_SITEMINDER のパラメータのみが使用されます。

プロビジョニング コンポーネント

プロビジョニングをインストールする場合は、以下を入力します。

パラメータ	命令
DEFAULT_CONFIG_REMOTE_PROVISIONING	リモートプロビジョニングディレクトリに接続している場合は、「true」を入力します。
DEFAULT_DEPLOYMENT_SIZE	プロビジョニングディレクトリ展開のサイズを入力します。
DEFAULT_DIRECTORY_IMPS_HOSTNAMES	Directory に接続しているすべてのプロビジョニングサーバのホスト名を入力します。
DEFAULT_DOMAIN_NAME	既存のプロビジョニングドメインがない場合、「im」を入力します。
DEFAULT_DIRECTORY_HOST	プロビジョニングディレクトリがインストールされているシステムのホスト名を入力します。
DEFAULT_DIRECTORY_PORT	プロビジョニングディレクトリがインストールされているシステムのポート番号を入力します。
DEFAULT_DIRECTORY_PASSWORD	プロビジョニングディレクトリのパスワードを入力します。

CA Identity Manager サーバ

CA Identity Manager サーバをインストールする場合は、以下の値を入力します。

パラメータ	命令
DEFAULT_APP_SERVER	Weblogic を入力します。
DEFAULT_APP_SERVER_URL	CA Identity Manager をホストするアプリケーションサーバの完全 URL (ポートを含む) を入力します。
DEFAULT_JAVA_HOME	CA Identity Manager 用の JRE または JDK へのパス
追加のデータベースパラメータ	
DEFAULT_DB_HOST	CA Identity Manager データベースをホストするシステムのホスト名を入力します。

パラメータ	命令
DEFAULT_DB_PORT	CA Identity Manager データベースをホストするシステムのポートを入力します。
DEFAULT_DB_NAME	CA Identity Manager データベースの名前を入力します。
DEFAULT_DB_USER	CA Identity Manager データベースの管理用ユーザ名を入力します。
DEFAULT_DB_PASSWORD	CA Identity Manager データベースの管理者ユーザのパスワードを入力します。
DEFAULT_DB_TYPE	CA Identity Manager データベースに使用されたデータベースのタイプを入力します。

追加の WebLogic パラメータ

DEFAULT_BINARY_FOLDER	WebLogic をインストールしたディレクトリの完全なディレクトリパスを入力します。
DEFAULT_DOMAIN_FOLDER	CA Identity Manager のために作成した WebLogic ドメインの完全なパスとディレクトリ名を入力します。
DEFAULT_SERVER_NAME	CA Identity Manager 用に作成した WebLogic サーバインスタンスの名前を入力します。
DEFAULT_BEA_CLUSTER	WebLogic クラスタのクラスタ名を入力します。

SiteMinder ポリシー サーバを使用している場合は、以下を入力します。

パラメータ	命令
DEFAULT_PS_HOST	ポリシー サーバの完全修飾ドメイン名を入力します。
DEFAULT_PS_USER	ポリシー サーバ管理者のユーザ名を入力します。

パラメータ	命令
DEFAULT_PS_PW	ポリシー サーバ管理者のパスワードを入力します。

SiteMinder の拡張機能

SiteMinder ポリシー サーバの拡張機能をインストールするには、以下を入力します。

パラメータ	命令
DEFAULT_PS_ROOT	(Solaris のみ) ポリシー サーバがインストールされているディレクトリを入力します。
DEFAULT_USE_SITEMINDER	実装で SiteMinder ポリシー サーバを使用している場合は、「true」を入力します。

設定ファイルの形式

im-installer.properties ファイルは、CA Identity Manager インストール ディレクトリにあります。以下に例を示します。

- **Windows** : C:\Program Files\CA\Identity Manager\install_config_info
- **UNIX** : /opt/CA/IdentityManager/install_config_info/im-installer.properties

CA Identity Manager インストール中に作成された im-installer.properties ファイルの例を以下に示します。

```
#####  
### 12.6.4 インストーラ 用のサイレント入力プロパティ ファイル ###  
#####  
  
# コンポーネント リスト  
# 有効な値 (カンマで区切られた 1 つ以上の値) : Server, Exten, Admin, Provision, Directory  
DEFAULT_COMPONENTS=Server, Admin, Provision, Directory  
  
# インストールし フォルダ  
# このフォルダのサブフォルダにすべての製品がインストールされます。  
# これはユーザによって選択された親製品ルートです。  
# たとえば、C:\Program Files\CA\Identity Manager  
DEFAULT_INSTALL_FOLDER=C:\Program Files (x86)\CA\Identity Manager  
  
# 一般ログイン情報  
DEFAULT_GENERIC_USERNAME=imadmin  
# DEFAULT_GENERIC_PASSWORD=<サイレント インストールの場合は、ここに一般的なユーザ パスワードを挿入し、行をコメント解除する>  
  
# プロビジョニング サーバおよびプロビジョニング ディレクトリの情報  
# リモートでインストールされたプロビジョニング ディレクトリにプロビジョニング サーバを設定する (true/false)  
DEFAULT_CONFIG_REMOTE_PROVISIONING=false  
  
# ユーザのニーズに適する展開タイプを選択する (1、2、3、または 4) : 1. コンパクト、2. 基本、3. 中規模 (64 ビットのみ)、4. 大規模 (64 ビットのみ)  
DEFAULT_DEPLOYMENT_SIZE = 1  
DEFAULT_DIRECTORY_IMPS_HOSTNAMES=im-weblogic11  
DEFAULT_DOMAIN_NAME=im  
DEFAULT_DIRECTORY_HOST=im-weblogic11  
DEFAULT_DIRECTORY_PORT = 20394  
# DEFAULT_DIRECTORY_PASSWORD=<サイレント インストールの場合、ここにプロビジョニング コンポーネントで使用されるパスワードを挿入し、行をコメント解除する>  
  
# Identity Manager、管理ツール、プロビジョニング マネージャ、およびプロビジョニング サーバの FIPS 140-2 準拠モード (true/false)  
DEFAULT_FIPS_MODE=false
```

```
# FIPS キー ファイルの完全なパス。たとえば、C:¥¥¥¥Program Files¥¥¥¥FIPSkey.dat
DEFAULT_FIPS_KEY_LOC=
```

```
# Identity Manager アプリケーション サーバ情報
#   アプリケーション サーバ
#   有効な値: JBoss、Weblogic、WebSphere
DEFAULT_APP_SERVER=WebLogic
DEFAULT_APP_SERVER_URL=http://im-weblogic11.ca.com: 7001
```

```
# JBOSS アプリケーション サーバ用 JDK へのパス。他のアプリケーション サーバについては、入力
する必要はありません。
DEFAULT_JAVA_HOME=C:¥¥PROGRA~1¥¥Java¥¥JDK16~1.0_2
```

```
#JBoss 情報
DEFAULT_JBOSS_FOLDER=C:¥¥0racle¥¥Middleware
DEFAULT_JBOSS_PROFILE=
DEFAULT_JBOSS_SERVER_ID=
```

```
# Weblogic 情報
DEFAULT_BINARY_FOLDER=C:¥¥0racle¥¥Middleware¥¥wlserver_10.3
DEFAULT_DOMAIN_FOLDER=C:¥¥0racle¥¥Middleware¥¥user_projects¥¥domains¥¥base_domain
DEFAULT_SERVER_NAME=AdminServer
```

```
# Weblogic 9 および 10 のみ:
DEFAULT_BEA_CLUSTER=
```

```
# WebSphere 情報
DEFAULT_WEBSPHERE_FOLDER=C:¥¥0racle¥¥Middleware
```

```
# WAS_NODE 値: ¥¥installedApps¥¥ または ¥¥config¥¥cells¥¥¥¥nodes¥¥。これらは同じ値で
す。
DEFAULT_WAS_NODE=
```

```
# WAS_SERVER 値: ¥¥config¥¥cells¥¥¥¥nodes¥¥¥¥servers¥¥
DEFAULT_WAS_SERVER=
```

```
# WAS_CELL 値: ¥¥config¥¥cells¥¥
DEFAULT_WAS_CELL=
```

```
# WAS_PROFILE 値: ¥¥profiles¥¥
WAS_PROFILE=
```

```
# WAS_CLUSTER 値: ¥¥config¥¥cells¥¥¥¥clusters¥¥
DEFAULT_WAS_CLUSTER=
```

```
# ポリシー サーバ情報
DEFAULT_PS_HOST=localhost
DEFAULT_PS_USER=SiteMinder
```

```
# DEFAULT_PS_PW=<<サイレント インストールの場合、ここで PS Admin ユーザ パスワードを挿入し、  
行をコメント解除する>>  
  
# 8.1 移行  
# SiteMinder エージェント名  
DEFAULT_AGENT_NAME=imadmin  
# SiteMinder 共有秘密  
# DEFAULT_AGENT_PW=<<サイレント インストールの場合、ここで PS の共有秘密を挿入し、行をコメン  
ト解除する>>  
# 自動的に移行します。有効な値： true または false  
DEFAULT_MIGRATE_DIR_ENV=  
# エクスポート先ディレクトリ  
DEFAULT_DIR_ENV_EXPORT=  
  
# ポリシー サーバ拡張情報  
# CsSmPs の場所-<インスタンス名> フォルダ  
DEFAULT_PS_ROOT=  
# SiteMinder ポリシー サーバと SiteMinder Web エージェントを使用すると、  
# CA Identity Manager 環境に高度なセキュリティを提供できます。有効な値： true または false  
DEFAULT_USE_SITEMINDER=false  
  
# データベース情報  
DEFAULT_DB_HOST=im-weblogic11  
DEFAULT_DB_PORT = 1433  
DEFAULT_DB_NAME=im  
DEFAULT_DB_USER=sa  
# DEFAULT_DB_PASSWORD=<<サイレント インストールの場合、ここにデータベース パスワードを挿入し、  
行をコメント解除する>>  
  
# 許容可能な値： mssql2005 または oracle10  
DEFAULT_DB_TYPE=mssql2005  
  
# WAS メッセージ エンジン データベース情報  
DEFAULT_ME_HOST=  
DEFAULT_ME_PORT=  
DEFAULT_ME_NAME=  
DEFAULT_ME_USER=  
# DEFAULT_ME_PASSWORD=<<サイレント インストールの場合、ここにデータベース パスワードを挿入し、  
行をコメント解除する>>  
DEFAULT_ME_SCHEMA=IBMSSIB  
  
# IM8.1sp2 からのアップグレード  
# データ ストアを別々のサーバに置いているか、またはデータ ストアを別々の  
## サーバにインストールしたい場合は、下記で指定できます。 または、すべてのデータ ストアを  
# 同じサーバに置きたい場合は、上記の DEFAULT_DB_* プロパティを変更してください。  
  
# オブジェクト ストア データベース情報  
#DEFAULT_OS_DB_HOST=  
#DEFAULT_OS_DB_PORT=
```

```
#DEFAULT_OS_DB_NAME=  
#DEFAULT_OS_DB_USER=  
# DEFAULT_OS_DB_PASSWORD=<<サイレント インストールの場合、ここにデータベース パスワードを挿  
入し、行をコメント解除する>  
  
# タスク永続性データベース情報  
# DEFAULT_TP_DB_HOST=  
# DEFAULT_TP_DB_PORT=  
# DEFAULT_TP_DB_NAME=  
# DEFAULT_TP_DB_USER=  
# DEFAULT_TP_DB_PASSWORD=<<サイレント インストールの場合、ここにデータベース パスワードを挿  
入し、行をコメント解除する>  
  
# 監査データ ストア情報  
# DEFAULT_AUDIT_DB_HOST=  
# DEFAULT_AUDIT_DB_PORT=  
# DEFAULT_AUDIT_DB_NAME=  
# DEFAULT_AUDIT_DB_USER=  
# DEFAULT_AUDIT_DB_PASSWORD=<<サイレント インストールの場合、ここにデータベース パスワード  
を挿入し、行をコメント解除する>  
  
# スナップショット データベース情報のレポート  
# DEFAULT_RS_DB_HOST=  
# DEFAULT_RS_DB_PORT=  
# DEFAULT_RS_DB_NAME=  
# DEFAULT_RS_DB_USER=  
# DEFAULT_RS_DB_PASSWORD=<<サイレント インストールの場合、ここにデータベース パスワードを挿  
入し、行をコメント解除する>  
  
# ワークフロー データベース情報  
# DEFAULT_WF_DB_HOST=  
# DEFAULT_WF_DB_PORT=  
# DEFAULT_WF_DB_NAME=  
# DEFAULT_WF_DB_USER=  
# DEFAULT_WF_DB_PASSWORD=<<サイレント インストールの場合、ここにデータベース パスワードを挿  
入し、行をコメント解除する>  
  
# ワークフロー DB の自動アップグレード  
DEFAULT_UPGRADE_WF_DB=  
  
# タスク永続性の自動移行  
DEFAULT_MIGRATE_TP=
```


付録 C: インストール ログ ファイル

ログ ファイルは、インストール パッケージのアンパック 場所に基づいて格納されます。以降の例では、最上位ディレクトリがデフォルトの場所と異なる場合があります。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Windows のログ オンファイル](#) (P. 155)

[UNIX のログ ファイル](#) (P. 156)

Windows のログ オンファイル

CA Identity Manager インストール中に問題が発生した場合は、以下のログ ファイルを参照してください。

C:\Program Files\CA\Identity Manager\IAM Suite\Identity Manager\caiamsuite.log

CA Identity Manager サーバ インストーラ ログは以下のデフォルトの場所へ書き込まれています。

- C:\Program Files\CA\Identity Manager\install_config_info (32 ビット システム)
- C:\Program Files (x86)\CA\Identity Manager\install_config_info (64 ビット システム)

プロビジョニング インストーラ ログはユーザの Temp ディレクトリへ書き込まれ、*Install-Directory*_uninst ディレクトリへコピーされます。

例:

C:\Documents and Settings\user\Local Settings\Temp\imps_server_install.log

UNIX のログ ファイル

CA Identity Manager インストールの実行中に問題が発生した場合は、以下の場所で `caiamsuite.log` ファイルを参照してください。

`/opt/CA/IdentityManager/`

CA Identity Manager サーバインストーラ ログは以下のデフォルトの場所へ書き込まれています。

`/opt/CA/IdentityManager/install_config_info`

プロビジョニング インストーラ ログはユーザの `Temp` ディレクトリへ書き込まれています。

付録 D: CA Identity Manager によって開始される Windows サービス

ユーザが CA Identity Manager のすべてのコンポーネントをインストールして起動したときに、Windows 上で開始されるサービスを以下に示します。

- CA Directory *hostname-impd-co*
- CA Directory *impd-inc*
- CA Directory *impd-main*
- CA Directory *impd-notify*
- CA Directory *impd-router*
- CA Identity Manager Connector Server (C++)
- CA Identity Manager Connector Server (Java)
- CA Identity Manager Provisioning Server
- Enterprise Common Services (Transport)
- Enterprise Common Services GUI Framework
- Enterprise Common Services Store-And-Forward Manager

このサービスのリストは、トラブルシューティングに役立つことがあります。